

---

# Back to the Lifetime

新田和美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Back to the Lifetime

### 【Nコード】

N5647H

### 【作者名】

新田和美

### 【あらすじ】

人生の悔いを精算する為に、彼らは立ち向かう

彼らが動く事で、人は救われその先へ進む。

審判達に光が当たる、まったく新しいストーリーにあなたを誘います！

## 初めに

死の間際に

もし人生の精算が出来るなら、

あなたは何をしますか？

## 忠告

これは、ドラマ“ロス：タイム・ライフ”のファンフィクション…  
“二次創作”です。

審判が生きる世界と、我々の生きる世界の相違や

審判の年齢ばらつきなど、

ドラマと違う点が多々あります。

ご了承承願います。

-  
主に活躍する審判達の名前と

実況を並べます

安斉主審

加藤・須藤副審

須川予備審

実況：青嶋達也

審判にも光が当たる、

ACT Cityの名作が

今ここに！

-

FILE i System Engineer (前書き)

加藤副審、初めての仕事 あの事件の前にもし、……彼らがいたの  
だとしたら……

FILE・i System Engeneer

人には必ず始まりがあれば、終わりがやってくる。

People is sure that the start  
and the end.

その時、使わされているのは天なのか地なのかは定かではない彼らがどこからともなく現れる。

そして、人世の悔いを清算させてくれるのだ

第一節

System Engineer

「おい、加藤。忘れモン」

首に赤い笛をぶら下げた黄色いユニフォームを着た彼は、旗を持っていた。

「す、すいません！安齋主審！！」

「まあ、初めてなんだからさ、加藤君は」

無理もない。体全体ががちに固まっているのがよくわかった。

「甘いな、須藤。副審たる者はしっかりしなきゃいけないんだ」

肩に旗を置いてストレッチをしていた須藤は加藤に向けてちよつと笑った。（ああ見えて結構情に厚い人だから、安齋さん）

「安齋さん、今日の対象者リストです」

タイムボードをセットする黒いユニフォームを着用した人が、安齋主審に個人情報を渡す。

伊川 正也（27）

職業：システムエンジニア  
状況：爆死<sup>テロ</sup>

趣味：ゲーム製作

特技：柔道四段

ロス・タイム；1：30；27・12



正也は暇だった。昼休みのため、オフィスには誰も居ない。

カロリーメイツを口に運び、趣味であるゲーム作成に精を出す。その為、パソコンを見る機会が人よりかなり多いが、正也はなんと、耳を音楽で塞ぎ、目を癒すために、アイピローを乗せたままで奇妙奇天烈なプログラム言語が超速で打ち込まれていく。

「あゝ…どうだ？」アイピローを外して、確認をする。うん、上出来だ。終わりの定義をする文書を打ち込んで、ソフトが出来上がった。

「できたあ！」

デモで軽く、屋上のカメラに侵入してみる。画面はすぐに、カメラ映像に切り替わった。

「ここまで良くやったな、俺！じゃ、早速兄貴に連絡を…」と

そういうと、背広から携帯を取り出して、これまた早打ちでメールを書いていく。

“出来たよ、兄さん！帰ったら一緒にやろうぜ！”

2001.9.11。アメリカでテロが発生する、その前に一人の人間がロスタイムですばらしい功績をあげた。

審判達は、これから先の全てを記憶した唯一の証言者である。

「飛行機到達まで未だ間があったが、彼らは足を踏み出した それ

が、これからのアメリカを支える事になるなど、予想もせずに」

ピーーッ！

正也のロスタイムが、今始まった。

「んあ？」

青嶋実況「さあ、伊川正也のロスタイムは一時間三十分です！」

小本解説「今回は大規模なテロによる爆死なのですが、…未だ飛行機は目で捉えられませんね」

青嶋実況「ええ、ですが…彼の作ったゲームの画面で確認は出来るかと」

妙な声が聞こえてきた。だが、審判たちから発せられた言葉でないことはわかった。声の主を探そうとするが、影も形もない。

正也は声の言うとおりにパソコンの画面をじっと見る。まだかなり遠くではあるが、飛行機が見える。

「れ？こんな航路の飛行機あったっけか？」

その飛行機はこちらを真つ直ぐ捉えていた。

後ろにあった人の気配を辿り、振り返る。そこには黄色のユニフォームと黒いユニフォームを纏った審判が経っていた。

「あんたら、どこから入ってきたの？」

審判達は顔を見合わせる。一様に窓を指す彼ら。

「住居不法侵入？…え、そうじゃない??」

安齋が首を横に振り、飛行機を指し、窓を指した。

「え？飛行機が??突っ込んでくる??」

安齋は頷く。

「何でだよ？」

須藤線審がスケッチブックに文字を書き、正也に見せた。

“大規模なテロです”

「テ、テロ?!」

正也は暫く、口を噤んでいたが、掲示板を見て時間が無い事に気づいた。

「ってことは、この時間って…もしかして僕の最後の時間って訳?」

正也は走り出した。虚を疲れた審判達も急いで後を追う。

青島『いきなり走り出しました、伊川さん!』

小本『システムエンジニアという仕事柄、頭の回転が速いのでしょう。ですが、どこに向かっているのでしょうか?』

「そもそも何だっつて飛行機が突っ込んでくるのがテロなんだよ?」

周りの時間が止まっているため、ほかの人は静かだったし、正也に気づきもしなかった。だから正也は審判たちに向かってはつきりと言っても怪しまれることはなかった。

“飛行機は一台だけじゃない”急いで書いたため、文字が荒れていたが、確実にそう読めた。

「はっ?」正也の足が止まった。

横から不意にやってきた人を避ける。「冗談じゃねえよっ!!」

そう叫んだ人の後ろにも、審判たちが張り付いて並走していた。

次の瞬間、後ろから審判たちを引き連れた一部の人間が廊下を猪突猛進に突き進んできやがった。

「うおおあ!」当然ながら吹っ飛ばされる正也。審判たちは廊下の壁にいつの間にか張り付いていた。

青島『さながら、鬪牛の力に打ちひしがれた人のように、伊川正也は動こうとしません』

正也にはどうすることもできない。きっとこれがきっかけで、アメリカはどこかの国と戦争を起こすのだろう。

今走りぬけた人たちにも、冗談じゃないといって逃げていった人も、どうすることもできない。

小本『彼が作ったソフトを改良すればもっといろんな役に立ちそうです。』

その解説の声に、正也はひとつの案を脳裏に打ち出した。ガバツと起き上がり、元の場所へ戻る。

「あんた最高だっ！！今のでひとつ良い提案が浮かんだぜっ！！」

またも虚をつかれた審判たちも急いで正也の後を追う。

小本『私、褒められちゃいました（笑）』

青島『図に乗らないでください、小本さん（冷）』

天のそんな声に思わず顔をほころばせる正也だが、頭の中ではすでに改良案が組み立てられていた。

電光掲示板は、須川に背負われていた。

1 : 17 ; 28 . 15

「20分で改良しちやる」

思わず田舎の方言が出る。この明るい声に審判たちにも笑顔が伝染した。

ワイシャツの袖を捲り上げ、先ほどとは比べ物にならない早業でプログラム言語を打ち込んでいく。

打ち込んでいる作業中に、携帯がバイブした。開けてスピーカーボタンを押す。

“あ、正也？メール見たぞ”

「兄貴、ナイスタイミング！！これから言うことをよく聞いてほしい」

後ろで思い出したように警告の笛が聞こえた。

ピッ、ピッ！

警告の意味を知らせるように、天から声がまた響いた。

青島『自分が死んだことを伝えるのはNGであるとの警告です』

小本『もしこの警告を無視して言った場合はイエローカード、イエ

ロー累積二枚もしくはレッドカードが提示された瞬間生まれ変われません』

青島』と、同時に強制退場 すなわちその場でロスタイム無効となります』

「（違って）管制塔にハッキングしてくんない？それも今すぐに！理由は聞くな！」

“は？何だよそれ…二十秒でやっちゃるけど”

「頼んだぜっ！…いよし！」

追加したプログラム言語を保存し、もう一度起動させる。

「今からこっちのデータをそっちのサーバにリンクさせっから、そのデータを管制塔に転送してくれね？」

言っが早いか、データをあっという間に自宅のサーバにリンクさせた。

“転送したぜ”

「さすが兄貴！仕事が速いぜ」

今度はパソコンにイヤホンマイクをつけて、管制塔の通信に割り込んだ。

「Urgent! Their airplane thrust  
sit in the International Trade  
Center building! How does the  
communication with their air  
plane become it?」

(緊急事態だ！国際貿易センタービルに飛行機が突っ込んでくる！飛行機との通信はどうなってるんだ！？)

“I don't KNOW! The communication  
on has been broken off! Who are  
you?”

(分からない！通信が途絶えてしまったんだ！君は誰だ？)

「There is no time to answer it  
! Please tell me the access code  
of the screen in the airplane  
network once!」

(それに答える時間はありません！至急飛行機内の映像のアクセスコードを教えてください！)

向こうにためらいの音が聞こえた。当然だと思う。飛行機との通信が取れないのに、今度は飛行機内の映像のアクセスコードを聞いてくる輩を向こうの仲間と思ってしまふのは仕方のないことだ。



だが、そんなことを言っている内に、データの転送が完了したらしく、画面が突然切り替わったので向こうは仰天したようだ。

「Have not you been believed yet even if the airplane that has moved to the screen is seen?」  
(その映像に移っている飛行機を見てもあなた方はまだ信じられませんか?)

「Is our cooperation necessary for you?」  
(君はわれわれの協力が必要なのか?)

沈黙の後、声が変わった。管制塔の局長のようだ。

「What can be seen to happen at least to confirm the airplane projected on to the screen has crashed the building?」

(スクリーンに映し出されている飛行機がビルに衝突することが予測できるように、少なくとも何が起こったのか見ることはできません。)

「Yes, Sir. The access code is 1917-2528 and 4958-2679」。  
(オーケー。アクセスコードは1917-2528と4958-2679だ。)

言われたコードを入力すると、管制塔の映像と自分の映像がすぐさま切り替わる。

リンクされた画面から、黒い覆面をした不審者が何人もいた。

イヤホンマイクをはずして、映像とにらめっこする。

「こいつらが、飛行機をジャックしたんだ…そして貿易センタービルに突っ込ませる……」

正也が作成していたプログラムは、警察に寄贈しようとしたもの。実際に犯人と交渉出来る優れ物でどんな物にも互換性がある。

「テロを止めたら俺は死なないけど、たぶんそれはNGだから…この実行犯が何者なのかを把握しなくちゃ」

青嶋『素晴らしい理解力と機動力!』

小本『SEよりFBIの方が向いているのでは?』

正也は乗客名簿を呼び出し、不審な名前を確認した。そこで、今度はCIAのサーバと繋げるべく、兄貴の圭輔にまた電話をした。

“CIA！？正也、正気かっ？！”

「おかしいと思わないか？奴等はどうしてこの国に対してそんな恨みを持つてるのかって…」

『恨みを持つ人ならありえるってか、それで指名手配の人間を探るためにCIAか』

「ああ、…兄貴、後は頼んだぜ」

正也は先程まで繋げっ放しの携帯電話を閉じた。

プログラムのもう一つの機能は、仮面などをしても身許が分かる声紋判別の機能。変声機にかけたとしてもすぐブラッシュアップ出来てしまう。

僅かな声からそれはすぐに分かった

国籍はイラクだ。

イラクといえばアメリカと何かと争いが絶えない国だった。今回のテロで戦争が始まるんだと正也が悟る。

調べている間に十五分がすぎていた。

「警察には…だよな」

正也が全てを言い終わらない内に、安齋主審は首を横に振った。

その時、電話がバイブした。

非通知だが、正也は誰だかすぐに分かった。

「Hello?」(もしもし)

『Is your name MASAYA IGAWA?』(君が伊川正也だね?)

「Yep」(はい)

『I'm Jackson from CIA. Are you sure? The plain attack to the TRADE CENTER BUILDING?』(CIAのジャクソンだ。本当か? 飛行機が貿易センタービルにぶつかるというのは...)

「Sure. Look up NEW YORK CITY sky」(はい、ニューヨークの空を見てください)

『Tell me the truth. Why do you think so?』(…教えてくれ、何故そんな事を我々に?)

正也は正直に告げた。それは第三者の意見に相当した。

「This country may be starting war. But we don't wanna this. War is produced by ONLY hurtful」

(この国はいずれ戦争を興します。我々(センタービルで無くなって逝く不特定多数の人達)はそれを望んでいません。戦争は憎しみしか生まれません)

安齋主審は笛を吹き、イエローカードを出そうとしたが、須川TKがそれを制止した。

安齋はビックリした。須川の目は有無を言わせない迫力があつた。  
(必要な事だ)

『：All right, Masa. Thanks for your help.』

「You're welcome」

『Your program is perfect.』

「Thanks」

『：bye.』

「Bye」

電話を切ると今度は兄貴から電話が入る。

「何、兄貴？」

『どうしたもこうしたもねえよ！テレビで見たんだよ、飛行機が賢易センタービルにぶつかるとも知れねえってどー言う事だよ！？』

「：兄貴、後は任せた」

『おい、正也っ……………』

正也は電話を切り、電源を落とした。

話している間に、時間は一時間あまり経過していた。

後 10分もなかった。

フーツと正也は溜息を吐いて審判達の方を見やった。

「これで…よかったんだよな」

窓のほうをちらりと見ると 飛行機がすぐそこまで迫っていた。

管制塔とCIAにプログラムは転送した。ここには何も残っていない。

ただ、廊下で騒がしい声が聞こえ始めていた。同じ時間にロスタイムを生きた者たちの声だろう。

「今回のこれで、いったい何人もの犠牲者が出るんだろうな…」

戦争なんてして欲しくない。それはビルを支えてきた人間たちを愚弄することになる。

「…きっと、俺の力は無駄だったかもしれない。無視されるかもしれない。…だけどやれるだけの事はやったつもりだ」

審判たちはそれに同意するように頷いてくれる。

どこからともなく、歓声が聞こえる。俺の功績を祝ってくれるというのか…？

椅子に凭れかかり、目を閉じた。まるでサッカーの中心で寝転がっているMVPの如く、歓声が盛り上がる。

正也の目には涙が溢れていた。顔が綻ぶ。喜びに満ち足りた表情は、60秒前に掻き消えた。

正也は窓を突き破って到達する飛行機を肌で感じながら、吹っ飛ばされた。

ピッ、ピッ、ピッ、ピーーッ！

遅れて周囲に爆音が轟いた。

ドオオオオオオン！

F i n n .

-



## FILE : i System Engeneer (後書き)

Postscript .

いきなりすごいテーマからのスタ

ートとなりました。厳格な安斎主審・古参の須藤副審・新人の加藤副審・影の審判、須川タイムキーパー（以下、TK）が面白い味出しています。

総合管理人の涼華です。初作品に関して色々変えなければと思ったら全て変える形になりました。しかし、こちらのほうが今しつくり来るのは確かです。皆さんの意見をお待ちしております。ではまた次回。

8 - 2 1 ( 2 0 0 8 . 4 . 4 大幅書直 )

2 0 0 9 . 8 . 1 ( N

OS 投稿 )

FILE・2 Negotiator (前書き)

ドラマ“交渉人”から派生した作品。末井は感情をなくした優秀な交渉人だった…

FILE・2 Negotiator

「昨日のドラマ見た？」

加藤が須藤に聞いた。

「ああ、交渉人か」

「いやあ、いつもハラハラしちゃいますよ」

「甘利ってやっぱり…」

「だと思っんですよね…でも何でだろ？」

「仕事の前に私的な事は話さない！」

加藤はビクツとして後ろを見る。安斎主審が鬼の形相をしていた。

「は、はいっ…！」

「まーそんなに硬くならなくていいと思うけど…安斎さん、今回の人です」

須川が安斎を窘めながら本日の対象者の個人情報を渡す。

末井 隆弘（35）

職業：交渉人（警視庁）

状況：銃殺

特技：小説書き

拳銃：上

ロス・タイム：3：28；45・10（公式）

「交渉人編」

ここ最近、イージス艦の不注意などに霞んでしまったが、事件には事欠かなかった。

冷たく悴んだ手を缶コーヒーで暖めながら、部屋に入る末井隆弘。

「末井主任、おはようございます！」

恐縮しながら挨拶したのは、一か月前に入ったばかりの葛西唯良。

「ああ、おはよう。今日も冷えるね…葛西、鼻がトナカイ状態だぞ」

「もう布団から出るのが辛くて！」

葛西も来たばかりなのか、マフラーにニットの帽子と揃いの手袋を付けたまま、ストーブの前を牛耳っていた。

幾分か温まったところ、管内放送が響く。

「中央区二丁目のコンビニで籠城事件発生。犯人は実弾入りの銃を所持。至急S I T 出動を要請」

二人の所属する部署は警視庁捜査一課特殊捜査係、いわゆるS I T の5係に所属している。

先ほどのドラマで名の知れた彼らだが、実質はそんなに甘い事件ばかりではない。

数多の人物と交渉してきた末井の他は裏で支える人たちの名は普通は知られないのが一般的だ（注：フィクションです）。

特にあのドラマが始まってからというもの、ふざけた奴等による立て籠もりが増えたのもまた事実だった。S I T 連中にとっては堪らなく迷惑な話だ。

「いくぞ、…葛西！」

「は、はいっ！…！」

現場で店員を人質に立て籠もったのは野本恭平。

「SITはもうすぐ来るかな…？」  
銃をおもちやのように扱う恭平の目は驚くほど玄かった。

「もうすぐ…殺してあげれるんだよ、麻里」

恭平は定期入れに仕舞い込んであった写真にそう呟いていた。

「そんなに怯えなくて平気だよ？僕が殺したい人が来たら、すぐに解放してあげるから。マスコミもそれなりに入ったか…まあいいや。僕の目的が果たせれば、そんなのはもう必要ない。そして麻里の所へ行くんだ……」

夢を見るような声で、うつとりと話す恭平。

拡声器が響く。

『SITの末井です』

恭平はにやりと笑って、コンビニ店員を立たせて、表に出た。

「やっときたね、こんにちは。末井さん？…そして、さよなら」

コンビニの店員からの死角から、恭平は銃を末井に向けて躊躇いなく撃った。

バン！

周りの動きが急に止まる。

そして、笛が高らかに鳴る。

ピーッ！

末井の additional lifeが始まった。

実況と解説の騒がしいコメントも始まる。

実況『さあ、末井隆弘のロスタイムが今スタートしました!』

解説『いきなり殺される展開ですか』

実況『果たして末井さんはこの状況を飲み込めるのでしょうか?』

末井は周りが止まっているのにすぐには気づかなかつた。そして、犯人の後ろにいる審判たちに気づいた。

「あんだ達危ないよ、そんな所にいちゃ!……ん?」

そして末井はようやく銃弾がゆっくり銃から発射されていることに気づいた。

「…俺、これに打たれて死ぬのか?」

安齋主審がうなずいた。そしてタイムボードを指差す。

03:28;27.01

「俺、の……死ぬまでのロスタイム？」

審判団全員が頷いた。

マスコミがスローということはテレビを見ている人もまたスローの配下におかれたということになる。

SIT二課の方々も止まっていた。彼らが調べてあった被疑者のデータを拝借して見る。

野本恭平……

どこかで聞いた覚えのある苗字に、末井は疑問を覚えた。

実況『警察の方は判断が早い！』

解説『イヤー、実は私、ドラマ“交渉人”を見ているんですが、実際はこんな突拍子もない事態に巻き込まれたりするんですね！』

末井はすぐに警視庁に向かって走り出した。

実況『さあ、末井が走り出した！これは早い！！あの松井選手並の足の速さです！警視庁の盗塁王でしょうか！？』

解説『サッカーではなく野球の話になっていますが……』

実況『私、サッカーより野球が好きでしてね』



解説『いきなりの爆弾発言ですね』

昔の捜査資料を掘りおこす為、資料室に駆け込んだ末井。

実況『あれ？審判団はどこにいるんでしょうか？？』

解説『……もう馬鹿ですね』

実況『えっ？』

解説『黄色いスパイダーマン三人と黒いスパイダーマン（タイムボ  
ード背負ってる）が外に見えるでしょう？』

実況『……あれですか……？』

解説『すいません、誰か本当にあの三人にレッドカード出してくだ  
さい』

実況・解説の二人はそのぶっ飛んだ服装にもはや呆れてしまってい  
た。

資料室の外の壁に張り付いているのが、審判達だった。開いた窓か  
らすぐに部屋に潜り込み、末井の行動を逃さずチェックする。

「……これだ、三年前の強盗立て籠もり事件」

現場の写真とともに、その事件に巻き込まれた女性の無残な死に様もファイリングされていた。

その女性の名は…本堂麻里。

この事件は末井の苦い過去になっていた。

というのも、この事件の交渉を担当しただけではなく、犯人を狙ったはずの銃弾は

この本堂麻里の命を奪ってしまったのだ。

捜査資料には、遺族の名前も書かれていた。その名前を見るたび、胸が痛む。…だが、そこに探していた名前があった。

野本…恭平。

麻里の兄だった。

両親が離婚して、それぞれ別の性になってしまっていたが、それでも兄妹は暇を見つけては会っていたのだ。

この日も、その約束をしていたと後日恭平から聞いた末井は、そのときに受けた叱責の言葉も思い出していた。

「いつかお前を殺す！そして僕も麻里の所へ行く！！忘れるんじゃないぞ！！」

今日は、三年前本堂麻里を殺してしまった日なのだと思います  
末井は目を閉じて、暫く考えた。

タイムボードをちらりと見る。

02:54:17.15

まだ、時間があつた。

「なあ」

「？」

安斎主審は末井に近づいた。

「ロスタイム中に試合放棄するとどうなるんだ？」

安西は左胸に仕舞つてある赤いカードをちらりと見せた。

「レッドカード…つまりはどうなるんだ？」

実況の人が教えてくれた。

実況『もしレッドカードが出たら生まれ変われなくなってタニシに

なると言われていますが』

解説『輪廻の輪から外されるという事ですね』

！

末井は暫く静かになった。

自分は殺されて仕方ないということはわかった。…だけど……待  
て。

そっだ、何が引っかけたのか、やっとわかった。

自分を殺した後、恭平も死ぬ。

確かに、恭平はあの時そういった！

「…死なせてたまるかよっ！！」

急いで現場に戻る末井。

そこで、彼は驚くべき行動を取った葛西にようやく気づいた。

実況『これは…葛西さんの銃から弾が発射されていますねえ』

解説『末井さんを守つての行動でしょうが、ちょっと反応が遅かったようです。ですがこれならすぐに確保はできそうです!』

実況『いやに警察用語を巧みに使ってますね、三波さん』

解説『そこはおいといて下さい』

実況『おいとけません』

まだ二時間もある。

などと考えていたら、携帯電話が鳴る。

相手を見ると懐かしい名前があった。

「久しぶりですね、亀井さん」

『どうだ、最近結構活躍してるじゃないか』

「今日は非番ですか?」

『ああ。事件に一切関与しなくていい至福の時だ』

亀井昌吉はSIT2係の古参の捜査員だ。末井にとっては捜査のいろはを教えてくれた尊敬できる人物であった。

「僕も今は少し暇ですね」

『そっかあ、暇ってのはよかったなあ。事件がなくなりやいいっていつも思うよな、そういう暇な時ってよ』

末井は声を出していたが、顔は苦しい表情をしていた。

「…亀さん。俺、ずっとこの仕事やってきて思ったんだ」

『ん？』

「人間、過去の事があって大きくなるって、亀さんから聞きました。でも、どうしようもなく無力を感じるときって有るんですよ」

『そりゃあそうさね。人間って言うのはな、一番判りにくい動物なのさ。勝手に考えて勝手に落ち込んで、勝手に納得する。そう言う生き物さ』

「…三年前の事件、覚えてますか…？」

『ああ…あれか。末井が撃った時な、犯人が人質を盾に使ったんだよな』

「あれ以来、銃を使うことを辞めてきたのに…なのに……」

『…どうした末井。らしくないな。なんか嫌な事でもあったのか？』

「俺は、人を殺してしまった。その時からもう俺は刑事ではなくなっていたんだ」

「？何訳分かんない事言っているんだ？それに刑事ってのはな、犯人を助けてあげるのも仕事なんだぞ。いいか、銃はそれを補佐する時に使うもんだ。あのときのお前は犯人の足を掠めようとしていた事、皆分かってたぞ」

末井の目からは涙が溢れていた。

「亀さん…俺…亀さんと話せてよかったです」

「人との出会いは一期一会。私も末井君に会えてよかったと思ってるよ」

「……ずっと一人だと思ってた自分がアホらしいや。友達とか一人もいなかったけど……仲間って暖かいんだな……」

「…何を今更。仲間がいたから今のお前が有るんだろ？仲間に感謝しないとな」

ああ、暖かい。

死ぬ直前に自分が一人じゃないと知ることができた。

それだけでも、末井にとって大切なものとなった。

会話を終わらせ、気づけば後一時間になっていた。

末井は携帯を取り出し、メールを書いた。

それは、とても短いメールだったが…

自分自身の思いを伝えるには充分だった。

綺麗な空を見上げて、ふと思案する。

三年前……確か本堂麻里は…

脳裏にあの時が再現される。

『やめて、崇くん!!』

彼を止めようとしたのだ。！それだけじゃない。…自分の予想は、二人は幼馴染みではないのかと…

本堂が撃たれたときの犯人の動揺で、それは確信に変わった。

『麻里!!』

恭平はそれを知らない。犯人が大人しく自供したのも、麻里が恐らく犯人を庇おうとしたのも…。



「…くそっ！！何で今になってこんな大事なことに気づいてんだよっ！！！」

末井はSIT2系のパソコンを使って、皆がすぐに野本恭平を確保するように促す文書を打つ。

気づけば後五分になっていた。

「…これで、野本も少しは改心してくれるかな…」

ふと先程まで気にしていなかった審判たちを振り返り見てみると、安齋主審は末井を見て号泣していた。

「うお！？何で主審泣いてんだよっ！？ビックリしたぁ！」

末井はハンカチを主審に渡した。

「涙拭きなよ…だらしないなぁ」

末井の初めて見せる笑顔に、他の審判もつられて泣きだす。

「何でそこで泣くんだよ、全員してっ！？」

今まで、末井には表情といえば能面のようで、感情を表したことはなかった。

それが末井の清算すべき箇所、人間らしく死ねるようにするのが、彼ら審判達の仕事だった。

今回ほど笛を鳴らすのが辛いと思ったことは安齋主審にはなかったのだ。

60秒カウントが始まる。

！

「もう……時間か。あ、そうだ」

末井は審判達のほうを見る。

今は野本の後ろ。最初にあった場所で、準備をしている。

「審判達、……ありがとう。最後に事件を解決できたのは、皆のおかげだよ」

またこみ上げてくる涙を堪え、安齋主審は笛を啜えた。

そして、礼をした。

チツ、チツ、チツ……  
ピッ、ピッ、ピーッ！

ドキューン！

止まっていた周りの時間が再び動き出した。

一週間後。

「君が、葛西君かね？」

SIT5係に2係の亀井が葛西を訪ねてきた。

「あ……はい」

「……ここは以前にもまして静かになっちまったなあ」

あの事件以降、5係には会話という物が存在しなくなっていた。

だから、亀井と葛西の会話は自然と空気を落ち着かせてくれた。

「これ、末井の報告書だ。…最後のな」

そこには、今回の事件と三年前の事件の関係性が簡潔に書かれていた。

「……これ、どうして……？」

「これが、野本が末井を恨んでいた原因だからだ…それで葛西君が野本の銃をはじいてすぐに確保するに至ったんだ。自殺するのを止める為にね」

葛西は報告書の最後の言葉を見ていた。

“葛西、お前はきつといい交渉人になれる。頑張れ！そしてありがとう” 末井”

f i n .

後書き。

・・・泣けたーッ！！（もう何やねんな）  
書いてて泣いたの久し振りですよ、私っ！！  
美恵ちゃんの最高傑作ですっ

o ( ) o

皆さんは普段表情を出していますか？でも、それをうまく出せない人って世の中にたくさんいるんですよ。

だから、そんな人を見つけてあげたら力になってあげてね。

その人は誰かに気づいてほしいと思うから！

2008.2.20.22  
SONS  
2009.8.2

## FILE・3 Hexagon (前書き)

今回の対象者はヘキサゴンの裏方です。意外な結末に驚く事間違いなし!!

FILE・3 Hexagon

「来週に続いちゃったなあ、京都修学旅行。」

珍しく最初の声は須川だった。

「六角形？」

と加藤が聞く。

「おう、それぞれ」

と、なにやら意味不明な会話が続けている。

何事かと、須藤は聞いてみる。

「何の話してる？聞いててさっぱりわかんないんだけど」

「「ヘキサゴンですよ」「」

「ああ、Paboとか羞恥心とか輩出したあのクイズ番組？」

「詳しいですね、須藤先輩！」

加藤はちよっとビックリした。

「…実は今回の人さあ、ヘキサゴンの関係者なんだよねえ」

と須川が言うと、加藤と須藤は仰天した。

「タレント!?!」

「違う。裏方の仕事だって、しかも今回ほどきついのはない」

須川がいきなり真面目顔で今回の状況を告げる。

「圧死だ。しかも落ちてくるのでっかいライト」

「…僕できれば目を背けたいのですが」

加藤は既に参った顔をしている。

「気持ちは分かるが、目を背けるな」

いつの間にか安斎主審が後ろに立っていた。

今回の人物の情報に安斎は目を通した。

植原 マサチカ 正親 (30)

職業：大道具

状況：圧死（ライト落下に因る）



好きな事：タレントの馬鹿な姿を見ること  
趣味：妄想（ 危ない人だな、オイ）

ロスタイム：3：33；27・26（公式）

「へキサゴン編」

収録前日。

「正、その大道具組み立ててくれ」

「はいつ、監督！」

植原の仕事は大道具のセッティング。

その正確さと早さが売りだ。

今日は隔週恒例のへキサゴンの組上げだ。

「うーん…行列の上二段目真ん中変じゃないか？」

植原は一度下がってバランスを確認する。

「若干右に傾いてますね…あそこは別のが担当したんですよね？」

現場監督は舌打ちをして頭を掻く。

「拓史の野郎だな。すまんが直して貰っていいか？」

「了解です！」

ヒョイヒョイと裏手に回り、骨組みの間を擦り抜けて、該当の場所のベニヤを一度押し上げて板を高く掲げる。

「これですね？」

「ああ、気をつけるよ」

「分ってます、よっと」

開いた場所から外に出て、釘をうち直す。

現場監督はひとまず安心して、プロデューサーに電話をする。

ブツッ

植原の頭上で何かが切れた音がした。

「んお？」

「え？」

監督と植原が上を向いたのは、ほぼ同時だった

ピーーツ！

その音は唐突に響き渡った。

「わ、とつと…」

実況と解説の声がいつもと違う。

実況『さあ、植原正親さんのロスタイムが始まりましたね、牧原さん』

解説『今回の場所はヘキサゴンと言う事で、私と中村が担当します』

「へ???待って待て、君達そこ危ないから」

植原は、最上段にいる審判達に気付いた。

タイムボードは何故か動いていた。

中村実況『植原さん、状況が分つていませんね』

牧原解説『それは誰だつてそうですが、ライトが落下する危険と隣り合わせですからね、スタジアムでは』

「サッカーの審判？妙なコスプレだな。とにかくちよつと待ちな、ここの修理終わつたら上がりだから」

中村実況『これは悪気のない発言ですが、審判団ショックを受けてますねえ（笑）』

牧原解説『審判団あゝ見えて繊細ですからね。あつという間に仕上げましたね』

気付いてみれば、修理した所はもう綺麗に修繕されていた。

見下ろしてみると、タイムボードを持った須川は下に移動していた。

3：31：25・20

「ん？何だ、あの時間…」

中村実況『あつ、今植原さんがタイムボードを見ました！』

牧原解説『果たして時間が何を示しているのか分るのでしょうか？』

「…そういえば上で何か切れる音がしたんですけど………」

安齋主審は上をよく見ると促す。

「…んっ？何かあのライトおかしいな…」  
一度降りて、何事か確認する。

ライトの一つが縄を切って先程まで植原がいた場所に向かって落ちてくる。

「?!まさか、俺…死ぬの??」

審判達はコクリと頷いた。

「……この時間は……何………僕が後生きられる時間な訳？」

安齋主審が頷く。

時間は未だ三時間半もある…と言えれば良いが、後三時間半しか生きられないとなると話は別だ。

植原は分りやすくテンパっていた。

「あー、えー…！そうだ、上ちゃんが今日来てる筈なんだ」

中村実況「植原さんが走り始めました！」

牧原解説「さすが身軽なだけあってかなり足が早いですねえ、審判

達は……（ 〇 ）』

牧原は言葉に詰まった。……何と審判達、犬にトランスフォームしていたのだ。

中村実況『…彼らはどんな役も甘んじて受けるんですか？』

牧原解説『と言うか、これでないと追いかけられないみたいですよ、コレ』

中村実況『 やって来たのは…収録ホールですね…』  
声を落として中村が言う。

「…っ……………いた……………」

息を殺しながら、コソリと呟く。

バラエティ番組の収録をしていたのは、上地。

また彼の天然で笑いに包まれていた。

クスツと笑うと、新藤拓史がこちらをギョツとした顔でみているのに気付いた。

牧原解説『ではここで、ロスタイム前のリプレイをご覧ください』

映像が切り替わる。先ほど傾いていた板にとても細いテグスがピンと張られているのに気付くだろうか？

板が持ち上がり、テグスがたわわになる

直している間に、その糸が切れ、あらかじめ切っておいた縄の間からテグスが解け、落ちるようになっていた。

中村実況『つまり…新藤さんがあの仕掛けを施したんですか？』

牧原解説『どうしてそんなことをしたのはさすがに分ると思います…新藤さんが近付いてきました』

新藤は植原に外に出るよう促した。

「拓史、手を抜くなよ…歪んでたぞ」

「なんでテメエ死んでねえんだよ」

植原はビツクリした。

いつの間に戻ったのか、審判達もビツクリして顔を見合わせていた。

「事故に見せかけてアンタを殺そうとしたのに、なんで無事なんだよテメエ!!!」

植原は殴られて、地面に叩き付けられた。

「ぐっ……!？」

植原は思い出していた。

この声を、昔聞いたことがある。

「忘れたとは言わせないぜ、植原……」

「拓史かっ……昔のあの事件の……」

昔と言っても、十五年前ではあるが…の自分が犯してしまった事件の被害者の遺族だ。



事件といっても、植原には未必の故意にあたり、無罪となったのだが…

それでも自身の心を病んでしまう原因になった。暫くは何もしたくなかったのだ…

辛くて何度も死のうと思った。

そんな時救ってくれたのは、あの現場監督 彼のおかげでここまでやって来れたのに…なのにあんな殺され方は心外だ。

だが、彼の気持ちも判らなくはないのだ。

(いつまでも、過去に縛られて生きていることを……いい加減切り離さなければいけないのだ…)

「こんな事して、死んだ親達は望んでなかったと思うよ」

「るせえ、テメエに何が判るって言うんだよ！」

「…判るよ。君のあの時の年頃に、僕の両親、飛行機事故で死んだ

から」

新藤（正確には審判達含む五人）は表情を変えた。

「…友達は、いるのか？」

「!……」

新藤は首を横に振った。

「信頼している人は…？」

「……」

新藤は答えなかった

しかし、答えは新藤の目の前に掲示されていた。

「拓史…ごめんな…‥‥‥信頼してた奴に親を死なせちまって」

植原は絞り出すような声で謝罪した。片手で顔を隠す。

泣き顔は見られなくなかった。

審判団も後方で涙を流していた。

「……ごめんな…‥‥‥赦してくれ……」

誰かが語った。

『愛は非力で良い。力を持った時愛も暴力になる』と

新藤は手を緩めた。

代りに植原は優しく新藤を抱き寄せた。

そのぬくもりは懐かしい暖かさだった。

「…正兄ちゃんっ……………」

新藤の目から涙が落ちた。

中村実況『感動の和解ですが、ロスタイム残り時間が二時間を切り  
ました』

牧原解説『しかし、時と言う物は残酷ですね。もっと早く話してい  
たらこんな事態にならずにすんだのかも知れませんがね。植原さんの  
死は決定付けられてしまっていますからね…』

心なしか、実況と解説の声が沈んでいるように聞こえた。

上地の収録はあと一時間もあつた。

和解した新藤と植原はスタジオに戻り、時折二人で笑いあつた。

残り僅かな時間だけれど、植原は心が晴れていた。

三十分遅れて収録が終わる。

お疲れーしたーの声があちこちで掛かる。

「お疲れ様です。あ、植さんっ！」

上地が植原のそばに寄ってきた。

「今日来てたんすね？よかつたあ！」

上地は植原にカードを渡した。

「ん？」

「今日お誕生日でしたよねっ！おめでとっごいいますっ」

忘れてた。今日で30なんだ。

誕生日が命日かあ……逆にすごい確率だ。

「上ちゃん、ありがとな……あ、そうそう。明日のへキサゴン収録な、延期になるかもしれない」

「え、何ですか？」

植原はちらりと審判を見る。

言わずもがなという具合に安齋主審が首を横に振る。

時間も後十五分だ

「さあ、プロデューサーがそう言ってたからなあ」

中村実況『うまい切り返しです。イエローカードは出ません！』

安齋主審の笛がピッピッと響く。

牧原解説『時間的にここまでが限界ですね。急がないと間に合いませんー！』

「あ、悪いな。今日のセッティングの合間に抜けて来たから…じゃな」

「お疲れですー！」

上地と新藤と別れ、急いで、ヘキサゴンスタジオに行く。

次に会う時は、もう生きてない

その切なさに、溢れる涙が止まらない。

しかし、その瞬間だった。対象者の名前が変わったのは。

中村実況『！植原さんの行動で、名前がある人物に変わりました！！』

牧原解説『あーっと、しかし審判達は気付かないっ！！』

青島実況『お待たせしました、真打ちの青島と』

小本解説『小本です！さあ、こちらには審判がいませんが、彼の口スタイムは後五分となっています！！』

青島実況『正しくサッカーと同じですね！さあ彼はひたすらに走る！！』

「正兄ちゃん、もしかして……急がなくちゃ！！」

小本解説『植原さんの言葉で、本来の対象者が明らかになりましたけど……オット、審判達が前で詰まっていますね』

青島実況『さあ、審判達を対象者が変わった事に気がつくのでしょうか？』

彼はイラついて、加藤線審を脇へ押しやった。

「邪魔だよ、あんた達！」

安齋主審がすぐにイエローを出す。

ピーッ！

「は？ああ、イエロー一枚ぐらい大丈夫だろ？」

彼は急いでいた。

審判達はすぐに気付いた。

互いに顔を見合わせ、

個人情報を確認する

！！

名前が、変わってる…?!

小本解説「植原さんの延長戦が始まったと同時に、彼の残りわずか

なロスタイムで果たして植原さんを助けられるのか!？」

青島実況「此所で犬にトランスフォーム!これですぐに追いつきますね」

スタジオの直した場所は大きな穴が開いていた。後ろに回ると、大きいライトが六人の黒子によって支えられていた。

ライト落下場所に横になると、植原は溜め息を付いた。

「皆、さよなら……」

ロスタイムは一分を切っていた。

チツ、チツ、チツ…

「正兄ー!ー!ー!」

彼は植原を脇へ押しやった。

「!?!?」



ピッ、ピッ、ピーッ!!

グシヤッ

現場監督が慌てて駆け寄る。

「正っ！大丈夫かつ!？」

植原は顔を青くして、監督を振り返った

「無事かー、よかったあ！」

「拓史が……………代わりに……………」

消えるような声で、植原は呟いた。

進藤 拓史(25)

職業：大道具（新米）

状況：圧死

走り：100m 15秒フラット

尊敬する人：植原 正親

ロスタイム：00：05：21：00（公式）

翌日のヘキサゴン収録が延びたのは言うまでもなかった。

いつの間にか、審判達もいなくなっているのに植原が気付いたのは、進藤が死んでから間も無くの事だった

f i n . . .

後書き。

昂です。涼華先輩と編集の静美先輩の推敲と考察により完成しました。

本当にサッカーと同じくらいのロスタイムだと言う事を気付かないで、殺そうとした人を助けると言った案は、静美先輩から頂きました。

かなり時間掛かりましたが漸く完成です。

2008/2/23 - 27 .

NOC(2009/8/5)

FILE・4 First Love (前書き)

加藤線審の過去が明らかに。珍しい愛の形をご覧ください！

FILE・4 First Love

「初恋……かあ」

加藤が溜め息を付く。

「どうした、加藤？」

安斎が後ろから声を掛ける。

「この仕事に就く一週間前に、彼女がいたんですよ。その子は俺の初恋の相手で」

「ふん。……で？」

「“愛してる”って言わない内に通り魔に襲われて……そのままだったんです。ずっと」

安斎は加藤の肩を優しく叩いてやった。

「……そっか。辛かったんだ」

須川が個人情報を持ってきた。

「今回の対象者、かなりの美人だぜ」

須藤がその言葉と共に何処からともなく現れた。

「おお、Aランク！」

「でしよう？」

安斎はその対象者の情報を確認した。

仲村 数美（28）

職業：情報処理技術士。

状況：転落死

大切な物：昔の彼の写真

宝物：彼から貰った飾り気のない指輪

ロスタイム：04:15;14.00（公式）

加藤は写真を見て驚愕した。

「数ちゃん…どうして……」

審判達は仰天した。

「初恋編」

「翔君、おはよう！」

写真に挨拶する仲村数美。

その写真の側にはガーベラが飾られていた。

「もう十年になるんだね、翔君が死んでから……」

シャワーを浴びて、牛乳とトースト、サラダを食べる

もう一膳、用意してあるのも食べ、仲村は着替えを済ませ、急いで部屋を出た。

「じゃ、翔君。行ってきます！」

ドアがカチャと閉まる。

写真には、数美の隣りに立っている加藤の姿が……

いつも通う道を歩く。

「あ、やばっ。バスに間に合わないや！」

腕時計を見てバス停に急ぐ仲村。

何とか間に合った。

駅で降り、いつも使う電車に乗る。

「阪田君。おはよう」

「仲村さん……やっぱり駄目なんですか？」

「……うん。もうあんな思いはしたくないし……それに今でも好きだから」

阪田裕孝は仲村に好意を寄せていたが、昔の恋がストッパーとなり、いまだに片思い止まりだ。

「……どうしてですか？相手の気持ちなんてもうどうでも良いじゃない



いですか!」

「どうしても良くないわ。私分かるの、彼がまだ見守ってくれてるって…」

儂げなその笑顔 触れられないと言っのなら……

《まもなく、西船。降り口は右側です》

乗換えのため、階段を上がっていく。

阪田は上がりきった所で、仲村の肩をさりげなく後ろに押しやった

「えっ……」

体が宙に浮き、落ちる!と思ったその瞬間

ピーーーーッ!!

additional timeが始まった。

それは運命の再会の合図だった

周りの時間がスローになる。

「……………翔、君…?」

黒子に支えられ、階段の下で待機していた審判の一人に話しかける。

(数ちゃん……………変わらない)

加藤は喋らない。だが、テレパシーで意思の疎通をはかった。

「……………私、死ぬのね……………?」

(……………うん……………)

タイムボードには04:13:12・05と表示されていた。

「私が、死ぬまでの時間ね?」

仲村は静かに加藤に寄って、顔にそっと触れた。

「ずっと、見てくれてたの?」

(……………仕事がない時はずっと……………)

加藤も仲村の髪にそつと触れた。

「…ありがと…ねえ、映画見に行く？」

(時間少し足りないかな…)

「…あ！じゃあね、ゲーセン行こっ！」

(そうだな。それなら近くにもう開いてるところある筈だし)

「じゃあ決まりねっ！」

満面の笑顔が、審判団に向けられた。

加藤は須藤の羨ましい視線を感じていた。

04:05;45.15

歩いてすぐの場所に、ゲーセンがあった。

「…昔とは様変わりしたわね」

少し前までは、プリント倶楽部が流通していたが、それらはかなり進化して100円値上がっていた。

コイン一枚で遊べるのは勿論だが、カードを使って遊べるものがあるなんて知らなかった。

音ゲーの超定番、太鼓の達人・ダンスダンスレボリューション・ポップンミュージックの他、ギターフリーク、ドラムマニア、DJマシンのような物まであった。

シューティングゲームに格闘ゲーム、ドライビングゲームまで…数えたら切りがない。

太鼓の達人で、昔の曲を叩いたり、格闘ゲームで勝ったり負けたり、UFOキャッチャーでタカトシクションをGETしたり、リラックマのマスコットを大量GETしたり、

他の人がギタドラをやっているのを見て歌ったり、やってみて全然駄目だったり…

いつの間にか二時間が過ぎていた。

「私、マクドナルドで食べたいっ！」

…と言っことで、駅そばにあったお店に入る。

「そうね…ポテトM三つ、ハンバーガー二つ、チーズバーガー三つにアップルパイが五つ、あと…オレンジジュース二つとコーラ三つ。サイズは全部Sで」

「店内でお召し上がりですか？」

「はい」

「かしこまりました。…2160円になります」

（皆の分も？）

（お腹空いたんじゃない、皆？）

審判団は遠慮がちに指で少し、と言った。

人気の少ない端っこに移動して、ここで待ってと周りに怪しまれないように促す。

01:55;21.20

一分後、両手でしっかりと持った注文品が登場した。

さり気なく、二人分と三人分に分けてあった。

自分と加藤の場所と他三人の場所にそつと置く。

(食べましょ?)

安齋、須川、須藤は手を合わせて一礼した後に食べ始めた。

(翔君、オレンジジュース好きだったものね)

ジュースを飲みながら静かに会話する。

(良く覚えてるね)

(皆寡黙ね。どうして?)

(仕事中は声を出さない決まりなんだ)

仕事。…そうか、彼らにとってロスタイム中の声だしは、仕事であるからなのか。

(今回だけなんだ。テレパスで会話ができるのは)

(どうして?翔君にとっては仕事じゃないの?)

周りに不審がられないよう、テーブルを見ながら話す。

(数ちゃんと話す機会なんて、昔はなかったろ?)

(……うん。)

(安齋さんが上に言ってくれたんだ。赤い笛かけてるあの人だよ)

(…優しい人なのね)

(うん…数美)

(ん…?)

(ずっと言えなかったから…今言うね)

(……?)

(愛してるよ、今でも…これからも…)

(…うん、知ってるよ。私も愛してる)

仲村がトイレに立つ。後を追う加藤。

個室に入り、二人はやっとキスをすることができた。

鏡に二人の姿は映らない。この世とあの世の狭間にいる仲村は、本

来ならこの場所ではなく、死んでいるからだ。

「…駄目。キスだけ…」

（何で？）

「向こうでも出来るでしょ？」

（…ヴー…解ったよ）

渋々離れる加藤。

（用足すから早く下がって）

（……ハイ……）

加藤は席に戻った。

「……そうです。はい……後はよろしくお願いします」

電話をしながら席に戻った仲村。

（仕事の電話？）

（そっ、私死んじやうから事実上は引継ぎの電話ね）



01:05;31.05

(少しは時間あるわね…そうだった)

時間的にはお昼休みだ。実家に電話しよう。

「……………あ、母さん？久し振り」

『数美なん？まー、どうしたん？』

「暇になったから電話したんよ。そっち変わらんのか？」

『全然！』

「そか」

暫く当たり障りのない会話を続け、時間が迫るところ会話を切り上げた。

「ありがとな」

『こちらこそな』

互いに笑って電話を切る。

00:09;10.27

ピッ、ピッ。

安齋主審の笛が鳴る。

「時間…ね」

駅に戻り、場所に戻ると60秒カウントが始まっていた。

（また…向こうで会おう）

「うん……また、ね」

チツ、チツ、チツ……

ピッ、ピッ、ピーッ！

時間が戻り、人達の悲鳴が響いた。

時間は朝の八時

部屋に残された写真には

二人が寄り添うようにガーベラの花びらが

散っていた

f i n .

後書き。

実況と解説は敢えて外しました。

…と言うのも、テーマが純愛だった為に五月蠅い画面ですと二人の状況が解りづらいのではないかと。

今回はシンプルに決めてみました。奇を衒わない(誇示しない)作風もまた一興かと。

2008・02・27 - 29

N O C C ( 2 0 0 9 / 8 / 5 )

-

## FILE・5 Respect (前書き)

こちら、リクエスト作品ではありますが、話の流れ上必要となり入れる事としました。実は何人かは何かをオマージュしてます

誰かが語った

『終わりが来ればまた始まりが来る。』

と

「安齋さん、今日は長丁場？」

須藤が安齋主審の身支度を見てそう言った。

「そつだ。半日以上掛かる」

「半日以上って!!」

「500じゃ足りないから2000持ってけよ……おい、加藤。なんだその背中の荷物？」

安齋は黄色いリュックを背負った加藤を見て呆れていた。

「なにつて……数美が作った弁当四人分ですよ！要らないんらい  
いんすけどー、荷物軽くなるしー」

須川が加藤の肩を叩いて現れた。

「お前の嫁さんナイス！！じゃ、俺が二人前食って良い？」

「数美も喜びますよ！」

「待て。誰が要らないと言った？」

「……」

加藤・須藤・須川は安齋主審に指先を向けた。

「…要る…」

小さい声で呟く安齋。

審判達はクスツと笑った。

本日の対象者

君塚 舞樹（20）

職業：大学生

状況：急性心不全

好きな事：物書き

趣味：インターネット

ロスタイム：14：04；23・28（公式）

【Lifetime RESPECT】

舞樹は急いでいた。

「ヤツバ、遅刻〜〜！！！」

長い坂を駆け上がり、息が切れるのも構わずに大学へと急ぐ。

快調に足を運んでいると、心臓がドクンとなる。

「っ！？」

息が詰まり、足が止まる

「っあ…………っ?」

さっきまで苦しかったのに、気付いてみれば治まっていた…

ピーッ!

赤い笛が高らかに鳴り響く。

線審二人が家の脇から、ササッと走り出てくる。

タイムボードがどこからともなく現れた。

14:04:20.05

「え…………何、なんなの??」

青嶋実況『さあ、君塚舞樹のロスタイム。14時間4分です』

大石解説『長いですね。この半日以上あるロスタイムをどう使うか  
が見物です』

「…ごめん。全然判らないんだけど、何があったのでしょうか?」

青嶋『当然ですが、自分の身に何が起こったのか判らなかつたよう



です』

大石『急性心不全なんてなかなか起こるもんじゃないですからねえ  
』

安齋が胸を押さえて舞樹をさした。

「胸……？心臓が？？ん……？？？」

青嶋『判りそつで判らない状況ですね』

大石『伝えづらい病名ですからねえ……』

「取り敢えず………て言うか私のロスタイム長つ……！」

君塚は改めてタイムボードを見て驚いた。

走るのを辞め、大学まで歩き出す。

青嶋『長いロスタイムですから気儘に過ごすのもいいでしょう』

大石『ただ、これから大学に行って何をするつもりなのでしょう  
か？』

君塚は教室ではなくオープンカフェにあるパソコンに向かった。

青嶋『君塚さんの趣味がインターネットと物書きです。最後に一つ  
何かを書くのでしょうか？』

大石「ちよつと違う様ですが…？」

君塚は鼻屑にしているサイトに挨拶周りをしていた。

時折更新された小説を見つけて、見て笑ったり泣いたりしていた。

一通り挨拶を終えて、君塚はパソコンを離れた。

「……歌うか、六時間程！」

1 2 : : 3 8 ; 4 5 . 0 7

しかし、この判断が君塚の最後の人生を尊敬に代えてくれる事になった。

大学から数分歩いた場所に、小さなカラオケ屋があった。

審判達も入り、君塚の最後の歌を聞いてあげる事にした。

選曲はどれも *sukhy maswitch* と *script* の物で君塚は喉が潰れるほど全力で歌った。

始まりの唄からスフィア 以降 s u k h y m a 曲 1 2 曲をずっと歌  
い続けた。

審判達は弁当を食べていたが、君塚は食べ物喉に通らず飲み物を  
注文していた。

その為、途中でトイレに立つ。

終わったあと、一つの個室から怒声が聞こえた…

「テメエ、生意気な口聞きやがって!」

君塚はちよつと見える窓からこつそり覗いてみる。

いかにもその筋らしい人が、拳銃を誰かの頭に突き付けていた。

君塚は仰天した。「えっ…なに?」

「や、止めてくれ……」

パン!

当たりを血飛沫が染めていく

君塚はすぐに部屋に戻る。

「……ヤバいもん見た……今すぐ出よう！」

青嶋『ロスタイム中にすごい現場を目撃してしまいました君塚さん  
！』

大石『これはちょっと危険ですねえ……』

審判達はそれを察してすぐに動いた。

一カラ二時間の100円を受付で払い、すぐにカラオケ店をでた。

少し走って裏路地に入る

しかし

カチャッ

という撃鉄を上げる音が聞こえた。

目の前にあったのは 銃口…

すぐに裏路地を飛び出す。

バァン！

足下で銃弾がはぜた。

「嘘でしょー！！？」

審判達は陣営を組んでいた。

須川TKは君塚の後ろに、

線審の須藤と加藤は君塚の横を固めて

並走していた。

パン！パン！

須川TKの肩を、

須藤の左足を、

銃弾が掠める

「！」

「！！！」

「審判さんっ、辞めて！」

安齋主審の笛が響く。

ピピッピ！

構わず走れと促していく。

「でもっ！」

また銃声が当たりの空気を震撼させた

右側についていた加藤の顔が歪む

「…！」

「審判さん！！！」

眼鏡を掛けたパツと見その筋の人に見えない紳士的な男性が四人の男達を率いて走っている。

「ったく、鶴谷がへましたから俺らまで尻拭いしなきゃなんねえのかよ」

「るせえ、カカシ！」

「明石だ!!」

「大通りにいく前に仕留めましょう、鶴谷君!」

「判りました、左京さん!」

鶴谷と明石は走りながら、君塚に照準を合わせる。

君塚は裏道を当てもなく走った。

走り続けて二時間が経った頃、見掛けた事がある路に出た。  
青嶋『これは大学に続く路ですね』

大石『一度身を潜めた方が良いです』

君塚は大学に足を向けていた。

大学に入り、空き教室に駆け込む

「はぁ……っはぁ………」

心臓の時間が歪んでいるからなのか、呼吸をするのが難しいようだ…

教壇の下に蹲り、息を潜める。

8：01；14・07

タイムボードの光が奇妙に感じる。

青嶋『今、廊下に人が走り抜けていきました…先程追いかけていた一人ですね』

島崎が数原と共に君塚を探している。

「居ませんね、数原先輩………」

「ちゃんと探せよ島崎！必ずどこかに隠れてるはずだからな！」

「数原さん。」

サキガミ  
先神左京が数原のそばによる。

「ボス………」



「偶然とはいえ、鶴谷君の顔を見られたのは計算外でした。このままでは警察に連絡されるのも時間の問題です」

「ではどうすれば?!」

「隠れていると言つなら、おびき出してみましよう」

島崎と数原は先神を見てハテナマークを出していた。

大学に入って一時間が経った頃、珍しく校内放送が入る。

《二年の君塚舞樹さん、警察の方が呼びびです。至急学生課にお越し下さい》

……警察が……?

保護してくれるのかと思い、君塚はすぐに学生課に向かった。

しかし……何かがおかしい。

君塚は途中で裏門に向かう事にした。

裏門で待ち受けていたのは、君塚が本当に来るのかなと考えていて気が抜けていた島崎だった

君塚は下段の構えから拳銃を弾き落とし、足の膝の関節をいとも容易く外した。

「うあああああ!!!!」

落ちた拳銃を拾い上げ、また大学内に戻り別の空き教室に身を潜めた。

安齋主審はイエローを出さなかった。

ロスタイムを邪魔するラフプレイヤーにはそれが適用されないようだ。

青嶋『いやーしかし流れるような攻撃はまるで中田のようだ!』

大石『リプレイをご覧ください』

気を抜いている島崎の右手下から、君塚のしゃがんだ姿が確認できる。

左手で右手を擦じ上げて銃を落とし、

その体勢のまま、右手の指二本で……

足の膝関節をゴギツと素早く両方とも外したのだ。

青嶋『審判達もしたり顔で笑ってます』

大石『因果応報ですね。君塚さんは関節を外しただけです。なので実質怪我をさせてはいないのでイエローは適用されません』

やられたら…やり返せ。君塚の頭にはその言葉が浮かんでいた。

「敵もなかなか考えますね……」

先神を始め、明石、鶴谷、数原が島崎の周りに集まっていた。

足の関節が外れて立てなくなっている島崎は、数原に伴われて、医者に行く事にした。

痛みで喚く島崎は、叫びながら伝えた。

「拳銃……っ、拳銃盗られたっ！！」

「では校外に出た可能性がありますね…急ぎましょう」

「はっ」

明石と鶴谷は返事をして校外に躍り出た。

先神も、後を追いかけるようにして別の路を走り出した。

「……っ」

君塚は俄かに信じられなかった。

「何である人達が……？」

…でも、怯んでいる暇はない。

後五時間

審判達の怪我を見て、包帯を付けてやると、君塚は前を見つめて、  
大学を後にした。

決意と覚悟を背負って

数原がまだ裏門にいた。

君塚は拳銃の撃鉄に照準を合わせ、引き金を引いた

バン！

手から銃が零れ落ち、右肩と肘の関節をあっという間に外された。

「ぐあああつ！！！」

君塚は銃を拾い上げ、予備の弾を数原から取り上げて、その場を悠然と去る。

数原は、携帯を左手で不格好に扱って先神に電話した。

「ボス……突破された！」

『分かりました。私から連絡します』

「はい、左京さん？」

『やはりまだ校内にいたようです。数原さんがやられました』

「！！！」

『鶴谷君も気をつけて下さい。相手は有段者です』

「…了解っ!!」

「……………鶴谷…だっけ……………」

銃を構え、今度は銃身を正確に撃った。

バギューン!

銃が空を舞う。君塚は鶴谷の懐に飛び込んだ。体格差があり、首を締められて宙に浮かされてしまう。

「くっ……………なんて。でやあーっ!!!!」

急にトーキックをかますと、鶴谷の手が緩んだ。

「……………つく……………効いたあ……………」

そのまま体を空に浮かせ、トーで肩の関節を外した。

ゴガッ

「っああー!!!!」

銃をそのまま回収し、予備の銃弾も回収した。

後……明石と、先神……

「おい、鶴谷……鶴谷っ!!」

君塚と明石が銃を向け合う。だが、君塚は明石の方を見てはいなかった。

ためらいなく銃身の下を撃ち、君塚は相手をまともに見ないで膝の関節を外した

「ぐああっ!!」

君塚は銃を回収して、あの場所に向かった。朝、心臓に異変をきたしたあの場所だった……

「審判さん。私が先神さんを射殺したらレッドカードを出すのでしょっつ。」

先程の教室内で、その話をしていた

安齋は頷いた。

「じゃ、誰も怪我させなければイエローカードとかは出ないのね？」

安齋は少し間をおいて頷いた。

「……………警察に連絡して、あのカラオケ屋を調べて貰おう。で、私は彼らを捕まえる。先神さんを殺して、主審さんがレッドカードを出せば強制退場で私は死ぬ…勿論、証人付でね」

審判達は顔を見合わせた。

本来なら、最後までロスタイムを全うして欲しい。でも、人を殺すのを目撃してしまった所からロスタイムが何度も危険に晒され、審判達にも怪我をさせてしまった。

これ以上、被害を出さない為にも君塚は覚悟を出さなければならなかった。

「協力して、……………お願い……………」

審判達にも、その覚悟は伝わった。

四人とも、覚悟を決めた顔で頷いた。



あの場所には刑事が一人待機してくれていた。

「あなたが通報してくれた君塚さん？」

「……はい。コレ、彼等が使っていた銃です」

そう言つて、銃を三丁渡した。

「確かに君塚さんが言った部屋には血がこびりついていた。ただ、あそこは彼等の根城でもあつたんだ」

「えっ？」

君塚も審判達もビックリした。

「我々がずっとおつていたグループだ。ここから先は我々に任せてくれないか？」

君塚はあの人の特殊な気配を感じて、刑事に隠れるように言った。

「君塚舞樹さんだね？」

「……………先神、左京さん？」

二人は鋭い目で相手を見つめる。

ジャキッ！

互いに銃を出して、睨み合う。

大学の方から、人が降りてきた。

銃声があちこちで響き、何事かと教授達が来たのだ。

「近藤さん…あの人君塚さんじゃ……」

「君塚君っ！？」

残り四時間三十分

バンッ！！

君塚は肩を撃たれる。

「君だつて、死は怖いでしょう？」

審判達は緊迫した空気に息を飲んだ。

「…怖くないわ」

バキユン!!!

刑事は目を見張った。

ピーーーーーッ!

青嶋『人を殺した事でレッドカード!!!強制退場です!!!』

4:28:14.00

タイムボードの時間が止まる

大石『対象者の覚悟を受け止めた審判達の目には涙が溢れています  
…』

君塚はゆっくりとその場に頽れた。

その体は二度と動くことはなかった

〜三日後〜

新聞の見出しがクローズアップされる

【連続殺人実行グループ逮捕】

「……警察の面子を保ってくれたんだな、君塚さんは」

拳銃を受け取った刑事は新聞を見て溜め息を吐いた。

「捜査に協力してくれた君塚舞樹は捜査中に心不全を起こし急逝。若年二十歳だった……」そうだったのか。すぐに手配したけど……もしかして、知っていたのか……？自分が死ぬと知っていたとしたら……全て合点がいく……」

だが、そんな事を言っても誰も信用しないだろう。刑事は記事を切り抜き、この事件の成り行きを見守る事を決意した。

それが君塚の供養になると信じて

f i n .

【後日談】

「君塚さん、大丈夫？」

君塚は目を開けた。

「あ、れっ?? 審判さん??」

須藤がそばに立っていた。

「ビックリしたよね。でもこう言う事になったみたい」

「どづいう事??」

「ここは境界っていうんだ。心が純粹な人が生まれ変わる時に修行をする場所なんだ」

「エッ、でもレッドカード出されたのに?」

「天照大神様が見ていたんだ。君の行い全てを」

「…へ?」

「この者を輪廻から外すのは惜しいと言う事で特例が出されたんだ」

君塚はいきなりの事で驚愕していた。

「案内するよ。僕の名前は須藤<sup>マサル</sup>賢、宜しくな!」

「…宜しく……」

君塚は須藤の手を取り、歩き出した。

-

(5 / 8 / 9 / 0 / 0 / 2 ) NOZ

2 0 0 8 / 3 / 1 - 2 .

## FILE・6 Family(前書き)

本編のスキヤキ編を受けて。もし、あなたの家族が事件に巻き込まれたら、あなたはどうしますか？

FILE・6 Family

君塚舞樹と加藤数美がカフェでお茶をしていた。

「今日から審判補佐やるんだって？」

「補佐って言っても、実際に走る訳じゃないですけど。ただ資料を渡すだけだし……」

「そうだ。審判の人達に軽い昼食届けて貰っていい？」

「いいですよ」

君塚は時間を見て、席を立った。

「じゃ、頼んだよ！頑張つてね、舞樹！」

審判ブースに入ると、須川が君塚によつてきた。

「今回の対象者です」

「おっ、サンキュー」

「あと、加藤さんの奥様からお弁当です」



「どうもです！」

加藤が若干ニヤけながらそれを受け取った。

鋤モリスキ 肇ハジメ（17）

職業：高校生

状況：撲殺

好きなスポーツ：サッカー

趣味：ダンス

ロスタイム：1：15；37・17

### 「家族編」

『チヨット肇っ！あんたこんな時間まで何やってたのっ！！』

「まだ暗くないし、五時前だし。もー家のそばだって。心配性なんだから」

『最近物騒なんだから早く帰ってきなさいよ!』

「はいはいっ」

携帯を切ると、後ろからバイクの音が近付いて来た。道の端によって家に向かって歩きだす。

「ったく、過保護なんだから…時々うざったいわ」

バイクの音が近付いて来る。

「うるさいなあ…」

耳を劈く程近くまで聞こえてきた。

と思ったらその音は唐突に消えた

「んっ!?!」

何かおかしいと思って振り返ると、

金属バットが空中で止まっていた。

「どおおお?!」

バイクの時間がスローの配下に置かれた。

ピーーッ！

安齋主審の笛が響き、加藤と須藤が走って来る車から降りてきた。旗がバツと翳される。

どこから現れたのか、須川TKがタイムボードを頭上に出した。

1：15：30・05

青嶋『さあ、銛鋤肇のロスタイムは一時間十五分です！』

ピエール『青春の直中、不意に訪れた不幸に、銛鋤は一体僅かな時間で何をするのでしょうか？』

「サッカーの審判にロスタイム……もしか、俺って死ぬん？」

安齋が頷く。

青嶋『流石サッカーをしているだけあって詳しいですね！』

ピエール『この瞬間を大事に使って頂きたいです』

「でもなあ」

青嶋『オット銚鋤、公園の柵に座ったぞ?!』

「逆にここから離れたとしても行って帰るまでに終了時間になるんだよ。どこ行くにしても」

審判達は顔を見合わせた。

「家族には電話すつから……」

言ってる間に、着信があった。

『あ、肇?』

「何?母さん」

『卵買ってきてくれる?』

「卵?」

『今日ね、春鍋にしようと思って!締めは卵雑炊が合うでしょ?』

「…悪い。俺さあダチと遭ってファミレス行くとこなんだ。姉ちゃんに頼んでくれよ」

『あら、そうなの?でも七時には帰るのよ』

「分かった……今までありがとな」

『なーにしんみりしちゃってんの!今日は父さんの昇任が決まるか』

「どうかなんだから!」

「それで春鍋?いくらなんでも気が早いっしょ」

『締め雑炊、残しておくからね』

「ありがとう!じゃ……」

電話を切り、今度は姉の胡桃に電話を掛ける。

「…あ、ねえさん」

『肇?どうしたのよ?』

「今日春鍋なんだって!卵買ってこいって言うてるよ、母さんが」

『え、春鍋!?すごい久し振りじゃん!』

「ただな、俺予定入っちゃってさあ、食えないんだわ」

『勿体ないから全員で残さず食べちゃうぞ!!』

銚鋤は笑った。

「アハハッ、流石姉ちゃんだな!」

『じゃ、卵買って帰るね』

「あ、姉ちゃん」

『ん？何？？』

「俺の机の引き出し二番目に、姉ちゃんのプレゼント入れてあったら…明日、誕生日だろ？ちょっと早いけど…おめでとう」

『肇……ありがとう』

電話口から聞こえる声は涙ぐんでいた。

「涙脆いなあ、姉ちゃんってば…ありがとうはこっちの台詞だよ」

『ん……じゃ、また後でね』

「うん……また」

ピッ

45：21・05

「…肇」

正面に見えてきたのは父の卓<sup>スケル</sup>だった。

「親父、早いじゃん！」

「うん！……実はな、部長に昇進したんだ」

「すげえっ！！やったな、親父」

「今日の夕飯聞いてるか？」

…あれ？

「う、うん。春鍋だった」

「流石母さん、分かってるなあ！」

すぐそばにバイクがある筈だ。

それが、親父には見えないみたいだ。

青嶋『これについては解説のピエールさんから話があるそうです』

ピエール『ロスタイムの配下…すなわち、死を間近に控えた物は時間を曲げる性質があるのは以前おっしゃいましたが、そのロスタイムを作った原因もその配下におかれない限り見ることは不可能です  
(本編から考察)』

青嶋『つまり、星の光と同じって事ですね』

ピエール『分かりやすく言えばそうですね』

(…ロスタイム何気にすげえ科学的だったんだ)

「もうすぐ暗くなる。一緒に帰るか?」

「えっ?あ…親父には悪いと思ってただけど、友達と集合するとこだったんだ」

もう二十分をきっていた。どう足掻いても家に帰るのは出来ないなんせここは、駅の裏路地で、家まで走ったとしても最低でも片道四十分はかかってしまうのだ。

節約のため、と家族全員がバスに乗らない事を決めていたのだ。バスを使えばよかったのだが、逆に母親からお叱りを受けるかもしれないと思ったのである。

事故直前に母からの電話がなければ、バスを使って、母親に会える事が出来たかもしれない。

「そうか、…待ち合わせの時間まで後どれくらいだ?」

時計を見るふりをしてタイムボードを見る。

15:25.05

「四時半の約束だから後、十五分だね」

安齋は親指をぐっと上げた。



青嶋『この泥仕合を制したのは息子だ!』

ピエール『友達と待ち合わせ、良い言葉が父親にシュートっ!』

その解説の笑えるコメントに吹き出しそうになり、顔を隠さなければいけなかった。

ところが…

「じゃ、待ち合わせの時間まであすこのカフェで飲まない? そうすれば僕がバスで帰れる」

青嶋『しかし、父親の守備は堅い! あっさりブロックされてしまった!』

ああー、と落胆の声が肇から聞こえてきそうだった。

何が悲しいって、…親父とカフェにいる事がだよ…… (泣)

「男同士水入らずで話すのは久し振りだな」

「!…そーだな…いつ振り?」

審判達は外の公園でおにぎりをばくついている。

「中二の夏振りだ。…あん時は、正直悪いことしたなって思ってる」

「…あー、ユキが死んだ時？」

ユキとは以前飼っていた犬 親父と散歩している時に事故に遭い、そのまま逝ってしまったのだ。

あれから親父とまともに話してなかった

「ユキな、父さんを守ってくれたんだ」

「え…」

「バイクにフルフェイスのマスク被った男に、殺される所だった」

「!!--」

12 ; 15 . 27

そのタイムボードの向こうのバイクをちらりと見る。

フルフェイスマスクなんて、当時は少なかった筈だ…

「ユキは、その男から私を守ろうとして…持っていた金属バットで頭割られて殺された……………」

「…事故じゃねえじゃん！立派な事件だよ!!」

「父さんもそう言ったよ！でも、警察の奴等何て言ったと思う？」

「……………“器物損壊”だから事件じゃない…なんて馬鹿な事、言わないよな」

肇は顔を青くした。

「…その通りだ……………」

バンツ！

肇は悔しさをテーブルにぶつけた。周囲の人達はビックリしていた。

「くっそ……………（きっとそいつだ、俺を殺そうとしているのは…………）」

旗が目端に入る。

後五分

どうせなら最後にダチと話しながら死にたい。呼んでたダチが目に入った。

「……………じゃ、俺逝くわ」

「父さんに会わせてくれるか？」

「親父……………わかった……………」

六十秒前カウントに入る頃、肇達はポイントに立っていた。

「卓也、こっち家の親父。 友達の有働卓也」

「初めまして。」

「いや、こちらこそいつも息子が世話になって…」

「親父、部長に昇進したんだぜ」

「えっ、スゲー！俺んちの父ちゃんと大違いだ！」

二人が会話に熱中していると、俺は一步下がった

チツ、チツ、チツ

(バイバイ)

ボギィッ！

ピッ、ピッ、ピーーッ！！

バイクの男は逃走した…

「「肇っ！！！！」」

動かなくなった体の頭から血が流れ落ち、血溜りを作っていた

親父の涙を見たのは二度目だった。

卓也も…

意識が朦朧とする中、

俺はずっと親父に抱かれてた。

暖かい

家族って身近にいる

日常じゃない。

何よりも…大切なんだ

ユキはそれを分かってた

「親父……………ごめん……………ありがとう……………」

もう、目を開けていられなかった

ただ、耳だけは聞こえていて……………

「肇っ、起きろお…起きろよ…!…!」

遠くで救急車の鳴る音を最後に……………

俺の意識は消えた。

二か月後。

初七日も、四十九日も終わりに鋤家にも日常が戻りつつあった。

「胡桃、ホラお弁当！」

「キヤー遅刻しちゃっ！！」

(バス許可が出てからいつもこうだな)

「どうして最近寝坊が多いのっ!?!」

「だって、友達のメールしつこいんだもん」

「メール許可した私がいけなかったかしら…?」

「じゃ、いつてきます!」

「(いつてらっしやい!)」

家族には見えないでも、こうして

見守るから。

開け放たれた窓から、五月の風が優しく空気を撫でていく。

Ah まだ終わりじゃない 僕らは願う  
明日を迎えに行く この両手で  
喜び 悲しみ 希望も不安も  
すべてを抱えながら 終わりなき旅へ…

ずっと、見守るよ

写真の中で筆の笑顔が広がっていた。

後書き。

家族って身近に居過ぎて居なくなつて始めてその存在の大きさに  
気付くんです。

O R A / N G / E R / A N / G / E の キ ・ ミ  
s t . a / t / i .  
o n がよく合う話となりました。

ストレートな話が特徴的な雅之の話でした。

後書き執筆はRYOKAでした

2008/03/01 - 04 .

NONO(2009/8/6)

-



FILE 7 Pure Love (前書き)

元・待ち合わせ編。すれ違いの純愛は果たして叶うのか…!?

爆発事故のロスタイムで、審判達は緊急召集が掛かり、ブース内は混雑していた。

加藤は目を白黒させた。

「し、審判ってこんなにいたんですね…」

そこに 数美がやってきた。

「皆お疲れ様！おにぎりいっぱい作ったから食べてね！」

審判達は一層賑わった。やはり仕事中喋れないのが相当ストレスになっっているようだ。

しかし、審判補佐の君塚舞樹は事務的に言い放つ。

「その前に、今日の依頼人があと一人残っています」

一同シーンとなる。

「今から呼ぶ人達に今回のこれを担当してもらいます まず、安齋チーフ」

「はい」 持っていたおにぎりを口に放り込んで、立ち上がる。

「猿渡・山口線審」

「はい」

立ち上がったのは男女コンビの線審。手早く旗の準備をする。

「そして、水沢TK。今回はこのチームで行ってもらいます」

「はい」

体格のいい黒コスチュームが立ち上がる。

(…女の審判なんて始めて見た…)

(半端ない努力が必要よ、女性の審判は)

加藤夫妻が小声で話している。

「依頼者の詳細です」

君塚は安齋に依頼者の情報を渡す。

仲沢 瑶子(22)

職業・見習いシェフ/劇団研修生

状況：刺殺

特技：推理小説を書く

ネットネーム：中峰 涼華

ロス・タイム：2：17；45・05（公式）

「純愛編」

10：25 瑠子は起床した。

髪はボサボサ、頭はまだボーツとしている。

今日は水曜日だった。

「あ、今日はアレじゃん！」

瑠子はすぐに風呂に向かう。

「今日は劇団前に小説の集まりがあんだよね〜…面倒い」

とはいいいながらも、久々のオフ会だ。楽しくないわけがない！しかも今回はかなり楽しみだった。

「雅が小田君連れてきてくれたよね 職権乱用（違う）」

小田謙一は、歌クラスが一緒の瑶子の思い人と周囲に思われているが、実は違う。瑶子は謙一の声が好きなのだ。彼の声は不思議と瑶子には心地よく聞こえる。

「そしてっ！今日はカラオケ大会なのだっ！！イエーイツ！！！」

風呂部屋一杯に瑶子の声が響いた。

「何歌おっかなあ。：レンジのキ・ミ駅、沼南のGO・LD魂……いや、やっぱり山・下のず・一だなっ！！！」

最近のドラマ曲ばかり候補に上がっているが、邦楽洋楽問わず70年代のものを好んで歌う事が多い。

例えば、アミ・ンの待・つわ、狩・人のあ・ず・さ・二・号、バ・ンバ・ンの「苺白・書」を・も・う・一度等の歌い込み系、ビーノトルノズのイエノスタデイ、クノイノンのポーノントウラノヴェユ一等のリズム系などが彼女の十八番だ。

ただ、今回は若者ばかりでそのような歌を歌っても理解されないと思ひ、90・00年代の曲を暫く頭にたたき込んでいた。

漸く家を出る 髪も顔も服もバツチリ

短い髪を横に流し、ちょっと厚めのコートを羽織る。

家に帰るのは夜遅くなる。その為、少し厚めにしないと帰りが寒いのだ。今日は夕方に天気が崩れると言っていたっけ…念の為に折り畳みを鞆にしまっ。

寝過ぎてか、欠伸びが出てしまっ。

「ふあ…なんかカラオケでスタミナ使いきりそう」

恐らく、そんな事はない。単なる寝ぼけである。歌えば大体機嫌は良い方なのだから。それでも大きな欠伸びが続く。

それだけでなく、昨日帰ってきたのは日付が代わった一時だったのだ。疲れがたまってしまうのは無理もない。

ついでに肩は鉄のようにコチコチで、首が固まりそうな程。まるで甲鎧の鎧を身に纏っているようだ

「肩重い……グゥ……」

暫くストレッチをしていないのが災いし、体も随分固くなっていた。

「寝起きのストレッチ忘れてた……アデデ」

肩がゴキキと唸り、背伸びをする。

待ち合わせの場所は五反田 実はまだそれでも早く着くように計算

されていた。

早く動いて早く着く。待つのは慣れてるから。

11時45分 約束の時間の十五分前には五反田の北口にいた。

「ちょっと遅れちゃったけど、上出来」

早く着くのは三十分前、二十分前が丁度、十分前では完全に遅刻ラインに入るといって程徹底した真面目っ子だった。

その時だった

後ろから妙な気配を感じたのは。

何だろうと思い、振り替えると目の前にいるハンチング帽を目深に被った男の手には、刃渡り7cmのナイフが目に入った。

しかし、妙な事に他の人には見えていないようで、その男は停止しているように感じた。

「え……なに……??」

ピーーッ!

耳を劈くような笛の音が響き、線審が人波を縫うように登場し、旗を翳した。

実況『さあ、仲沢瑤子さんのロスタイムは二時間十七分です』

解説『コック見習いの他、劇団研修生と言う事ですが、仲沢さんはこのピッチに何を描くのでしょうか？期待したいですね』

「サッカー……？私、あんまり知らないけど」

審判達は顔を見合わせる

安齋主審はタイムボードを指し示し、急げと促す。

「ロスタイム……えっ、急げって言われても、ここ待ち合わせ場所だし……」

実況『いきなり出鼻を挫かれたっ！』

解説『どうやら、死ぬと言う事を理解していないみたいです』

安齋主審が男を指して、瑤子を指した。

「…えっ、私死ぬの？」

審判達は頷く。

「この時間は 私があと生きられる時間なわけ??」

安齋主審が頷く。



皆が来た。(10分前着)

「涼姐さん!」

「相変わらず早いですねえ……」

来たのは雅之こと谷塚重樹、ゆつこと守永佑香。

「雅、小田君は?」

「改札で引つ掛かってます……」

見れば、乗り越し精算のところまでチャージをしているところだった。

「あ、静美!」

「涼華… ネットネームで呼ぶの止めよ」

及川静美こと簀輪佐代子がかっこよくやって来た。以上の四人は劇団生で同じ歌クラスを取ってもいた。なので他の小説仲間より接する機会は長かった。

「ごめん、佐代……さん」

「お待たせしました!」

遅れて小田健一が輪の中に入った。

「じゃーカラオケ行くぞー!」

「おー!!」

久々のカラオケ、しかも最後にこいつらと歌えるのはこの上なく幸せだ。

こうなったらいろんな歌を歌おう!でも…まだ、小田君には言っていない。

歌声が好きだとは。

せめて、それだけは伝えたい。

カラオケ屋を発見した。

2:07:05.00

実際にいる五人と、瑠子にしか見えない審判四人で部屋は一杯になった。

「二時間をお願いします」

谷塚が受付をしてくれる。

守永と簀輪が話し込んでいたので、自然と席はこうなってしまった

谷塚（安斎）（猿渡）小田（水沢）

仲沢

（山口）

簀輪

守永

それなりに広い筈なのだが、仲沢には少し窮屈に感じたのは審判達  
がいた為だと思っ。

最初は谷塚が選曲する。

「それじゃあまずは、お二方にコ・ブノク・口の蓄を歌ってもらい  
ましよう！健と仲さん！」

「へ？」 「はい？」

指名された小田と仲沢は面喰らう。

「ほら、マイク！」

箕輪が仲沢にマイクを押しつけた。

「健、お前もポーツとしてないで！」

谷塚は小田にマイクを放る。

「「えええっ!?!」」

見事にハモるが、曲が始まると歌モードになってしまっ。

涙零しても 汗にまみれた笑顔の中じゃ

誰も気付いてはくれない だから  
あなたの涙を 僕は知らない

絶やす事なく 僕の心に灯されていた  
優しい明かりは あなたが  
くれた 理由無き愛の証し

柔らかな日だまりが 包む背中に  
ポツリ 話しかけながら  
いつか こんな日が来る事を  
きつと きつと きつと  
分かってた筈なのに…

ハモっている場所で、何か高い音が聞こえた気がした 仲沢（低音）  
も小田（高音）も低い声で歌っている筈のだが…

消えそうに 咲きそうな 蕾が  
今年も 僕を待ってる  
掌じゃ 掴めない 風に踊る花びら  
立ち止まる 肩にヒラリ  
上手に乗せて 笑って見せた  
あなたを思い出す ひとり

それは、高調波だった。審判含め、皆が仰天した。

実況『高調波、それは奇跡のように奏でられる倍音！』

解説『仲沢さんが小田さんの歌を心地よいと感じたのはその為です  
ね』

実況『二人は打ち合わせ無しに、高音と低音を見事に分かれて歌っています、これは…』

解説『小田さんが常に高いキーを歌っているからでしょうね。随分歌い込んでますね、低音』

実況『さあ、またサビです……』

風の無い 線路道 五月の美空は  
青く 寂しく 動かない  
ちぎれ雲 いつまでも浮かべてた  
どこにも もう戻れない  
僕のようにだと ささやく風に  
キラリ 舞い落ちてく 涙

解説『次は一人の所なのですが…』

実況『果たして、どちらが譲歩するのでしょうか？』

散り際に もう一度 開く花びらは  
あなたのようにに 聴こえない  
頑張れを 握った両手に  
何度もくれた

消えそうに 咲きそうな 蕾が  
今年も 僕を待ってる 今もまだ  
掴めない あなたと描いた夢  
立ち止まる 僕の 傍で  
優しく開く 笑顔のような

蕾を探してる … 空に

実況『ユニゾンでいきました！倍音がはっきりと聞き取れました！』

解説『ちよつと、私感動しました…』

箏輪と守永があ・み・んの待／つ／わを歌い、谷塚がミ・ス・チ・ルのs／i／g／nをいい感じで熱唱すると、小田がG・L・A・Yのハ／ウ／エ／バーを軽く歌い、仲沢がア・ム・ロのキノヤン／ユーを叙情的に優しく歌い上げた。

皆が楽しく盛り上がっていた。

時間が三十分を切ると、仲沢はトイレにたった。

解説『残り時間も少なくなって参りました。さあ、仲沢いったんトイレに入る』

実況『…小田さんに何も言わないままに終わるのでしょうか？』

解説『それは…彼女次第です。何も言えません』

仲沢は真剣な顔で考えていた。

「…」

仲沢は険しい顔でドアを睨み付けていた。

頭を振って立ち上がる。

「おまたせっ！…でもう少しか」

15 ; 25 . 05

「延長したら遅刻するしなあ」

小田が最後の選曲を丁度転送した所だった。

「じゃあ最後は、レンジのキ・ミ駅を仲さんに！」

ああ、せめて名前で呼んでほしかった…！練習した曲やん！！

仲沢はマイクを小田から受け取り、最後の歌を奏で始めた。

僕が流した涙 地上へと零れ落ちた

恐らくそれが雨に変わるんだらう

かわる かわる 景色さえも

まわる まわる 時の中で

すべて 受け止めてく

サビに入った所で終了五分前の電話が鳴る。

「はい……はい、終わります。この曲が最後なんで……はい」

谷塚がそれに対応した。

小田が上のハモリを担当していた。仲沢の目からはどうしてだか涙が溢れていた。

僕は今 君の”今” 何かを探す？

一生懸命

A h i 今汽笛がなり 僕らは願う

明日へと続く 線路の上で

変わり行く景色に 吐息を吹き掛けて

指先で書いたのは ”希望” の二文字

切なさが聞いている皆の心に伝わっていく 涙が止まらなかった。

もう二度と この歌声が聞けなくなってしまうのではないかと……

そんな嫌な予感が胸中をよぎった。

審判達は魂のこもったその歌に涙を流さずにはいられなかった

もう……歌えない事を悔やんでいるのが伝わっているのだ



刻一刻と時間は残酷に過ぎていった。

10 ; 28 . 05

「…何で泣いたの、最後の歌の時」

小田が駅に向かう途中で仲沢に訊いた。

「あ…何でもないよっ！ホントに、何でもないから……っ」

また涙が溢れる

「…ホントに？」

「小田君の歌声、大好きなの……だから感動しちゃって……それだけだから」

努めて明るくしようとする仲沢のさりげない言葉。

「俺の歌が……？」

小田はちよつと恥ずかしそつに頭を掻く。

「でも、仲先輩の歌……俺好きですよ。何かこうストレートに伝えるのかが……平たく言えば、尊敬してますって……何で号泣っ！??？」

「あ……どうしょ……嬉しいの、私……ありがと……小田君……」

60秒カウントに差し掛かる頃に五反田に着いた

1:15.07

……もう、これで終わりなんだ。

鞆の中に持ち物を探す振りをしながら、元の位置に戻る。

皆は改札に向かっていた

チツ、チツ、チツ……

ナイフが心臓を貫く。

「ぐっ……!!」

「あ、そつだ。先輩にこれ……先輩?……」

小田は鞆から何かを取り出して、仲沢を探すと 地面に倒れた仲沢を見つけた。

「…！先輩っ、どうしたんですかっ！?!」

その声に、谷塚・義輪・守永が戻る。

「どうした、健……！仲さんっ!?!」

ハンチング棒をかぶった男はまた消えていた

「……っ、刺されたみたいっ……」

血だまりが当たりに広がる

「…そんなっ、俺…やです…先輩に………こんなっ………」

小田の涙を仲沢は初めて見た。

「……泣いちや、男前台無しっ………ハア」

目が霞んで来た 審判達の黄色い影と45秒の掲示板が目端に入った。

小田が仲沢の体を起こす 途端に背中に触れた左手が血に染まった。

「先輩、救急車もっすぐ来ますから………」

「小田く………」

「え……、何ですか……?」

「……っと、好き…たよ……」

「先輩…?」

「ずっと…好きだったのよ……」

小田はビツクリした。

30秒

小田の手から離れたそれは、血溜まりに落ちていた。

「俺も、ずっと……先輩の事……」

近くにいて、そして、互いを想う気持ちに気付いていた筈だった  
…擦れ違っただけで口喧嘩や漫才みたいになってた二人。

相手に悟られまいと、二人とも想いを隠してしまった。それが……

今、溢れだす

「ずっと、好きでした……」

仲沢は左手を動かし、小田の頬に触れた。

「……ありがとう……ごめんね……」

5秒前、4、3、2……

仲沢の目はゆっくりと閉じ、左手の力が抜けていった。

ピッ、ピッ、ピーッ！

「……先輩……？ねえ、起きて下さいよ……瑠子先輩……っ、こんな  
の……やですよ……起きて下さい、瑠子先輩っ！！！」

小田の慟哭は駅構内にまで響いた

箕輪、守永は声に出さず涙を流していた。

谷塚は二人を静かに見ていた その目端に涙を溜めて……

一週間後。

皆はそれぞれ、涼華が死んでしまった事がバレないように、いくつ  
か小説をネット上に公開させていた。

それでも、彼らの心に傷を残した。

谷塚は小田にこのホームページを教えた。もちろん、仲沢と涼華が同一である事を臥せて、だ。

だが、それは言わずとも小田に伝わった。そこに書かれていた涼華の小説は、全て遠回しの恋を綴ったものだった。

「瑤子…先輩……？」

そこには、二人の男女が幸せに暮らしている夢物語が綴られていた。

「先輩……だ…」

小説には、二人の口喧嘩が騒がしく記載されていた。

そしてその一文にはこう添えられていた。

“二人はいつも飽きずに会話をしているのは、心許せる相手であるからだ”と

「ふ……ははっ、正に俺たちじゃん！」

小田の顔に笑顔が戻った。その先に、瑤子が書いた最後の文書があった。

もっと、楽しい事を見つけてほしい。

だから、笑って欲しい。

君はずっと、笑って生きてはくれないか。

私は君が笑ってくれるのが、嬉しいから…だから、笑ってはくれないか。

「…先輩。ありがとう、俺…：…頑張るよ」

暫くしてから、小田の名前がテレビに出るようになった。

彼の薬指には、瑤子先輩に渡す筈の指輪がキラリと輝いていた

f i n .

後書き。

穂香です。先輩のオーダーを聞いて、書いて見せたら号泣されちゃいました。

それでも、「これ…これが見たかつ…：…：…ありがとう、ホノちゃんっ！」と手をがっしり握られて感謝されました

悲恋なんて初めてでイロイロ戸惑っちゃいましたけど、静美先輩のアシストのお陰で締切りに間に合いました！（今日が締切りだった）

著作権：ORANGE RANGE / 君 station

コブクロ / 蕾

涼華です。ラストページを加筆致しました。

ちなみにあの一文を書いたのは谷塚君でした。良い仕事してるで  
しょ？

瑠子がトイレにいた時に書いたのがあの部分でした。笑って生きて  
欲しい。それは、心からの彼女のメッセージだったというね、大事  
な部分なんですよ！

2008/3/3 - 7 .

N O C ( 2 0 0 9 / 8 / 6 )

-



**FILE・8 Birthday(前書き)**

管理人誕生日企画作品。

意外な結末に驚愕……！

そして、次のハーフタイムに話は続く……！

FILE・8 Birthday

安斎は歌を口ずさんでいた。

僕たちはまた迷いながら

歩いてく 生きる「理由」さがしてる

見つけては見失って

涙をからして空見上げ

なくしたものは数え切れないね

ポロポロ穴だらけのポケット

それでも未来だけは両手に離さないで

何か描いてる

砂時計を ひっくりかえして

生まれてきたんだ この世界に

「安斎チーフ、大丈夫ですか？」

「……あの二人、両想いだったんですよ」

君塚は辛そうな顔をした 勿論、知っている。だから安斎がそんな事を言う理由も分かる。

「それなのに、早く来たから目がついたなんてのが言い訳になりましたか！？」

新聞は実界の帝日新聞。通り魔が捕まったというニュースだった。

「上層部が、安齋チーフに休暇を命じました。しばらくは療養なさった方がいいですよ……」

安齋は笛を乱雑に首から外した。

カツ……。

安齋が出るのと入れ替わりに加藤と須藤、須川が入って来た。

「今日は臨時のチーフを呼んであるわ。上坂さん、どうぞ」

安齋が置いた笛を持ち上げ、綺麗に磨きあげて安齋のロッカーにしまっ。

それが、上坂だった。

「皆さん、今日はよろしくお願いします」

そして君塚から資料をもらっ。

「最近20代ばっかですね……」

「本当ね。今の日本はどうなってしまったんでしょ……」

職業：警備員<sup>バイト</sup> / 見習医学生

状況：服毒自殺（しかも誕生日）

趣味：子供と遊ぶ事

致命的疾患：ピーターパン症候群

ロスタイム：5：41；42・25

### 「誕生日編」

彼氏なし、友達なし、一人暮らし。

そんな生活に慣れた

蓮水は一人自分の誕生日を祝うささやかな席を作った。

グラスに、薬品庫からくすねておいた劇薬を入れ、焼酎を入れる…

「22歳の誕生日おめでとぅ……そしてサヨナラ……」

口に含んだそれを一気に流し込む ……だが途中でそれが止まったように感じた。

おかしいな、と思うのは無理らしかぬ事。

力強い笛の音が部屋中に響き回った。

ピーーーッ！

ドアから主審が、ベランダから線審が、トイレからタイムキーパーが出て来た。

旗をバサリと翳し、時間を表示させるボードが奇妙に光る。

5 : 4 0 ; 1 5 . 0 5

「な、何なのよ、あなた達！！」

実況『さあ、蓮水由夏子さんのロスタイムは五時間四十分です』

解説『今回のケースは珍しいですね…しかも服毒をしての自殺はそうそうあるものではありませんからね』

実況『自殺者のロスタイム程見守るのは大変ですからね…さて…と！？台所に向かっていきます！！』

蓮水はキッチンに向かっていた。

審判がそれを防いだ。

「どいてっ！！死なせてよ！！！！」

ピーピッ！

それは出来ない、首を振って笛を鳴らす上坂主審。

今度はベランダにさっとピポットターンをして、審判を振り払った。

線審は肩透かしをくらい、互いにぶつかる。

あっという間に、ベランダのドアに進むが、その横にあった鍵に目をつけ…

審判達が急いで後を追っているのを見て、蓮水はその頭上を飛び越えた。

急いで家を出る蓮水、それを逃すまいと追いかける審判達。

実況『何か不思議な展開になってまいりました！蓮水さんは一体どこに向かっていいるのでしょうか！？』

解説『こっちの方角は駅ですね』

蓮水は元々陸上部のスプリンター。しかも、インハイ時に新記録を樹立した人物である。そんな彼女に審判団は追いつけるはずもなかった。

ヒィハアと息があがり、足がよたつく線審とTKを尻目に、上坂はしっかりとした足で彼女を懸命に追うが、いかんせん足が早すぎる。

ピュー、ピュー……

やがて、上坂の足も止まってしまった。

ピッピーン！！

力強く笛を吹くと、審判団は燕になった。

（タイムボードも変化）

羽を少し動かしただけでトップスピードになる。

蓮水はすぐに見つかった。

「あの人達何者かしら……？まあ、いいわ……医大に行けば方法はいくらかもあるんだから、焦っちゃダメよ。」

蓮水は電車に乗っていた。審判達は追従するように飛んでいた。

5：29：35・05

全身黒い燕は、脚にしっかりとタイムボードを掴み、蓮水の視界に入るようにちらつかせた。

「蓮水先輩？」

後ろからいきなり声を掛けられる。蓮水は仰天した。

「！！……葵君、脅かさないですよ」

葵荘介は三つ下の医大の後輩。はからずも少し気になっていた人である。何の因果なんだろう。

次の駅で、人がたくさん乗り込んで来た。

「葵君はこれから授業？」

「ええ、先輩は？」

「ちよつと教授に聞きたい事があつ……」

いつの間にか、腰辺りに男と思われる手が幾つも伸びていた

胸をぐつと揉まれる。何本かの指が、下着を潜り抜けて感じる場所を刺激してくる。

「あ……はあ………あん………」

「先輩、どうしたんですか……？」

残念ながら、葵と蓮水の間人に人がいたので、葵は蓮水がどうなっているのか分からなかった。羞恥で顔を真っ赤にする

「助け………て、葵君………」

プライドをかなぐり捨て、蓮水は葵に助けを求めた

「先輩？……！！！！こいつら全員痴漢ですっ！！！！」



周りの人達はすぐに離れると、蓮水と痴漢軍がそこに現れた。

「現行犯だ！」

乗客の一人が呼び掛けると何人かの人が、痴漢軍を取り押さえる。

「八時二十五分、痴漢軍を逮捕しました」

その人達は何と、刑事だった。

「君の勇気ある発言がなければまた取り逃すところだった。ありがとう！」

「あ、…蓮水先輩は大丈夫ですか？」

「何とか無事だ…先輩なんだ…」

「医大の先輩なんです…俺、すぐに気付けなくて…先輩が“助けて”って言つて気付いたんです」

蓮水が女性刑事に伴われてやって来た。

「蓮水先輩…」

葵の腕に蓮水は顔を埋めた。

「……っ、恐かった……」

「もう、大丈夫ですよ」

駅に着いて、刑事と痴漢達は降りていった。

「優しく、しないで良かったのに」

「先輩……？」

医大のある駅に着くと、蓮水はまた走り出した。

葵はびっくりしてしまふ。

「蓮水先輩?!」

審判達は燕のまま、蓮水の後を追う。

5 : 07 ; 28 . 17

「……馬鹿みたい。葵君、彼女いるのに」

実況『しかし、足が早いですね。この駿足は今の日本選手には少な  
くありませんが、そのトップ以上です』

解説『医大にはあらゆる道具がありますからまた自殺するかもしれ  
ません。しっかりと捕捉して欲しいですね』

蓮水はある教授を訪ねていた。

「財前教授、自殺に最善の方法つてあるのでしょうか？」

「自殺つて…蓮水君、何があつたんだい」

「生きる事に疲れたんです…大人になりたくないんです」

財前脩はソファに蓮水を促し、自分も隣りに座る。

「…話してくれないか？君にどんな事があつたのか」

「私は、父親がいる記憶がないんです。そして母親は水商売をして私を育ててくれました…ですが、父の死をきっかけに私と母の間にまともな会話はなくなつたんです。その理由が分からず、母も交通事故で死にました。友達のいなかつた私はますます殻に閉じこもつてしまい、大人になんかなりたくないと思つていました。本音を隠したまま、高校を出てこちらの医大に入りました。中退する事を前提に」

財前と審判達は静かに聴いていた。

「私は愛が何なのかを知らないまま、ただ時の過ぎるまま身を任せていました。私は…誰かに寄り掛かる事も、打ち明ける事も、人の迷惑になると思つてずっと隠していました。自分の心が何処に向いているか分からなくなりました…私は何をしたいんだろう、どうしてここに立っているんだろう…答えのない問いが絶えず私を責めていきました…」

審判達はやりきれない表情で蓮水を見つめていた。

「私はこの場所にはいけないのか、とも考えました。必要のない人間なのか。……そう思ったら、劇薬に手を出した自分がいたんです……」

「蓮水君は、どうして医大にきたの？」

財前教授は蓮水の目をしっかりと見て尋ねた。

「人を救う仕事をしたい……それが本音です。最初は何となくなんて不明瞭な事を言っていました。でも、こんな自分に治して欲しくないんじゃないかって考えてしまっ……」

「蓮水君、君は凄いな。自分より他人を気にかけてやる事が出来る。それは全ての医者に必要な事なんだよ。今の医師達は自分達の地位や名誉ばかりを慮って、患者と正面から向き合わなくなっている。君は要らない存在じゃない。君のような医者が必要なんだ……」

「財前教授……っ」

「君の人生はまだこれからじゃないか。それに……よく、頑張ったね。もう我慢なんてしないでいいんだから」

だが、蓮水のロスタイムは四時間を切っていた。

3 : 56 : 57 . 07

「…ありがとうございました」

「もう、死ぬなんて言っちゃダメだよ」

審判達も蓮水に続いて外に出る。

蓮水は、ようやく彼らに突っ込んだ。

「もう、何なのよあなた達！」

上坂が飲む仕草をして、タイムボードを指した。

「……私が飲んだ毒が効くまでの時間？」

審判達は一様に頷いた。

「私の無駄な時間を精算するための時間って訳ね」

その時間は三時間半になろうとしていた。

「…私……馬鹿なことしちゃったのね」

上坂が小さく頷く。

「あと三時間半しかないのね……」

審判達はいたたまれない顔をして俯く。途端に、審判達の腹の音が八モった。

「…お腹減ってるの？」

恥ずかしそうに頷く審判達。

加藤の腹の音がまた鳴った

屋上に場所を変え、四人は手製の弁当をガッツいていた。

その食い気に蓮水はちよっと引いた。

「よっぽどお腹空いてたのね……」

上坂が激しく頷いた。

「…貴方達、寡黙なのね……」

話かけるのはNG。加藤はそれをジェスチャーで伝えた。

「そうなの。…それ食べたら歩くわよ」

審判達は頷く。

「ロスタイムって、何すれば良いの？」

なんて審判達に聞いてみると、上から何かが降ってきた

気付いた上坂主審が、蓮水を奥へ押しやる。

「え、何っ？」

ジュワッ！

地面に落ちた液体が、音をたてて地面を溶かした。

「！」

審判達はビツクリした。

「硫酸ね…誰かが私を狙ってるって事？」

実況『これは穏やかじゃありませんね…』

解説『誰が蓮水さんを狙っているのでしょうか…?!』

一気に緊迫する五人。

「ありがとう。もうちょっとで死ぬ所だったわ…でも、誰が私を………?」

五人は空を見上げた。

「私を恨んでる人、か…考えられる人は居ないんだけど……」

喫茶スペースで五人は話し込んでいた。

「…って、何も話さない貴方達に言っても意味ないのよね…」

そんな事ないと、審判達は首を振る。

「蓮水先輩、ここにいたんですね」

葵がまた後ろから声を掛ける。

「…葵君、心臓に悪いんだけど……」

「こっちこそ、先輩がいきなり走り出したからビックリしましたよ  
！」

審判達もちよっとビックリしていた。

「葵君…今日、何の日か知ってる？」

「え………つと？」

「言ってなかったっけ、私今日誕生日なの」

「え、そうだったんですか?!」

蓮水は立ち上がる。



それを追う審判達と葵。

3 : 20 : 04 . 17

「どうしてももっと早く言わなかったんですか。蓮水先輩！」

「結構前から言ってたよ？私の誕生日はサンジューですって。覚えやすいし」

「サンキューならまだしもサンジューって…ぐあ！！！」

蓮水はハツとして振り返る。

葵が倒れていた

「葵君！？大丈夫っ？！」

葵の右腕に、注射針が刺さっていた

「そんなっ！！！」

実況『それでは今のリプレイを！！』

部屋の窓から、小さな針が飛んで蓮水の首に刺さるようになっていた。

それが、間に葵が入ってしまい 右腕に当たってしまったのだ…

解説『確実に蓮水さんを狙う者がいるようですね』

「公崎<sup>センセイ</sup>医師！葵君の治療をお願いします！」

丁度通りかかった内科の医師を掴まえて葵を頼む。

（誰が私を狙ってるの！？）

競歩並の早さで医療棟をでて、今度は教室棟に走って向かう。

審判も当たりを気にしながら蓮水の後ろを走る。

「……もしかして飛鳥さんが……勘違いして……？」

時間は…2：45；30・00。

「飛鳥…？葵君と私は何にもないわよ」

教室の空き部屋に入り、影に声を掛けた。

「じゃあ何で、葵に色目使ったのよ！？」

！

そうか、朝の電車内で起きた事を見てたんだ。それなら合点がいく。

「でも、私を殺したら葵君とはもう会えなくなるのよ…それでも良いの?」

「だって、私の針が葵に入っちゃったんだもんっ!!」

「葵君は助かるわ、ちゃんと医師に頼んだから……」

影 飛鳥はドアの向こう側からこちらに来ようとしなさい。

「無理よ。だってこの針に塗ったのは…劇薬が解毒剤になる奴だもん」

…劇薬!

それは、蓮水が飲んだ薬品の事をさしていた。…と言う事は、飛鳥の調合した薬品は、劇薬を解毒してくれる薬なのだ。

だが、その劇薬は数が大変少なく二瓶あった内の一つを蓮水が持っていたが…あと一瓶あるのは記憶していた!!

「薬品庫に在庫が一つあるわ、早く行ってあげないと!!好きなんでしょ、葵君の事。あなたが助けてあげないでどうするの!?!」

カシャン…

タタタタタタ……

飛鳥は急いで薬品庫に向かった。

飛鳥のいた場所を見ると、針の入った注射器と、充填用の針が落ち

ていた。

「凄いのを使うのね、飛鳥……立派な薬剤師になるわよ。あなたなら」

蓮水はそれを拾いあげて、ポケットにしまった。

「……!!」

体に食い込むのは、確かに刃物だった

激痛が体を駆け巡る。

「……近野さん……？」

審判達は突然のそれに気付かず、仰天した。

「…君は気付かなかったじゃないか、僕の想いに!!だから君の誕生日に殺してあげようと思ったんだよ!」

「硫酸を降らしたのは、近野さん…だったの……？」

「そつち」

審判達が駆け寄って来る

血が、蓮水の服を紅く染め上げる。

「……………ずっと、想っていてくれたんですか、近野さん……………」

ピチャン

血が、廊下に雫れ落ちる

「う、嬉しかったのよ……………でも、こんな……………近野さん……………良かったの……………？私が……………返事を……………洪つても……………純粹に、想っていたなら……………こんな事は……………近野さんは……………私のこと、分かって……………なかったね……………私たち……………合わなかったのね……………」

「は、蓮水さ……………何を言っ……………」

「だって……………そうでしょ……………？本当に愛しい人には刃物は向けないわ……………無償の……………愛を与える筈よ……………」

それは、昔の蓮水母娘のように言葉じゃなく、見えるものじゃない引力ではないかと、蓮水は気付いた。

愛し愛される、って…言葉じゃない。つながる想いが互いを引きつ

け合う事なんだ……

2 : 10 : 30 . 00

タイムボードが止まる……

審判達は愕然として、蓮水を見ていた。

目からは、涙が溢れていて……

「そ、んな……俺は……なんて事を……っ！あああああ  
！！！！！」

カチャン

血に染まったナイフが、近野の手から墜ちた……

f i n . . .

端書き。

グッドエンディングばかりだったので、こんな終わり方はどうかな  
……って、エンディング先行で話を仕上げてみた……

みんな号泣しちゃったよ……。最初駄目なのかなって思ったら、手直し無し即O・Kが出ました！

ビックリさせないでくださいよ、もうー！

あ、でも途中のはN・G・出されました……。あれは心残り……。)  
ー)

何はともあれ、久々の作品は良いね！！

2008・3・8 - 11

NOCC)2009/8/6)

-

## HALFTIME (前書き)

蓮実の事件に影響を受けた審判たち……。彼らに病魔が襲いかかる  
…！！



## HALFTIME

ロスタイム。それは時々思いも寄らぬ者の手で終わる。サッカーもまたしかり。

審判の心に傷を残す者もある

例えば前回の対象者の蓮水。彼女は生きようとした。だけど、想いの擦れ違いからロスタイム中に殺されてしまった。

それは彼らの心に多大な影響を及ぼした

「休憩時間」

「翔君。朝だよー起きて！」

加藤家の朝は早い。

頭が重く感じ、起きられない。

“数美……！声が……”

ヒューヒューと喉が嘶く。

「翔君？どうしたの…すごい熱!!」

上坂、須藤、須川もまたしかり。

高熱症には、心因性に依るものが多い。最悪の場合、何かを失ってしまったりする……

最低で声を失う 下手すればそのまま死ぬ事に……

鏡界の病院ではその症状をもった元審判達が多かった。リハビリ中の人を除いても、改善した人は全体で75%。だが症状により、パーセンテージは変動する。

今回の症状が出た四人の審判の内、線審の須藤が一番酷かった…

重度を降順で示す

加藤は風邪のような症状で、声が発せれない状態になる。だが、熱が下がれば、声は回復する 高熱症の初期段階であり、このままで休養すれば必ず治る。

上坂は比較的軽傷だった。肺の一部機能停止は、高熱症でよくある症状で、これだけを拡大すると改善する人は殆どだった。

須川は重度を五段階とするとちょうど真中辺りで、内蔵機能停止のうち、肝臓は移植で治療が出来るが、改善する人は三十パーセントに落ちる。

須藤は……心配機能停止。病院に着いて直ぐに集中治療室に運びこまれた。

それを通報したのは、君塚だった。須藤の話を聞いている最中に、容体が急変したのだ……

助かる確率は限り無くゼロに近かった。

加藤数美は医師に翔の状態を告げて、処方箋を受け取った。待ち合わせ場所で君塚舞樹を発見した。

「あ、君塚さん！どうしたの…顔色が悪いけど……」

「須藤線審が…高熱症で心肺停止に……」

「…?!高熱症って……どういったものが原因なんですか？」

「私も聞いた話だから……でも、ロスタイム中に何らかの衝撃を受けた際にそれが心因性となって現れるんだって……」

「じゃあ、審判の人達は常にその危険に晒されているんですか？」

「そう。それでも彼らはこの仕事に誇りをもって紳士に対象者の死に向き合っているの」

「君塚さん、須藤線審に話を聞いたんですか？」

君塚は言いづらそうに加藤に言った。

「ロスタイム中に、対象者が目の前で殺されたの……」

「……!!」

加藤はビククリした。

「翔君、そんな事一言も……」

「高熱症の初期症状が声を失う事だから何も言えなくて当然よ」

「加藤さん」

受付から呼び出しがかかる。

「こちらの薬を飲ませてください」

「鎮静剤は分かるけど…健忘薬って…？」

「原因となった物を忘れさせる為の薬です。忘れる事で、症状が改善されます」

「へえ。…でもどうして症状が分かれるんですか？」

「心の傷つき度合いと、記憶の配置により変わります。加藤様は傷が浅いようで何よりです」

薬剤師が優しく笑ってくれた。

加藤はそれでも須藤の事が気になっていた。

薬を受けとり、君塚の所へ行く。

「須藤さんって、実界時は何をされていたんですか？」

「え…とね。警視庁のお偉いさん。警視監だったみたいよ」

君塚が資料を見ながら加藤に言う。

「それが、上の策略で口封じに殺されたの…」

「え…?!」

加藤はビククリした。

「勿論、彼自身は覚えてないわ。でも、記憶の底に残っているのは

確かよ。人より繊細だから、高熱病も重いみたい」

君塚は極めて冷静に見えた。

「…それに、もうすぐ生まれ変わるって言ってたわ。だから今回で終わりがもって」

「そっか。実界に戻れるんだ…」

「ゼロからのスタートだけど楽しみにしてるんだって」

「加藤さんの線審パートナーはもう決まってるの。銛鋤肇って覚えてる？」

「ああ、あの学生？へえ、頑張ったのね」

「君塚様！須藤様が生まれ変わります！」

「！」

加藤は立ち上がるが、君塚はそれを抑えた。

「この瞬間は、関係者でないと見れないの…ごめんなさいね」

「…はい。」

「早く、旦那さんに薬持ってってあげなよ！」

君塚は妙に清々しい顔で、治療室に急いだ。

(……そっか、いつかこの生活も終わるんだ。でも、それは悲しい事じゃないんだね)

「あ、私も急がなきゃ！」

数美は急いで自宅に向かう。

喉が苦しそうに啼く。

(はぁ……っ、く……ぁ)

蓮見の記憶が、加藤を支配し始めていた。

「翔君、薬もらって来たよ！」

数美は直ぐに薬を飲ませて、そのまま寝かせた。

健忘薬の副作用で、翔は頭がボウツとし出した。

が、翔の頭から欠落していった……

蓮見の記憶だけ

翌朝。

「翔君、おはよう!」

「うゝ…?」

「まだちょっと熱あるみたいだけど大丈夫みたいね。お粥、食べる」

「う…」

翔はまだうまく声が出ていないようだった。それでも、何とか通じるまでに回復した。

「はい、熱いから気をつけてね」

翔は頷いた。そしてしばらく、熱が出る前を思い出そうとしたが何か靄がかっていて思い出せなかった。

数美もそれについては聞いてこなかったから、翔はきっと夢なのだろうと納得した

「風邪治ってきてよかった!」

数美の笑顔も明るい。粥を食べると体の感覚が戻ってきた。

「須川さんも上坂さんも体調良くなってきたみたいよ…はい。食べたら薬飲んでね」

「う」



翔は頷いて、粥を少しずつ食べていった。

暫く立ってから、彼らは審判としてまた仕事を始めるのはまた別の話。

f i n .

N O C C ( 2 0 0 9 / 8 / 6 )

-

FILE・9 CURSE LETTER (前書き)

新たに加筆修正された「元・手紙編」。安齋主審の知られざる過去が今、紐解かれる…

FILE・9 CURSE LETTER

「おはようございます！本日付でこちらに配属になりました銛鋤です！」

「そんな固くなくていいよ。これからよろしくな」

加藤が銛鋤に旗を渡す。

「やっと復帰かあ！久し振りだなっ」

須川がタイムボードをセッティングしながら言う。

「みんな体調悪かったもんな」

安斎は唯一その話を聞いていた。

それに、安斎は今回が最後の仕事になると、君塚に聞かされていた。

生まれ変わりの時期が迫っているのだ。

君塚は四人に今回の対象者の詳細を渡す。

楠元 隆史(38)

職業：芸能(芸人：20年)

状況：窒息死(事故)

趣味：ゴルフ

大事な人：相方(中真浩之：1コ下)

ロスタイム：3：25；15・00(公式)

「呪われた手紙編」

ファンからの手紙で溢れる、ギャラクティカの楽屋。

「楠元さん。僕のどれ？」

「ほはお前のや！わしの手紙が少ないの知ってるくせに！」

楠元は名前どおりに燻っていた。

人気安定している中堅とはいえ、コンビとなると、大体イケメンにファンレターが流れる。

顔も、ルックスもそこそこイケる中真とちっちゃくて動ける楠元を

比べれば良く分かる。

手紙の殆どには中真宛になっていて、楠元宛は指で数えられるしかない。

「ギャティさん、もうすぐムチャゲンの収録です」

スタッフが声を掛ける。

「今日はまたムチャ企画やるんやろ?」

「ああ、密閉された水槽の中でドンぐらい耐えられるかって奴な」

「あんまりムチャしなさんな……」

「大丈夫やて!」

二人は手紙をそのままに楽屋を後にした。

楠元の元には黒い葉書が届いていた。

それに書かれていたのは、呪いの言葉だった……

収録直前にウェットスーツに着替え、2m四方の水がたっぷり入っ

た箱に入る。

黒い葉書が奇妙に光る

楠元が後少しでフレームインする時、首に圧迫を感じた彼は息を全  
て吐き切ってしまい、目が霞んできた。

遠くで笛の音がしたと思ったら、周りの水が固まり、ゼリーのよう  
になった。

（な、何やつ！？）

黒子達が上の蓋を開けて、楠元を掬い出す。

青嶋『さあ、芸人一筋二十年のベテラン楠元隆史のロスタイムは三  
時間十五分です！』

研『短いね。でも楠ちゃんってそんなに時間無駄にしないからね…  
学生時代のじゃない？』

青嶋『そうかもしれないですね。因みに今回の解説は研ナオミさん  
です。お願いします』

研『はい、よろしくね』

気のない解説に思わず楠元が突っ込む。

「何やねんな、この解説！」

安齋が笛を吹く。楠元は反射的に審判を見る。

タイムボードを示し、ロスタイムであることを伝える。が、今回はちよつと状況が違った。

「尚…?!お前確か事故で…」

「!?!」

安齋が覚えていないのも無理はない。実界の時の記憶は、人に依つて残らない事もあるのだ。

「ほんなら、この時間は俺が死ぬまでの時間なんか、尚!?!」

ピッ

声を出せないのが辛い。

笛を鳴らすのが精一杯だ

青嶋『…どうやら、主審の友達だったようですが、その記憶を思い出せないようです』

ロスタイムは動き続けていた。

3 : 2 4 ; 1 2 . 0 5

楠元は走り出した

研『楠ちゃんはどっやってロスタイム過ぎすのかな』

青嶋『期待したいですね…』

心なしか、実況の声に力がないように感じられた。

ウェットスーツを着替えて、あつという間に一般人に馴染む服に着替えた。

「…尚、覚えてないかも知れへんけど俺たち親友やったんや」

別段急ぐ事なく、葛西の港を歩きながら安斎に話しかける。

ピ

笛を吹いて、首を振る。

「…そか、覚えてないか。でも中真と俺がコンビ組んだのは知ってるやろ」

ピッ

今度は頷く。鏡界でもギャラクティカは人気があった。



海岸に降りた五人はキラキラ輝く海を眺める。

遠くで観覧車のホイールが規則正しくゆっくり動いている。

線審の森鋤は海岸に来るのが初めての様で

海と同じくらいキラキラした目で水平線を見つめる。

「少年の様な目でこれ…（笑）」

楠元は思わず苦笑いした。

よくよく見ると、彼らの年齢にはらつきがあるのに気がついた。

波打ち際で遊ぶ線審はまだ顔つきが幼い…15、6ぐらいの年端だろつ。

もう一人の線審、加藤と予備審須川は

同じぐらい…30代前半。

主審の安齋は楠元と同じ30代後半。

「尚、ドラマじゃ似通った歳だったのに…何でも違うんだ？」

安齋は加藤からスケブを借りて、書き始める。

“ 審判は通常、死んだ人によって構成されている。事故に巻き込まれたり、自殺したりそれは様々だ。彼はまだ見習いだが…以前ロスタイムを経験した者なのだ”

「……………！…そ、か……………」

安齋は捲ってさらに書き込む。

“ 死ぬ前の記憶が残る時と、残らない時があるのは生前の記憶の内容に比例する…と聞いた事がある。…もし、昔の私を知っていたら教えてくれないか？”

楠元は言うのをためらっていた。

深呼吸をして、安齋の方を見る…

「覚悟、出来てるか？」

安斎は静かに頷いた……

2:00:00.00

安斎尚也 心優しき青年は

大きな事件に巻き込まれた……

やってもいない容疑を掛けられ、

警察に何時間も拘束され

ズタズタにされた彼の心は崩壊し、

真犯人が捕まり釈放されたその足で

彼は警察署の屋上から身を投げた……

程なくして、その自殺の理由から警察の過剰な取り調べを露呈する事になった。

それは、紛れもなく彼の心の悲鳴で…

友人の楠元は遺族と共に警察を訴えて

勝訴を勝ち取り、損害賠償として

300万を受けとる事が出来た。

“ そんな事があつたのか…”

「でも、よかった…まさかこうして会うとはおもわへんかったけどな」

「…お前、こんなとこで何してんねん！」

後ろから怒っている声 中真だ。

「……中真……」

楠元は、黙ったまま立ち上がる。

審判達も付和雷同した。

「なあ、楠……」

「はい、そこまで。名前は駄目、バレるやろ」

「十分口調でバレているやろ」

ところが、平日の昼間の葛西臨海公園には驚くほど人がいない。  
そのため、その心配はなかった。

「……」

「……」

二人は黙ったまま、公園内を歩く。

審判達はそんな二人を心配そうに見ながら、後をついていく。

「中真。もし俺がこの世からいなくなったらお前一人でどうする  
気や？」

「…はっ？」

ピッ！

安齋尚也の笛が聞こえた。

青嶋『忠告の笛です。それ以上言わない様にとの事でしょう』

研『他の人に自分が死ぬって事言っちゃ駄目だからね』

「もし、や。深く考えんでええ」

「…芸能生活から身引くわ。多分な」

「チューニング屯崎みたいにピンでやってく事はでけへんか?…強  
制はせえへんけど」

「その時にならんきゃわからへんな」

1 : 27 : 38 . 15

別れの時間が残酷に、ただ虚しく過ぎていく。楠本がチラリと安斎  
の方を見ると、それ以上言ったらイエローが出ることを示唆してい  
た。

「せや。楠元さんのところに黒い葉書混じってたやろ?あれ、楽屋の  
前に落ちててん。コレなんやけど…コレ俺宛やん」

中真は裏返して宛名を見返した。

「ぐああっ!?!」

先ほど首に印された刻印がより濃くなる。

ピッピッ!?!?

安斎が直ぐに楠本に駆け寄る。

「！」

そして、安齋主審は振り返って中真を見た。

中真は丁度黒い葉書の裏を読んでいたが、その目は明らかに正気ではなかった。

葉書から声が聞こえる “殺せ” と……

(呪いの…葉書だ……！！)

「中真…っ!?!」

楠本は中真に押し倒され、首を絞められる。

「ぐぁ……中真……っ…は、離せ……」

中真の手の力はますます強くなり、

楠元の顔から血の気が無くなる時



安齋主審は意を決した。

「汝、我は転生の力を捨て、この呪い解くことを命ず」

須川TK、加藤・銛鋤線審が鏡界へ強制送還される

「…!??」銛鋤

「……!!」須川

「!!!?」加藤

安齋が触れた瞬間その葉書は苦しそつにもがく

“お…おのれええっ!!!”

青嶋『っ!!とうとうやってしまいました、安齋主審、呪いを解こうとしています!』

小西『審判が、死の原因となったものを駆除すると言う事は、普通はしません。ですが…』

安齋の体が光っていく

「呪いよ、滅せ 我が身と共に!!」

辺りが光に包まれた

超音波があたりを大きく揺るがした

キイイイイイイイイ!

「今度は、お前を守れてよかった…ありがとう、隆史……」

安斎は超音波の発した光で、消し飛んだ……

楠本と中真は同時に目を開けた。

楽屋内だ。いつの間に眠り込んでしまったのだろうか。

「あれ…？いつの間に…」

違う、確かに俺は…尚に逢っていた。でもさっきの光は…

一体なんだつたるうか……？

「やな夢見た……楠元さんの首を絞める夢……」

違う。…まだ、その感触が手に残っている。夢じゃ…ない？

中真は自分の手がわなわなと震え出す。

「楠本さん！…！！！」

中真は楠本の首を見て驚愕した。

確かに楠本の喉元にはくつきりと指の跡が生々しく残っていた。

しかしその場に在ったはずの物が消えていた

あの首に書かれた冥王星の聖痕と、黒い葉書が…

f i n . . .

## 端書き

須磨です。今回はホラーで行こうと思ひまして。

「口調で誰を元にしたか一目瞭然ですが、良いでしょう」と涼華先輩に言われました。

超音波というのは、時間軸の歪みで生じたもので彼らは最初の状態に飛ばされたわけです。

もちろんその原因となった呪いの黒い葉書と聖痕は抹消されて…それでも残ってしまったのが、中真さんの指跡であった。と言う、本当にホラーな感じで締めてみました。

2008 . 3 . 11 - 14

-

## ついに端書き

改めまして、初めまして。新田和美こと、中峰涼華と申します。  
観覧車のくだりを加筆&修正しました。

安齋主審の過去を書きたくなりまして、  
後半は見事に融合させてみました。

以前より格段に向上した気がします。  
評価&感想をぜひお願いします。

NOS(2009/8/9)

-

FILE・10 LOST LOVE (前書き)

元・ニート編。すれ違いの恋の末……目を反らさずに最期までご拝  
読ください。

FILE・10 LOST LOVE

f i v e h u n d r e d t w e n t y - f i v e t h o u s  
a n d s i x h u n d r e d m i n u t e s

これは一年を分で表した時間だ

途方もなく長い時間であり、あっという間に流れる時間なのだ。

8760時間というのはそういう時間なのだ。

206

稲守有希恵のロスタイムは途方もなく長く、そして、多くを学んだ  
8760時間だった。

そして、最後の一日が始まる

有希恵の誕生日だった。

この一年…付き合っ来て来た審判を紹介しよう。

主審の中平悠生。情に厚い熱血な人であるが、時々暴走する。

線審の平居拓海<sup>タクミ</sup>。主審のサポートとして彼程優秀なのは他にいない。

同じく金井駿<sup>シュン</sup>。平居とのコンビネーションは目を見張る。

予備審判（以下TK）の武本恵太。暴走がちの中平を押さえる役目が多い。

## 「かけ違いの恋編」

彼等と出会ったのは普通に帰宅していた時だった。

21歳の誕生日だった。

駅を降りている最中に足を滑らせて、落ちる！と思った時だった……

プーッ！



笛の音がなり、周りが停止 いや、自分が停止したのか……

有希恵は前方に審判を発見した。

「な、何なの……?」

時間は……

6 8 5 9 : : 5 8 ; ; 4 5 . 0 0

青嶋『さあ、稲守有希恵のロスタイムは……』

青嶋は言葉を詰まらせた。

すかさず小本が解説する。

小本『一年ですね。今までで一番長いかも知れません』

青嶋『……………どれだけ無駄に時間を過ごしたのでしょうか……?』

小本『今回それを言うのは止めましょう』

それから有希絵はバイトを辞め、歌を学び今までは違うコミュニ

ニケーションに触れてきた。

「おはよ、皆」

ピッ

審判達は、この一年リビングで寝泊まりしていた。

今まで問題無く過ごしていた五人のこんな生活が、今日で終わる

「最後の日だし、奮発して焼肉食べましょ！今朝はスクランブルエッグとトーストよ」

「……！」  
「……」  
「……」  
「……」

今日は全てを終わらせる日。

そして迎えるはずの無かった22歳の誕生日を迎えたのだった。

18:35;46.15

皆が食べるのを笑いながら見ている有希恵。

この一年、大変だったけど一番幸せな一年だった。ここまでこれたのは彼等のお陰だと、有希恵は強く感じていた。

彼女は自分自身の心がどこを向いているのか、そして、気持ちを強くすることを学んだ。それは限りある人生でかけがえのないもので、最後の勉強だった。

この期間で、ロスタイム中の人と何人かに会った。彼等も少ないロスタイムの中で、学び成長していった。

きっと、人はどんな時でも勉強しているんだなと、つくづく感じた。

時間は昨日に遡る

「え、辞めるの？」

音楽を教えてくれていた先生はちよつと驚いていた。

「ええ、一年間ありがとうございます御座いました。∴それで、遠藤君に渡して欲しいものが」

「え、彼に？」

そう言つて、稲守は新譜のCDを先生に渡した。

「お願いします。あと、先生が使う曲をコピーに入れておきました。これです」

今度は自分のポシェットから出したMDを先生に渡した。

「色々ありがとう、稲守さん」

「こちらこそ。先生のお陰でとても楽しかったです」

深々と頭を下げる有希恵。それに倣うように、審判達も頭を下げた。

今日は最期の日

五人は花塚マーケットに、買い物に来ていた。

焼肉用の肉を選んでいる。

（これなんか美味しそうじゃない？）

“ いいですねえ ”

“ 俺、カルビ食いたい！ ”

線審の二人はカンペで会話していた。

( O・K・よ！主審さんは？好きな部位とかあるの？ )

ピッピッ

笛を吹いてロースの文字をさす。

( 私と同じね！ )

周りに不審がられない様、そっと笑う。

TKは線審を介して会話する。

“ 予備審、ハラミだって ”

( はいはい、忘れてないわよ )

野菜もきちんと買って、花塚マーケットを出る。

…もう、ここで買い物できるのも最後だ。

振り返って軽く一礼をすると、真っ直ぐ家へと帰る。

（焼肉パーティーだ!!!）

ピーッ！

「……！」

「……！」

「……！」

テーブルには切った野菜と、鉄板と肉が並んでいる。

有希恵は静かな彼らにいい加減辟易していた。

「……ねえ、もう最後なんだからさ。何か話そうよ！」

審判達は顔を見合わせた。

主審がサインする。

《上には俺が言うておく。最後まで構わないだろ》

線審二人とTKはようやく口を開けた。

「はーっ！…この一年喋ってないから辛かったあ！」

「ホントな。まさか一年ってロスタイムが在るとは思わなかったも  
ん」

「喋らなすぎて、自分の声忘れちゃってたよ」

「」「そうそう！…！」

「私は中平だ」

主審もようやく口を開いた。

「俺、金井！」「僕は平居です」

「私は武本ね！」

「自己紹介も済んだ事だし、今日は焼肉パーティーで盛り上がる  
ねっ！」

「おーっ！…！」



場面変わって、ここは音楽教室。

「辞めた!？」

同じスクールの皆は仰天していた。

唯一人を除いて。 遠藤拓真だ。

「いなくなって清々すらあ」

「そんな遠藤君に渡してって言われた。はい」

中身はラップの新譜CDだ。

「拓のツボど真ん中だな、それ」

最近、確かにラップをよく聞いていた。

ジャンルもピタリだ。

「ウエー、ストーカーかよ。稲守って」

「とか何とか言っつて。稲守って名前覚えてんの拓ぐらいじゃなか  
それにはメッセージカードが付いていた。」

拾いあげて読み上げたのは遠藤の友達の春木。

「えー何々？《渡すの遅れてごめんね。実は私、今日が最後です  
ホントは直接渡したかったけど、勇気がなくなつて。だから手紙に書  
きます。遠藤君の歌声好きだったよ。逢えてよかった。さようなら  
……………稲守》……………えっ……………」

皆は固まった。

《今日が最後》 《さようなら》

この二つの言葉が引っ掛かったのだ。

「ちょっと貸せ……」

と言って遠藤は春木からメッセージをひったくった。

メッセージには続きがあった。

P.S .

ずっと、好きでした。でも、言ったらきつとこの関係が壊れると思  
ったので、こんな形で書く形になりました。勇気を出せなくてごめ  
んなさい。

稲守 有希恵

焼肉パーティーでは皆笑いが絶えなかった。

有希恵が楽しく盛り上げているのもあったが、何より一年も話して  
いない事は相当なストレスで、笑う事も禁じられていたから皆たか

が外れた様に喋り、笑って食べていた。

暫くして、電話が入る。

「はい……あ、先生！」

『何、あのメッセージ!?』

「……はい?何の……!」

有希恵はすぐに分かった。

『ちよつと! ……何だよ、あれ』

声が変わった。この声は、

どこかホツとするあの人の声。

「遠藤君………」

『気持ちわりいんだよ。死ぬんだったらとつと死んだら良いじゃん』

遠くで先生が遠藤君！と叫んでいた。

有希恵は遠藤をよく知っていた。

ぶっきらぼうだけど暖かな言葉に、

有希恵は涙を流していた。

「……それでも良いの。最後に遠藤君の声聞けただけで満足よ。今までいっぱいごめんなさい。素敵な歌声をありがとう………」

有希恵は電話を切りさらに電話線を抜いた。念の為に、携帯電話の電源も切った。

「さあ、…もう無いの！？ハラミク！！！」

審判達は騒いでいた。有希恵もまた、その談笑の席に戻る。

あと四時間を切っていた。

パン！

「お前、マジでアホだな！何であんな事言ったんだよ！？」

春田が、遠藤を叩いていた。

「……駄目だね。電話も携帯も繋がらない」  
先生は受話器を降ろして天を仰ぐ。

「おい、何とか言ったらどうだよ！？」

春田が胸倉を掴んで揺さぶると、

遠藤は微かな声で呟っていた。

「……言い返してこなかった……いつもなら、何か言っても冗談  
みたいに笑って返してたのに……」

「拓……？」

「本当は、嬉しかったんだ……なのにいつも気持ちとは逆向きに言葉が出ちまう……また、「冗談かと思ったんだよ……だって不相応じゃん。俺と稲守って」

声が、だんだん震えて来る。

先生も心配になる

「遠藤君……？」

「……なのに、向こうから好きって言ってくれた……信じられなかったんだよ！こんなくだらねえ奴なのに、好きって言ってくれたんだぜ！？俺………とんでもねえ事………っ………！！！」

遠藤は声を抑えて、涙を流す

そう。彼もまた、有希恵を好きになっていたのだ。

綺麗で可憐な彼女と普通よりちょっと劣った自分が釣り合うわけがないと 思い込んでしまっていた。

でも、そうじゃなかった。

互いにこの想いに気付いていた筈だ。 だけど、その“釣り合わない”が邪魔をして二人とも言う事ができなかった……

こんな残酷なことはない。

有希恵の部屋にあった荷物は全て、マンションから出してあったから、後片付けの皿と鍋は洗って燃えないゴミのスペースにおいてしまっ。

後は手紙と鍵二つを管理人の使う窓の前において、五人はマンションを後にした。

後二時間。

夜の為、人通りは少ない。



「今まで一番忙しかった一年だったけど、充実した一年だった！  
皆のお陰だよね」

笑顔の有希恵に対して

齒痒そうな審判達。

それを見て、稲守は正論を述べる。

「だってしょうがないじゃん。自分の不注意なわけであなただが悪  
いわけじゃないんだよ？」

「  
」  
「  
」  
「  
」  
「  
」

喋る時間は終わった様で、皆また黙ってしまった。

それでも、有希恵は話を止めない。

「私、両親とも交通事故で亡くしてるし、一人っ子で頼れる親族い  
ないし。きつとこつという運命なんだよ」

「……好きです」

長い沈黙の後に、不意に出た中平主審の言葉に四人は驚いた。

「えっ……」

有希恵の手を取る中平。

「……あなたの写真を見た時から、私は……稲守さんの事が好きです……」

「……でも……私は遠藤君が」

中平は有希恵の言葉を遮る。

「知ってます。でも、稲守さんと遠藤さんが釣り合つとは思えないんです」

有希恵は言葉を探しながら、慎重に言う。

「……分かってたよ。……私を好きでいてくれてありがとう。でも、

あなたの気持ちに答えられない。だって、遠藤君のこと愛してるから」

「……そうですか……」

中平主審は、それでやっと口を閉じた。

管理人の部屋の電話が鳴る。

「はい、弥生です」

『すみません、夜分遅く。そちらに稲守有希恵さんていらっしやいますよね?』

「?いますけど……」

管理人は玄関に向かっていている窓のカーテンを開ける。

手紙と鍵が二つ置かれていた。

「んーとね《訳あってここを離れます。今までありがとう御座いました 稲守有希恵》って手紙と鍵二つあるから、もう居ないね」

『！！！！有り難う御座いました、失礼しますっ！！』

電話は切れた。

「なんなんだろうね……？」

西船から電車に乗り、自身が足を踏み外した浦安に向かう。

17 ; 15 . 07

体が重く感じる

死期が迫ってくるのを肌で感じ始めていた。

ジワジワと、痣が浮き出てきた。

階段を落ちる時にできた痣の様で、有希恵は死に対して恐怖を感じていた

痣の中には触れたら痛いものが多かった。骨にひびが入っている様な感触にビククリする。

「つつ……!!」

程なくして、浦安駅に着く

5：28・15

自分が足を踏み外した階段は目の前だ。

その階段を上り、ホームに立つ。

60秒カウントにはいる頃、

反対側のホームから…

「稲守っ!?!」

の音が響いた

振り替えると向こうに遠藤の姿を見た

だが、もう時間が無かった…

ズダダダダッ!

目の前から消えた有希恵に

遠藤は叫んでいた……

「稲守ーっ!」

ピッピッピッピッーッ

遠藤は階段を駆け降りて、

向かいの階段下で事切れた有希恵の側に急いだ。

冷たい身体を抱き締め、

遠藤は絞り出す様な声で叫ぶ。

「なあ、あんな言葉が最後なのかよっ、俺だって、稲守の事好きだったんだよ！！……起きろよ！！いつもみたいに……笑ってくれよ！！……有希恵！！」

深夜の浦安駅に

遠藤の慟哭が悲しく響いていた

誰かが言った。

何もしなかった事より、やってしまった事の方が重い、と。

f i n . . .

端書き。

小さなボタンのかけ違い。

段々大きくなっていくのを直そうとしなかった為、二人は結ばれる事はなく……

実はそんな風に恋を諦めた人が多いのは事実。

彼女達と同じ末路を歩きたくなければ、どうか大事になる前に一言会話をしてみてはくれまいか。

一言話す勇気があれば、二人の気持ちは伝わったかもしれない…何もやらない事より、嘘を言ってしまう事の方が重い。

それは、相手の事を踏みにじる行動であるから。

小川昂でした。



## 追記

出だしの英語はヒーローショー編最後に使われた楽曲 season  
s of loveです。

2008/3/24・25

-

こちらに端書き。

和美こと涼華です。全体的にボリュームアップさせました。

正直、編集しながら泣いてしまいました。

皆さんの感想・評価を待ってます。

NOS(2009/8/9)

-

FILE・11 TRUE STORY (前書き)

元・感謝編。この話は後の話に大きく関わる事になります…ある都合で前の話は収録出来ませんでした。ご了承願います。

高度経済成長期時代を知っているだろうか。

あの時代を知る者はよく昔は良かったなんて言葉を言っが、今と言  
う時代もそうそう悪いものではない。

だが、表だった事件が増え出したのはやはり今と言っ時代が作り上  
げたものだとは感じる。

それは今を生きる大人達が作り上げた環境である。

その中でも極めて例の無い作品は誰の目にも新鮮で、見る者を圧倒  
させ引きつける魔力を秘めている。

ロスタイムライフや相棒、ごくせん等が好例だ。

ある新聞のコラムにこう書かれていた。

「我々も有名になったなあ」

上坂は新聞のコラムを見て感嘆の声を上げた。須川が後に続く。

「随分前から活動してたけどまさかドラマ化するとは思わなかったね」

横から見っていた加藤はドラマに出て来る審判の顔を見て一言。

「ただなー、テレビの審判達、年が似通ってたんだよなー」

銚子が後を続ける。

「実際は年齢のばらつき凄いもんね。……あ、あの爺さんは？」

目の前を八十ぐらいの好好爺が横切る。

「あの御方は主審の達人だ。一度サポートをした事があるんだけど、  
凄い頭の回転早いの」

加藤が小声で銚鋤に告げる。

須川も後に続く。

「俺、新米の時にあの人に扱われたから解るんだけど、半端ない達人だぞ」

「…そんなに凄い人なんだ……」

銚鋤が感嘆の声を上げる。

「良いなあ、線審と予備審……主審は一部の人が半永久的につくから変わる事無いしなあ…噂には聞いてるけど」

上坂は、安斎と違い私語厳禁にはしていない。それに当人もよく喋るのだ。

それは審判という仕事柄だろう。

安齋は元々寡黙だったからオンオフが解りづらかったが、上坂等のパターンは実に解りやすい。

一方、実界では

秀英新聞社 編集フロア。

ビリビリとガラスが鳴る。

「井上!」

声が轟く。彼は轟剛鳴 名前の通りよく大音量で部屋中の物をビリビリさせる。

この声で窓を何遍買い換えた事か……今は強化ガラスをさらに改良した耐音ガラスのお陰で被害数はグンと減ったが。

「なんだこの端にも棒にもかからん記事はあ?!」

彼は編集者の中でも群を抜いた実力。

轟に叩き上げられて育った記者は数知れず　だが、井上正という新米記者にはどうにも理解されないようだ。

怒られた井上は足取り重く編集フロアを後にした。

机のトントンという振動で編集フロアの人達は耳栓を外した。

「今日はいつも以上に声張ってましたね、どうかされたんですか、轟チーフ?」

「井上という若造の記事を見てくれ、すぐ解る…」



頭を抱えた轟は珍しい。

どんな記事か、皆些か興味を持つ。

「えー、何々……脱字に誤字、あ、言葉が不適合……こりゃあ、チーフじゃなくても怒鳴るわな……」

「 どうしてそんな子がこの会社に？」

「 コネで生きてける程世の中甘くないって教えなきゃな……」

轟の背後にどす黒いオーラが漂う。

（久々閻魔モード!!!）

編集フロアは一気に地獄と化したのだった……

井上は、どうにかして轟を飛ばそうとしたが、いかんせん彼の方幅の方が広くて飛ばすのは無理だと悟る。

「飛ばせないなら……殺してやる………」

その頃、鏡界に指令が下っていた。

その対象者のデータを以下に記す

轟 剛鳴（49）

職業：敏腕編集長  
フロアチーフ

状況：毒殺（青酸ソーダに依る）

家族：メイチ（26年前に離婚。その後母親死亡。息子は施設に  
消息不明）

目標：優秀な記者を輩出する事（本人曰く宿命とか）

ロスタイム：6：20；28・15

「真実編」

三月も終わりに近付いて来た麗らかな日。

鬼のような仕事量をついに片付けた、いい朝を迎えていた。

「諸君！本当にお疲れ様！！ジューズで悪いが祝杯をあげようじゃないか！」

上機嫌な轟を見て場が和む

「乾杯ー！」

自前のコップを空中に掲げて一気に飲み込む

ドクン

鼓動がなり、まず周囲の動きが止まる

「…んっ??何だ??」

目を擦ったり、頬を張ったりしてみたが どうやら夢ではないらしい。

後ろに人の気配を感じる。

振り返るとどうみても自分以上に年を取った好好爺が黄色いユニフォームを着て直立不動で立っていた。

彼の名は夜来遼<sup>ハルカ</sup>。この道の達人である

旗を掲げた線審は右から千堂囀<sup>サエリ</sup>、齋木公明<sup>キミアキ</sup>。

電光掲示板を持つ予備審は西紀英<sup>スグル</sup>。

トップに近い人の為、鏡界側も達人を要請したようだ。

夜来主審はコップをさし、においを嗅いでみる、と促す。

何がなんだか解らぬまま、轟はにおいを嗅ぐ 異臭のような気がする…

夜来主審は更に、コップの内側を見る、と促す……

よくよく見ると、何かの溶け残りがこびりついていた 加えて、このアーモンド臭……

「毒??にしては何も変化ないが……」

そこで、轟は電光掲示板を見ると

6 : 19 ; 42 . 05

となっている…

「私が死ぬまでの…有効時間ってわけか…」

幸いにも轟はすぐに理解してくれた。

青嶋『さあ、鬼といわれる編集長、轟剛鳴のロスタイムは六時間二十分です』

小本『今回は珍しいケースですね。毒殺という事は他殺という訳ですから』

青嶋『それも含めて、果たして轟さんはどんなプレーをするのでしょうか？』

小本『期待したいですね！』

轟はちよつと考えて、ある人物の元へ向かった。井上がコネを使ったという人物に会いに行くことにした。

コネを手引きしたのは井上保司。実質は井上正の母方の兄である。

なんであんな半端な奴をコネ入社させたのかを尋ねに行くことにした。

専務室前

轟はノックをして、部屋に入る。

「失礼します」

専務の井上は、突然の轟の訪問にビックリするが快く迎えてくれた。

「轟君！どうかな？正の奴、うまい事やってるかい？」

開口一番に、井上は正の事を訊く。

「彼をどうしてこの社にいられたのですか？奴は記者という仕事を舐めていますよ！」

若干声を押さえて、保司に吠える。

「まだまだ正は青いからなあ、そついう所を君に鍛えてもらいたいんだが」

「…私に、どうしろと言うんですか？」

6:00:34.05

くしくも、限られた時間は上手の手から水が零れていくように無情に過ぎて行く

それを知らない井上は轟に進言する。

「君の有能は、この会社で高くなっていくんだ。それに」

「どうしてですか！？私は矢つのは怖くありません、ですが！…！井上が記者に向いていないのは火を見るより明らかですよ！」

自分にどうしようもできない苛立ちが爆発した。ここまで感情を表に出した事はこれまでなかった

今までは感情を出す事なく、人を扱ってきた。一度だって感情的になった事はない。それだから彼が激昂する所は皆見たことが無い。保司は仰天した。

「轟君…どうしたんだね、いつもの君らしくないな」



轟は、横目で審判をチラリと見た。

夜来主審は笛を吹くことはせず、静かに首を横に振った。

「…なんでも、ありません……失礼しました」

轟はすぐに部屋を出た。審判達は暫く動けずにいた。

「知らないのか……それはそうだな。生まれる前に離婚したからな……」

主審は思わず振り返った。

「失礼します。なんですか、保司さん？」

とノックなしに入ってきたのは、噂の井上正だった。

保司に呼び出されていたようで。

「…正。君の両親の事だが……」

「はい？」

「君は自身が養子だと言っているのは知ってるね？」

「……ええ。それが？」

つっけんどんな言い方に……なぜか轟がダブる夜来主審。

「君の本当の父親を、私は知っているんだ」

「だから何だって言うんですか。今更お袋を捨てた親父の事なんてどうでもいいですよ」

正はそう言つと、踵を返して扉に向かう。

「名前は轟。轟剛鳴だ」

正の足が止まり、表情が固まる。

審判達も仰天した。

「…は？」

正が、やっと声を出した。

何故か、顔から血の気が引いていた…

青嶋『これは衝撃の事実！審判達も固まっています』

小本『養子と言う事は……今、正さんの情報が来ました。』

26年前に、二人の間に子供が生まれました。

ですが、その六か月前に奥さんの眞子さんが離婚届を置いて彼の元を去って、眞子さんは正さんを生んだ時に死んでしまいました。

元旦那であった轟には、奥さんが死んだ事も、子供が生まれた事も伝えませんでした。

それが奥さんの遺言だった為です。そのまま彼は施設で育ち、六か月になる頃井上夫婦（夫婿養子）に引き取られて現在に至る……とあります』

青嶋』でも、どうして井上専務は知っているのでしょうか？』

小本『密かにDNA鑑定を頼んだようです。ですから、正さんと轟さんを引き合わせたのでしょう』

「もう一度言う。正君は轟剛鳴の子供だ。これは事実だ。動かしようのない真実なんだ」

保司は真剣な声で、正に語る。

正は目を見開き、振り返った。

「嘘だ……あんな奴が俺の親父な訳が……」

「そっくりなんだよ。声が…最初は信じられないと思った…だけど、DNA鑑定したら一致したんだ。間違いない。正君は」

「嘘だ!!」

バリイン!

正の大声で、保司の後ろの窓が耐え切れなくなり、音を立てて碎け散った…

「……間違いなく、轟剛鳴の息子だ」

審判達は急いで轟の後を追う。

青嶋『審判達かなり遅れてのスタートダッシュですが、果たして追いつくのでしょうか?!』

夜来主審は迷わず社長室へと向かう。

途中で予想通りに、轟と合流できた。

「記者達に最後の檄と、上の人らに礼を言ってきた」

轟は走りながら、審判達に小声で告げた。

夜来と轟の走りはトップアスリート並みに早く、静かだった。

他の審判らも息荒く走ってはいなかった。

それどころか、まだ余裕があるようだった。

五人は社長室に着いた。

ノックをし、中の返事を待つ。

「どうぞ」

轟は審判達にここで待ってくれ、と指示して

「失礼します」

社長室に入った。

「先程ガラスの割れる音がしたが…」

久遠社長が若干あきれ口調で轟に言う。

「はっ？私ではありませんが……」

「まあいい、何か用があるんだね」

久遠は轟に先を促す。

轟がいきなり頭を下げたので、久遠はビックリした。

「今まで色々ご迷惑をお掛けしました。最後まで会社に迷惑掛ける形になってしまい、申し訳なく思っています」

「…轟？」

「失礼しました。これからも頑張ってください」

轟は久遠社長に二の次を継がせないように告げ、社長室から出てきた。

時間は5:25:18.17

「世話になった場所に挨拶回りだ。車は狭いから、フロアで待っていてくれないか？必ず三時間後に戻る」

夜来主審は静かに頷いた。

青嶋『さあ、ここで審判とまた別れましたが、気になる井上正さんはどちらに行ったのでしょうか？』

小本『ちょっと遅れて社長室にやってきましたよ』

扉を開けようとした正はハッと気付いて、ノックをした。

「どござ」



すう、と一呼吸置いて

「失礼します」

正が入る。

「轟かと思った……君の名前は……」

久遠はちよつとビックリした。

審判達も話を聞くため、素早く中に入った。

「井上正です。さっきガラスを割ったのはお……僕です。申し訳ありませんでした」

久遠と夜来は確信した。

「……驚いたな。まさか、あの轟に息子がいたなんて……」

「え……？」

正は顔を上げる…

「気がつかないのか？轟と君の声、奇妙なぐらい同じなんだよ」

いきなり正が泣き出した。

それに、久遠卓志は驚いた。

「どうした？」

「お……僕は……と、とんでもない事を……」

井上は泣き崩れた。

久遠が立ち上がり、井上に駆け寄る。

「話してみる。何があったのか……」

正は静かに、自分のした事を話し始めた…

専務のコネで新米記者として入った事、轟といきなり衝突してしま  
った事、殺す為にネットでシアン化ナトリウムを購入した事…

そして、轟が自分の本当の親父だと知った事も話した。

「ん…？でも、おかしいな…ついさっき轟が来て“最後まで会社に  
迷惑掛ける形になってしまい、申し訳なく思っている”とか言っ  
ていたけど……」

正はビツクリして顔を上げた。

「?!い、生きてるんですか??し、失礼しました!!」

井上は弾かれたように立ち上がり、急いで社長室を後にした。

「あ、井上っ!？」

久遠は大変な事を聞いてしまった。だが、今の矛盾は……井上の発  
言はまるで、轟を死なせた後のように感じたのだ。

もしかしたら、…いや、何か不思議な事が確実に起こっている。

それがなんなのかは全く判らないが…

編集フロアの壁は分厚く、且つ、扉にはキーが設定されており、編集者らに開けてもらう以外方法はなかった。

だから審判達は待ち合わせスペースで待つしかなかった。

井上正が走り抜けて行くのを彼らは目撃した。

青嶋『おっと、正さんが走ってきたぞ？』

小本『しかし、編集者全員止まっていますしねえ。中に入る事は出来ませんよ？』

井上は扉を開けてもらう様、力強くノックする。

「くそ……どおなってんだよ！！生きてるだつて……開けてくれよ！！！」

曇りガラスも幸いし、中の状況が全く分からない。

「実の父親に毒盛るなんて……俺、サイテーな息子じゃんか……」

線審の二人は顔を見合わせた。

二人が正に近付くのを夜来は笛で止めた。

線審は振り返り、主審は首を横に振った。

3 : 5 7 : 3 8 : 1 5

約束の時間まで約一時間半。

夜来は、腰に付けておいたペットボトル（水）をくいと開けて、グイと飲む。

線審二人は腹持ちする御握り二つと同じくペットボトル（水）を、不安げな表情で頼張っている。

予備審もペットボトルだが、サッカー選手達が使っ様なストローが付いていた。万一、電光掲示板にかかつては事なのだ。

先程まで喚いていた井上は審判の真後ろで真剣な表情をして、誰か来るのを待っていたが、泣き疲れたからか一定のリズムで頭を傾げていた。

その頃、光檀舎の前に着いた轟。

昔馴染がここの編集長になったのを聞いていたから、やって来たのだ。

「いらっしやませ」

「編集長の西島を呼んでくれ」

受付嬢は困ったように応対する。

「あの……失礼ですが、あなたは…？」

「轟と言えばすぐ会ってくれます！」

受付嬢が受話器を取って連絡しようとしないので、轟はイライラしたが…

噂をすれば影 見上げた先に西島が。

丁度階段を下りて来るところだった。

「…西島…！」

声は若干抑え目に、手を大きく振る。

「…轟じゃないか、久し振りだなあ！」

その姿に気付いた西島は一瞬驚いたが、駆け降りて握手をする。

「お前、ここの編集長かよ！随分偉くなったなあー」

「轟こそ！見てっぞ、秀英新聞！」

西島が手に持った新聞を刀のようにして、ポンポンと跳ねさせる。

よくよく見ると、西島が手に持っていたのが秀英新聞だった。

「私の場合は記者を育成してるだけに過ぎないがな」

「でも、お前の熱意は新聞通して感じてた。相変わらず吠えてっただろ?」

「高校頃からガラス割り出してたな、声で」

「そーそー。そんでお前の母さんバイトしだしてな!」

突然、轟の表情が沈む

「…お袋な、七年前に死んだんだ」

西島は表情を凍らせた。

「何で俺に知らせてくんなかったんだよ?」



「身内だけでやったし、余計な心配掛けさせたくなかったしな…：そうそう。お前に会いに来たのは、もしかしたら…：眞子の事知ってるんじゃないかって思ったからさ。…眞子、幸せに暮らしてるかな…」

今度は西島が表情を暗くさせた…

二人が離婚した事を唯一知っていたからだ。

それに、言わなきゃいけない事が多い…

「場所、変えるか。あそこのコーヒー、意外に味良いんだよ」

二人は一階の喫茶“ONCE”に場所を移す。

「…眞子ちゃん26年前に死んだよ…」

今度は轟の顔が変わった。

「何だって…?」

「遺書に、25年は自分の死を元旦那に伝えては駄目…ってあってな。生まれた子供の事も伝えるなって…」

轟は立ち上がって声を一段大きくした。

「子供だっ!?俺と眞子の…」

「…男の子なら正、女の子なら紫ユカリってのも遺書ユカリに書いてあってな…  
…元気な男の子が生まれた。

すぐに施設行きだったけど…正ってのがお前と眞子ちゃんの子供なのは確かだ。

今は名字が変わっちゃまってるから…そこまでは分かんねえけど…」

轟は、落ち着いて座り直す。

「生きてりゃ…26歳か…」

「本当なら去年のうちに話しときたかったんだ。約束の25年だっ

たし……

でも、俺も忙しくてな、とてもじゃないけど時間が作れなかったんだ。ごめん」

西島は遺書の他に手紙と、赤ん坊と眞子の二人の写真を轟に渡した。

俺と……眞子の……息子。

震える手で、写真を持つ。

赤子をそつと撫で、写真を裏返す……

写真の裏には1982・4・3 - 正の誕生！と書いてある。

手紙にはこう書かれていた。

《25年後の剛鳴くんへ》

“長いことあなたに伝えないでごめんなさい。

剛鳴君は何になってるかな？やっぱり編集さんやってるかな？

離婚を勝手に切り出してごめんなさい。

あなたが悪いんじゃないの。それは本当よ 私命がもう少ないって分かったから、剛鳴君を悲しませない様になって…

もしかしたら生まれる赤ちゃんと一緒に死んじゃったかな？

でも、安心していいよ。私と剛鳴君の愛情だから絶対に壊れない。

男の子かな？女の子かな？元気で生まれてくれるかな？

すごく不安だけど、あなたとの思い出を力に、私頑張れると思う。

社会人になった息子、あるいは娘に会えたかな？

親子って言うのは離れてもきつと分かりあえると信じてます。

もし道を外れそうなら、父親としてちゃんと指導して欲しいな。

最後に 私を愛してくれてありがとう。

さようなら

飯塚 眞子”

轟は最後の文章は霞んでよく見えなかった 涙が溢れていたのが分かった。

「……………っ、もっと早めにお前んとこ……………何だよ、俺息子にもう何  
もしてやれねえじゃん……………」

轟はあの時の離婚届をずっと手元に持っていた……………

そう。二人は離婚していなかったのだ…

それなのに、眞子の事を何も知らなかった……………

それが、とても悔しかった……………

その一方で、西島は号泣する轟を初めて見た

「え、何でだよ？これからだろ。お前ら親子が……轟………？」  
オロオロしながら周囲を見回すと、視線が痛い……

(俺が泣かしたんじゃないよ) (三三三)

約束の時間が迫っていた。

轟は袖で涙を拭いて、遺書と手紙、写真を持つ。

「……ありがとな………西島。じゃ、俺仕事あるから」  
轟は立ち上がり、足早に社屋から出る。

「轟、待てよ………轟!」

西島は後を追ったが、既に彼は車を走らせていた。

2 : 2 5 ; 3 9 . 2 5

轟が秀英新聞社に戻って来た。

編集フロアの階でエレベーターを降り、

その途中で、ソファに寝ている井上正を見つける…

「井上……？つたく……」

審判達が声の聞こえた方を振り返る。

…確か 井上……正、だっけ… !!

驚愕の顔から、写真を取り出して、赤子と正を比べる。

正は完全に寝ていた。

「すー…すー…」

赤子の頃の面影ははっきり残っていた…

「正、か……大きくなったな」

轟は髪の毛を優しく撫ぜる。

そして正を抱き上げ、編集フロアに戻った。

正のポケットから、何かが落ちた。

轟は気付いた。それが、シアン化カリウムの容器である事に…

奥の部屋の宿直室のベッドに寝かせる。

1 : 5 6 ; 4 2 . 0 7

轟は電光掲示板を見て、デスクに向かって手紙を書き始めた。

《 息子の正 》



“俺はお前に何一つ親父らしい事が出来なかった。

お前に殺されても文句は言えない

だが、俺は母さんを愛していた。…心から…だから、離婚届けと手紙を残されていなくなった時、どうしていいか分からなかった。

離婚届けは受理されていない。…出したくなかった、いや、出す事が出来なかった。

眞子を心から愛していたから……”

そこまで書いて、机の鍵付引き出しを開ける。…26年前の離婚届けだ。夫欄には何も書かれていない

“だから、眞子が死んでしまっていた事も、正が生まれた事も知らされなかった。

…母さんが25年も俺に隠していた。もし俺が…もっと早く気付いていれば……

正が犯罪者になる事も、止められたかもしれない。

俺も死ななかったかもしれない……だけど、正、これだけは言わせ

てくれ。

自らの命を断つのは辞めろ。正は俺と眞子の愛情の証しだ。

生きて、正は幸せになって欲しい。

生まれて来てくれてありがとう。

母さんの元に行くよ

轟 剛鳴”

涙が、手紙に染みを付けた

そしてその上に眞子の手紙と、遺書、写真を載せる。

まだ一時間以上ある。

一階に行って一服やって来るか…

シュッ

煙が棚引く。

溜め息とともに煙を吐き出す。

あとちよつとで死ぬのか…。

若干憂いを含んだ表情が、審判達に確認出来た。

…彼らはどうと煙草の煙を吸わない距離まで離れて轟を見ていた。

(…彼は、全部わかってたんだ…)

(当たり前じゃ。それが親と言う者じゃよ)

(こんな終わりです…辛くないですか?)

(彼はちゃんと自分の死を受け入れとるし、やるべき事をした…じやが、擦れ違いというのは些かつらいのじゃろうな…)

夜来は静かに溜め息を付いた。

刻一刻と、時は静かに、そして無情に過ぎて行った……

五分前には、喫煙エリアから離れて審判達のそばにいた。

「行きましようか」

審判達は静かに頷いた。

編集フロアに戻ると、丁度60秒カウントが始まっていた。

「もう、ここの皆ともお別れか……」

皆、轟に駆け寄るストップモーションである。

「……今まで、付いて来てくれて……」

毒が回って来た。

「はあ……うう……」

目が霞む……

意識の遥か彼方で笛の音が響いた

（ありがとう……）

ピッ、ピッ、ピッ……

「編集長?!」

「おい、誰か救急車呼べ!!」

編集フロアが一気に騒ぎに包まれる……

その声に、井上……いや、轟 正は目を開けた……

f i n .

端書き。

何か、久し振りに書いたからかな……

しかもメロドラマ系。結局家族って引力なんだなあと思いつつながら書きました。

手紙部分で説教臭くなった感あるかな、無いかな……ドキドキ……

でもこの達成感が何とも言えないね！

原口でした。

2008・3・29 - 4・1

-

さらに端書き。

毎度お馴染み、和美こと涼華です。

一部修正&加筆を加えてグレードをさらに上げました。

この物語、実は幾つか伏線です。

後の話に繋がっていきますよー…

NOS) 2009/8/11)

-

FILE・12 KID and FATHER (前書き)

元・爺孫編。上坂主審の初仕事から話は始まる。……一人は見たことがあるぞ!?



事故 それは時に残酷な結果をもたらす。

彼らは時に、人間の運命の歯車を狂わせる

それがたとい助かった命でも、また逢う事になるのだから

そんな一人となった今回の対象者

先ずはいつもと違う角度から物事は始まる……

「う……ん」

上坂は目を開けた。

……まだ、六時前だ……

「……あの事故は、忘れられないな」

ここは上坂の公団の部屋。

あの事故とは昔の…それこそ、上坂が最初に担当した対象者である。

1991年

十七年前の事だ。

「始めたばかりでまだ何も分からない事が多いですが、よろしくお願ひします!」

上坂の初めての線審は千堂と斎木。

予備審は須川だった。

「ま、あまり堅くなるなよ。リラックス、リラックス」

須川は上坂の肩の力を抜いてやった。

「先に言っておく。ロスタイムの定義を」

「一つは職務中の私語厳禁」

「一つはロスタイムのない人もいる」

「一つは雑念で行動すべからず」

声が違うな…？

「夜来主審！」

千堂と斎木はびっくりして振り返った。

「上からアドバイスしてやってくれと頼まれたの。君が今日から主審の上坂君だね。頑張りたまいよ！」

夜来が肩を叩いて上坂に激励する。

「は、はいっ！」

「今回の対象者はまだ年端も行かない子供じゃ…何ごととも無心を忘れるでないぞ」

本藤 真一 (5)

職業・保育園星組

状況：激突死（交通事故）

大好き：お父さん・お母さん・お爺ちゃん  
大事：お友達

ロスタイム：1：30；25：15

「親子編」

「お父さん！お爺ちゃんむかえにいつてきていい？」

「ダメ、そうでなくてもここら辺事故多いんだから」

「おーねーがーいー！」

真一はお父さんに頼み事をしていた。

「ダメ。暫く父さん仕事するから一階でおとなしく遊んでいなさい」

真一は不貞腐れて、リビングに行った。

真一はどうしてもお爺ちゃんを迎えに行きたかった。

でもそれには無理があった。二階からでも外に出たのが分かるように鏡を据え付けてあるのだ。

そつだ！

十五分後：

ドガラガツチャン！！

鏡では無く、外の窓からお父さんが覗き込む。

「何したー？」

「つみきくずしちゃったの！大丈夫だよー」

「そか。気いつけーやー」

どうやら、気付かれなかったようだ。

やったね

眞一は道路をゆっくり注意深く歩いていた。

紐で鏡の死角ぎりぎりまで行き、思い切り引つ張る。

積み木は足場を失い派手な音を立ててくずれた。

視線が外れ、そのすきに眞一は靴を持って外に飛び出した。

自分の声はカセットに吹き込んでポリユームをマックスにしておいた。

「お爺ちゃんのお迎え お迎え」

ゆっくり駅に向かって歩く眞一。

信号前はちゃんと止まり、青になったら右左を確認して手を上げて渡る。

ちゃんと見て渡るのを知っていた。

駅から、お爺ちゃんが歩いて来るのが見えた。

ちゃんと手を上げて信号を渡り、

「お爺ちゃん!」

と呼び掛ける。

孫の声に気付いた爺は、顔をほころばせて優しく手を振る。

「おお、真一!むかいに来てくれたんか!」

「うん!ちゃんと信号わたったよ」

「いい子じゃのー。じゃ、爺ちゃんとかいううな」

「うん!お爺ちゃんもちゃーんと信号みてね!」

「爺ちゃん目え悪いいかなー。真一に着いてくよ」

「じゃ、おててつながないとね!」

何とも微笑ましい。

無事に家に帰り着く。

「お爺ちゃん、いい?」

「ああ、打ち合わせどおりにな」

「こんにちはわ」

「お義父さん、遠路はるばるお疲れ様でした。真一ーお爺ちゃん来たぞ!」

リビングの扉からそーっと戻った真一は紐を回収して、玄関に行つた。

「お爺ちゃん、こんにちは!」

「真一は大きくなったなあ!」

「えへへ」



眞一はちっちゃくウィンクする。

お爺ちゃんは優しく眞一の頭を撫でる。

「ねえ、お父さん！公園に遊びに行ってきたいい？」

「わしが遊び相手かの？」

「すぐそこだしな、良いですよ。一時間で戻ってきなさい」

「はいー！」

公園でボール遊びをする二人。

「うまくいったね、お爺ちゃん！」

「眞一は頭が良いのー。お母さんにそっくりじゃ」

「お母さんはこういつのズルガシコイってゆんだ！」

「そつたなあ」

ボールがポーンと高く道路の方へ行ってしまう。

「お爺ちゃん!」

「おう、ゴメンなあ。手元が狂ってのぉ」

「たく、あいつは何を手間取ってんだ? 切は近いつてのに!」

西島は急いでいた。

時計に気をとられたその時、

周りの動きや、車が停止した。

「ん? ……あれー??」

真一はボールを拾って周りの様子がおかしいのに気がついた。

ピーッ!

青嶋『…さあ、本藤眞一君のロスタイムは一時間半です』

小本『こんな小さな子供が事故に遭ってしまうのですね……』

やはり、実況や解説の声も暗く感じる。

上坂は眞一の肩を叩いて止まった車をさした。

「…？僕、死んじゃうの？？」

上坂は頷いた。

「ん…僕がいけないなあ、しかたないっちゃしかたないよね」

上坂は困ったような笑顔を浮かべる。

（達観してるなあ……）

「お爺ちゃんも止まってるんだ……すなばであそぼーっと」

最後の時間だからこそ、遊ぼうと思ったようだが、眞一はちょっと

考えて自宅へそーつと戻った。

紙とクレヨンで絵を書く。

一時間程熱心に書き終わると、お父さんの目をつまい事すり抜け、一枚の紙を置いて家を出る。

「お母さんには……ここなら分かるかな」

真一は背を目一杯伸ばして郵便受けに紙を押し込んだ。

公園に戻り、お爺ちゃんのビックリした顔にビックリした。

そして車を運転している西島の顔も驚愕していた。

お爺ちゃんの手紙を持たせて、最後の紙を、開けっ放しにしてある車の窓に放り込んだ。

15分あったのでブランコを漕いで時間を潰していた。

「おにーちゃん達って、こんなたいへんなしごとつらくないの?」

審判達は顔を見合わせて、首を横に振った。

「…どんなときに、このしごとがたのしいっておもっの？」

三人はちよつと笑った。

「わらったかおをみるとき？」

上坂以外が頷いた。

「…このしごとに、ほこりをもっているんだね？」

また頷いた。

「もうじかんだね。くるまのまえにいかなくちゃ」

ボールを拾う体制で、車の前に立つ。

60秒カウントが始まる。

「おローちゃんは、このしごと好き？」

上坂は答えに迷ったが、

笑顔で頷いた。

赤い笛を啜える。

「ありがとうございます！」

真一の様子が眩しく感じた。

ピッ、ピッ、ピッ！

上坂はあの時の、笑顔が今でも夢に出て来る。

それは決して辛い事では無かった。

依頼者の笑顔に、審判達はこの仕事をやっていてよかったと救われる。

あのと、眞一は一命を取り留めたと聴き上坂達はかなりほっとした。

しかし、上坂は今日までそれが良かったと思っていたが…彼の運命は随分変わってしまった。

上坂は職場のロッカールームに行くと、君塚チーフから対象者のデータをもらい、驚愕した。

本藤 眞一（22）

職業：専業主夫

状況：激突死（強風に飛ばされた看板に依り）

大事な人：優香里・親父・お袋

宝物：真優

ロスタイム；45；38・15

本藤 真優 (1)

状況；圧死

ロスタイム；45；38・15

「何でだよ、これ……」

上坂はもう一度依頼者を見た。

須川が丁度袖を通してしている所だ。

「うん？どうした、上坂……」

「……何でもない……行こうか……」

鏡界から実界へ行くのには証明書が必要だった。

審判達の場合は依頼者のデータが証明書にあたるわけだが。



以前、死ぬ瞬間に審判達にあつた眞一はその事故以来、自分の行動に責任を持つようになった。

「真優、ほら頑張れ、頑張れ！」

小さい足をヨチヨチと動かす一歳を二か月すぎた幼児。

「パンパ」

「よしよし、よくやったな！真優」

「あー…」

優しく抱き締めて真優を抱え上げる。

「ご飯出来たよ、食べよっか」

「あーう」

もつすぐ六時。

そろそろ優香里も帰って来る。

電話が鳴る。

「はい本藤です」

『優香里だけど、今雨降り出しちゃって』

ベランダを見ると、確かに結構強い雨が降っていた。

『悪いんだけど迎えに来てくれない？』

「いいよ。いつもの出口の所で良いんだよね？」

『うん、有り難う！』

電話を切り、真優を見る。

キラキラした目が真一をじーっと見つめる…

結局、レインコートを羽織り、真優にレインコートを着せて抱っこ紐を縛る。

「お母さん迎えに行こうな」

「あつ」

と、そこに携帯にメールが入る。

「あ？！マジか……」

傘を二本持ち、一本はさしてマンションから出る。

「け、結構強いぞ……親父大丈夫かなあ……」

そう。実は父さんが来るのだ。先ほどメールが届き傘を忘れたから駅まで迎えに来て欲しいとの連絡を受けたのだ。

「あー、キャツキャ」

「あは、真優は楽しそうだなあ……」

この体制は正解だった。

だが、駅に着く前にある看板が音を立てて落ちて来た。

途端に、雨、風、周り一メートルの空気が止まった。

「ん…れ？こ、この光景久し振り……」

ハッと後ろを向くと、あの時みたく、審判がずぶ濡れ姿で立っていた。

「あ、あなたは……」

ピッ！ピッ！

上坂は上をさした。

傘を上げて確認する。

「か、看板が！？」

ピッ…

「俺と、真優が死ぬのか……？」

ピッ

真優はというと、ずっとうご機嫌だ。

恐らく何が起きているのか全く解らないようだ。

「そんな……親父と優香里に何て言えば良いんだよ！」

審判達は落ち込んでいた。

短い時間だ。すぐに行動を起こさないと間に合わない

青嶋『……………』

小本『本来のサッカー試合と同じ45分となりましたね。  
ん、絶句している暇なんてありませんよ』

青嶋さ

一メートルの範囲から出て、駅に急ぐ。

「あ、来た！」

「優香里！…あれ、親父見掛けなかったか？」

「ここだ」

優香里の後ろから現れたのは本藤夕貴。

真優はキヤツキヤと上機嫌だ。

「爺だぞ」

「今日、凄いご機嫌ね」

「親父、抱いてみる？」

審判達は笛を鳴らさなかった。

夕貴にとっては初孫だ。抱かせない方が酷と言つものだ。

「真優は可愛いなあ」

「真優、爺にあんよできるところ見せよっか」

卸したての長靴を履いた真優は夕貴の足下から、ゆっくりと真一の方へ歩いて来た。

「真優、凄いぞ！写真撮らないと…」

用意の良い夕貴はデジカメで孫のあんよを撮った。

「真優ちゃん凄い！」

優香里もビックリしていた。

こちらは携帯でムービーを回していた。

帰りは真優は優香里の抱っこだ。

距離を置いて真一は審判に話す。

(レッドになっても良いから、真優は生かしてくれないか…?)

上坂と須川は互いに顔を見合わせ、首を横に振った。

(なあ、頼むよ！俺が小さい時だって延長戦出来たら………真優はまだ小さいのに………これから世の中知ってく時なんだ………)

マンション前に着いたのは38分前。

(8分前に必ず戻る………だから、ロビーで待っていてくれないか………)

上坂は頷いた。

銛鋤と加藤は仰天した。

“いいんですか?!”

“もしかしたら真優ちゃん連れてこない気じゃ………”

上坂は二人のスケッチブックを押し退けた。

ジュン……

その笛はまるで“良いんだ”と言っているようだ。

“何故ですか?!”

上坂はイエローカードをちらりと出した。



“ 服務規定違反で出すだけに過ぎない”

そう言っている様だ…

須川も酷い落ち込み様だった。

(…何でまたあの子がこんな目に遭わなきゃいけないんだ！)

(須川！)

須川はハツとなり口を嚙む。

夕飯と談話だけで25分も経過していた。

「じゃ、風呂沸かしてくるわ」

「うん、お願いね。で、義父様、話の続きだけど…」

「おお、あれは真一が五歳の時だったかな……」

風呂のセットをするのに時間は掛からなかった。

玄關脇のメモ帳に

“延長戦もここまでだ”

と書き残して、コートを静かに羽織って傘を持ちそつと部屋から離れた

審判達は真優の名前が消えたのを確認した。

暫くすると、独り身の真一が現れた。

ピュピュッ！

真優がいないのを目視して上坂は笛を吹いてイエローカードを出した。

「…！イエローで良いのか？」

上坂はしっかりと頷いた。

「…ありがとう」

上坂は眞一の背を優しく叩いた。

歩きながら、眞一が審判達に呟く。

「生きてるって分った時は夢じゃないかと思った 凄く嬉しかった」

上坂、須川は同じく頷いた。

「同時にこれからどうなるんだろうなって不安があった…でも、この17年は凄く充実した…彼女が出来て、婚約して、結婚して、家族が出来た。守るものが増えた 幸せだった、俺たち家族は」

また二人は頷いた。

「幸せにしてくれたのは、審判達のおかげだと思っていました。…でも、幸せはそんなに続きませんよね…」

上坂が首を振って、初めて言葉を発した。 上層部からのお叱りを覚悟の上で

「眞一さんは幸せに包まれて死ぬんです。それに死は終わりじゃない。始まりにまた戻るだけなんです」

眞一は仰天した。

「…喋ったらいけないんじゃない？」

上坂は頷いた。でも今回は言葉が口から溢れ出てくる……抑えられなかった。

「小さい時も、今も、君は幸せだった。

そうだよね？

死ぬ事は決して不幸じゃない

誰にだって起こる必然だからね…

本当の不幸は誰かを傷つけてしまう行為を言うんだ。

嘘とか犯罪とかがそうだ。もう一度言う」

上坂は眞一を抱き締めた。

「眞一君は、幸せに包まれている。それは見えない愛情を指すんだ」  
「よ」

傘がフワリと足下に落ちる。

「……主審さ……」

眞一は、静かに泣いた。

上坂の腕の中で、五分泣き続けた。

「縁があれば、また主審さんに逢えるかな？」

上坂は頷いた。

二度目の60秒前カウントが始まる

「前にみんなの笑顔が力になるって言いましたね？その意味が、今日分った様な気がしました。…有り難うございました」

眞一は手を審判達に差し出す。

一人一人と握手して、審判達は一步下がる。

看板の角が、丁度眞一の頭の位置だ

彼らは目を逸らさずに

眞一ら対象者の最後を見守る。

ロスタイムの最後の定義は間違っている

“無心で取り組む”のはロボットでも可能だし、自分達は人間だ。

目の前にある現実だけではなく、“心を理解する”事が審判に求められる

誰かが言った。

フェアプレイは皆の幸せの上に成り立っている、と。

土砂降りの雨の中、上坂の笛の音が辺りに響いた

ピッ、ピッ、ピッ、プーッ！

f i n .

）後日談。

上坂は査問会に呼び出しを食らっていた。

懲戒免職を覚悟していた上坂の表情は穏やかであった。

「審判法（あるかあ？）第七条特例に依り、上坂を一週間の自宅  
謹慎とする」

この条文に上坂は前につんのめった。（プウイーン マリオジャン  
プ音）

（ボカッ テレツテレテレ ゲームオーバー音）

「…はい…??」

「天照大神様の御判断だ。これぐらいで済んだ事を感謝しなさい」  
険しい顔をした審査局長が苦虫を噛み潰す様に、上坂に告げた。

「天照大神様に依ると、貴殿のした行為は確かに赦される物ではない。ですが、対象者への無二の愛を持って接した事は賞賛に値するとの事だ」

上坂は俄かに信じられなかった。

「あ、ありがとうございます！失礼しました！」  
深々とお辞儀をして、部屋を後にする。

しかし、同時に天照大神様とは誰なのか、上坂は疑問を抱いた。



端書き。

コンセプトが途中で大転換した話です。

ロスタイムを二回迎える事になった眞一さん。

そのロスタイムはいずれも短いものだった。

しかし、どちらでも彼には確実に変化があった。

子供の時は家族の大切さを、大人になってからは幸せの何たるかを学んだ。

いずれも、今の日本に投げ掛けたテーマである。

どうか、今一度家族と幸せについて本気だして考えて欲しい。

斑神京雅でした。

後日談執筆は中峰涼華の提供でお送りしました（CMか）

天照大神様は鏡界で最高位を持つ全能な方です。彼女もまた、後に窮地に立たされます……

[ 2020年9月20日 ]

FILE・13 FRIENDS(前書き)

動き出す二名。審判制度もちょっとご紹介致します。

友達 人によつてこの言葉の意味合いは大きく変わる。

あなたにとつての友達は誰ですか？

親友と言える人はいますか？

友達つてどんな人の事を言いますか？

西島は秀英新聞社内で轟が殺されたのを何日か後に聞いた。

驚くのはそこではない……実の息子に殺されたという言い様のない真実が、新聞の記事に書かれていた。

もし、自分が去年のうちに話していたらこんな結果にはならなかったのではないかと考えてしまう。

もし、去年話していたらこんな擦れ違いを生む事はなかったかも  
しれない……

あの時の轟の涙が頭から離れない 何をしてても、思い出されるのは  
写真を見て号泣する轟の顔だ……

「くそ……何でもっと早く言ってやれなかったんだ……」

鏡界でも朝は来る。

銚鋤は頭を搔いてボーツとした顔で目を開ける。

「くあ……」

大きな欠伸をしてトイレに向かう。

この世界に来てもう六か月も経つ

四十九日も終わり、実界と鏡界の行き来は許可証がないといけない様になっていた。

唯一の家族写真が朝日を浴びて反射する

写真から声が聞こえる。

“おはよう、肇”

写真は映像を移す 親父だ。

「っはよ。相変わらず忙しそうだな」

こちらの声は向こうには届かない。

それでも稀に届くことがある。

“忙しいことは良い事や”

！

「…まじか…?」

写真から親父の顔が消えた。

肇は一気に目が覚めた。

“おはよ、肇”

今度はお袋が水とお茶、ご飯を持って写真の前に立つ。

…近くて遠い家族。

いずれにしても距離が近付くことはない。

そして彼自身もいつかは生まれ変わる事を知っている。

歯痒くなって机をバンと叩く

今一度あなたに質問する。

あなたの友達は、あなたが困った時、苦しい時に助けてくれますか？

身支度をして、ドア横のボタンを押す。

4080

ドアを開ければそこが審判控え室だ。

「流石に早いからなあ」

窓をガラガラと開ける。

フウワリと暖かな風が頬を撫でていった。

「今日も平和であります様に」

十字をきって、お祈りするのは銚子の朝の一連行動だ。



これから起こる騒動など、この時の銚鋤には知る術もなかった。

西島は、秀英新聞帝都本社の特務で轟の上司である、井上にアポイ  
ントを取っていた。

「…最初は取って頂けるとは思っていませんでした。何故…」

「君は聞いたことはないか？死ぬ直前にわずかな空白を持った者たちを」

西島は絶句した。見に覚えは何度もある。最初は入りたての時に起こした幼児轢き（後に息を吹き返したものの、つい最近看板により激突死）、取材に行った駅構内で二人もの女性が刺殺されたり、転落死したり…

最近では、轟もその一人ではないかと言う疑惑を隠せなかった

彼らに共通していたのは死の直前に何らかの心残りを精算しようとしている姿が目撃されていた事だった。

「…轟が、息子に当てた最後の手紙だ」

これは、どの新聞にも載っていないかった

「…！」

それは、確かに息子への最初で最後の轟の教えだった。

「これは、一般に知られては困ると思つてね…西島君に見せたのは、この手紙を轟に渡したと知つたからだ」

真子の生前書き残した文章だ。聞けばその文章の上に轟の手紙があつたと言う事だった。

「life in additional time…ロス…タイム…ライフか。死の直前に残された空白の時間…フィクションとばかり思っていたが、まさかそれが本当にある事だと？」

「…信じられないが、あれを現実にあることだとするならば全てが繋がってくる」

西島は頭がショートしそっだった。

『調査に依ると、轟が死ぬ直前にお世話になった人のところに挨拶に行ったようだ。西島さんもその一人じゃない？』

どこからか声が聞こえる

「久遠社長？」

井上が立ち上がる。

電話から声が聞こえた　でも、何時から？

「失礼するよ」

ドアからやってきた久遠は平然とした顔で会話に入ってきた。

「だが、ロスタイムのない人もいる。その境界はどのように決定し

ているだろうか？」

西島もあらゆる事故や事件を調査していた。

彼が調べた所でも、ロスタイムのない人がほとんどを占めていた。

それこそ、自分が直接にしる関節にしる、指で数えられるぐらいしか事例がない。

何故だろうか？

水嶋一輝は火に包まれた建設中のアパートの中でロスタイムを迎えていた。

「んだよ、あんたら 天使か、それとも悪魔か？」

水嶋 一輝 (35)

職業：大工

状況：焼死

誇り：仕事

大切：友情

ロスタイム：3：15：25・05

上坂が、ボールボーイ（黒子）に指示をして外へ連れ出した。

青嶋『本日のボールボーイは消防隊員です』

ピエール『適材適所ですね』

ボールボーイはアパートの横に付く。

水嶋は大工仲間の元へ急ぐ。

「監督！……悠一はどこっすか？」

現場監督は口を聞いてくれなかった。かわりに首を横に振った。

「……やつは……俺の目の前で燃え上がった……」

声が震えているのがよく分かった

「んでだよ……何で俺だけあってあいつにねえんだよ!!」

一輝が大声を出して、また火事場に行こうとした。

上坂が一輝を止めた。首を横に振る

「……こんなの……冗談じゃねえっ!!悠——っ!!」

森鋤と加藤が後ろから一輝を抑える。

上から燃えた木片が降ってくる!

上坂ら審判は気付くのが遅かった

自分らに当たっても平気は平気だが、生まれ変わりに支障を来すことがあり極力傷を付けるのを恐れていた。

青嶋『このままでは審判も犠牲に!』

ピエール『避けてくださいっ!』

だが、銚鋤と加藤が一輝の腕を離してしまった瞬間、一輝は真っ直ぐ火事場に向かってしまった。

ピッ、ピッピッ!!

笛の指示に従い、審判が後を追っていった。

「悠一!!!」

火の海を書き分けて、悠一を捜す一輝。

「どこだよっ!!!」

上坂はすぐに一輝を見つけた。

ピ、ピーッ!!

上坂の手にはある紙が握られていた。それは直前のロスタイムを生きたある人からのメッセージだった。

「何なんだよ!?!」

ピ、ピ、ピッ!

上坂はイエローを出す代わりに一枚の紙を渡した。

“前置き無しに先ず言わせてもらおう。審判は僕に次のロスタイム者が君だと違反を承知で教えてくれた。だから、先ずロスタイム中であることを自覚してくれ。いいな?”

それは悠一の字だった。

「どついつ事だよ?」

一輝は少し冷静になったようだ。



上坂は通常なら対象者に見せないリストを、一輝に見せた。

廣澤 悠一 (35)

職業：大工

状況：窒息死

誇り：一輝

大切：信頼

ロスタイム：1：45：37・13

上坂主審、加藤線審、銛鋤線審は穏やかな顔で一輝を見ていた。

「俺の前に、悠一がロスタイムを過ごした だって？」

だが、西紀予備審の顔は般若の如き形相で他の審判を睨み付けていた。

一輝はむしろその顔に仰天した。

「こ、こんな事教えちゃっていいのか、あんたら？」

静かに首を振る審判達。

「だが、もう審判を縛り付ける時代は終わったただけだ。我々は我々の仕事をする。だが、その仕事は時として世代ギャップを生み出してしまふ。この輩のようなね」

西紀はさらに仰天した。本来なら審判達は喋ってはならないのが規則だ。

(上坂：貴様は一体何を考えてんだ！？)

火事場の外に促すと、今度はまた別の紙を渡した。

“僕には時間がなかった。だからお前に託す。いいな、先ずは俺の嫁にこの指輪を渡してくれるか？お前には時間がある…頼むぜ！”

テープで指輪が貼つてある。若干焦げてはいるが、無事にその原形を留めていた。

「先ずこれかい！…まあ、悠一の頼みならしゃーねーか」

車のキイをボタンで開けて審判達も乗せる。

が、副審の二人がドアを閉めて、西紀が入れないように固める。

一輝が上坂主審の顔を見てにやりと笑う。

ギユワンッ!!

青嶋『おおっと!?!予備審西紀置いてけぼりだあ!!!』

ピエール『世代ギャップの差がここまでできております。いやあ、審判の反乱ってなんか素敵ですね』

青嶋『何を言っているんですか、ピエールさん…!』

通常なら二十分はかかる(歩くと相当かかる)道を十五分で飛ばし、悠一のアパートに到着した。

2:54:38.07

銚鋤はいつの間にかストップウォッチを持っていた。

「ここが悠一の家族が住んでいるところ」

部屋の前、ちょっと緊張する四人。

ピンポンとドアホンを鳴らす。

“はい？”

「一輝です」

ドアはすぐに開いた。

「久しぶり、一君」

「苗穂子、全然変わってないな」

「どうしたの？今仕事でしょ？」

苗穂子は顔を覗きこむ。

「あ、…悠一に頼まれてな」

「一おじちゃん!!」

「お、夕佳ちゃんおっきくなっただなあ！」

グンと持ち上げると、夕佳は笑顔になる。

「わーい！高ーい！」

見れば見るほど、俺に似てる。悠一と苗穂子の子供、夕佳が。この子には勿論、悠一にも離していない事実だった。

「…言うつもりは無いから」

苗穂子は夕佳を抱き締めた一輝を見て冷静にキレておられた。

「それで良いよ。よし、夕佳ちゃん降りようね」

「—おじちゃんとお父さん、本当にともだちなんだね」

後ろから紙を手渡される

気付いて右手でそつと受け取った。

「まあ、ね…」

“二人に気付かれないように渡してほしい…難しい注文なのは百も承知だ。新聞ポストが一番気付かれないと思う”

ポストに何気なく指輪を持った右手を乗せて、真面目な顔になる。

「ごめん。恋じゃなくて友情をとった俺が馬鹿だったよ…今更だけどね…」

苗穂子は夕佳に部屋に入ってなさい、と言って一輝を見た。

「ホント今更よね。私は後にも先にも一君しか見えてなかったのに  
な」

「俺、失うのが怖くてさ……大事な者同士、幸せになってほしいと思っただ」

「自分勝手にも程がある」

苗穂子はやっぱり少し怒っていた。

でも、構わない

「いいか、二人とも幸せになってほしい。死ぬなんて思っただメだ。…愛してるから」

「一君？」

「愛してるよ…苗穂子」

審判達はちょっと（…いや、かなり）びっくりしていた。

青嶋『おっと、これは』

ピエール『意外な展開…！』

苗穂子は泣きそうだった。

「ちょっと」

「愛してる」

「ねえ、」

「愛してる」

「…一生分言いつもり？」

「…愛してるよ、苗穂子」

左手を、苗穂子の顔に触ると苗穂子は一輝を見つめた。

「一輝…私も、好きだよ」

暫く互いの顔に見入っていると、一輝は苗穂子にキスした。

「…じゃ、俺行くところあっか」

苗穂子は一輝を抱き締め、深いキスをする。一輝は目を閉じて苗穂子とのキスを味わった。足下には悠一の婚約指輪が煌めいていた。

内側に彫られている名前に注目してほしい

t o k a z f r o m n a o

青嶋『これ、悠一さんはもしかしたら気付いていたのかも知れませ  
んね』

ピエール『資料が届きました。婚姻届が出されています…水嶋一輝  
さんと海野苗穂子さんのものが』

青嶋『きつと悠一さんは全てを一輝さんに打ち明けるつもりなので  
しょう 彼が伝えきれなかった事の全てを』

ピエール『どうでもいい事なのですが、キスの時間長いですね』

青嶋『もう二度と交わす事はありませんから、良いんです』

五分後、漸く離れた二人。

審判達の顔は真っ赤でまるで茹蛸のようだ

「…一輝、もう行かなきゃダメなの？」

涙を押し殺したその声は、一輝の気持ち揺るがせた。

しかし、良いタイミングで上坂主審が次の紙を渡してくれた。

“次について欲しい所は、俺らの思い出の場所だ そこに手紙を預  
けてある”



「ゴメン、約束があつて」

「…そう…居なくなったりしないよね」

「……」

一輝は何も言わずにアパートを出た。

来る前とは違う後悔が、一輝を責めていた。どうしてもあの時自分の気持ちに正直になれなかったのだらう

苗穂子と向き合う事を避けてしまったのだらう

四人が車の前に行くと、西紀が肩息ついて待ち兼ねていた。

青嶋「西紀予備審、走って現着したみたいですよ…」

ピエール「鬼みたいな顔になってます…」

西紀が何か言おうとしたが、《強制交代》の文字が西紀の頭に浮かんでいた。

「…!」

青嶋「滅多にある事ではありませんが、審判として不適合と判断さ

れた場合は強制交代が発生します』

ピエール『若しくは臨時の審判と正規の審判が入れ替わる時にも使われます』

青嶋『今回は後者ですね』

ピエール『因みに、須川予備審は寝坊の為遅刻をしたわけですが…』

青嶋『皆さんは遅刻をしない様にしましょうね』

西紀が須川になり、三人はかなりホツとした。

須川もまた肩息をついていた。

「おはぶじお?!」

上坂主審が拳をぶつけた。

「俺あの人苦手なんだよ!大体寝坊で遅刻すんなあ!!」

「主審っ!」

「お、落ち着いて下さいっ!」

銛鋤と加藤が抑える。

「それに職務中ですからっ!」

銛鋤の言葉にはたっと気付くと、ちょっと気恥ずかしそうに俯いた。

「（え、えー……）」

一輝は解りやすく引いていた。

「ホントごめん！！……ってか、対象者引いてるし」

「あ……」

一輝は思わず忍び笑いした。

「まるで俺と悠一みたいだな。だいたい悠一がいつも怒ってるの」

審判達はちよつと笑い、一輝の車に乗り込んだ。

次の場所は悠一と一輝が好んでいた喫茶店“Carols”。そこは常に70年代の日本曲や洋楽が流れているレトロな雰囲気漂う場所。

「ここで、よくいろんな夢を話してたなあ……何の因果か二人とも大工になっちまったけど、昔は二人とも歌手になりたいって思ってたもんだ」

カランコロンと昔と変わらぬ玄関の扉を開ける。

「いらっしや… おお、一輝君！ 久し振りだね！ 元気してたか？」

マスターの荒波が前と変わらぬ笑顔で出迎えてくれた。

「どうもお久し振りです！ 悠一から手紙を預かってるって聞いたんですけど」

荒波がああ、という顔をして奥に引っ込んだ。 どうやら預かった手紙はずいぶん前からこの店にあったようで、随分梃子摺っている音が響いている。

「あ、これだこれだ！！ ごめん、待たせたね！ これが悠一から君に宛てた手紙だよ」

一輝はすぐにその手紙を開けた。

《一輝へ》

“いつも怒ってばかりで悪かったな。

でも元はといえはお前が菜穂子を蔑ろにしたのがいけないんだからな。

それにお前は知らないだろうけど、僕と菜穂子は結婚していない。

それどころか、お前と菜穂子の間には子供もできたんだろう？

昔っからそうだよなあ、なんだかねで友情をとってばっかのお前

に振り回されて、結局お前の気付かない内に周りは不幸になってく。

でも、そんなお陰かな。僕らの友情は永遠の物になった。

ただ、それが一輝にとっての幸せになるとは思えない。一輝は今、幸せなのか？”

手紙には続きがあった。

“きつと分からない、とお前は答えるかな。

幸せって、人によって形が違う。

千差万別。何をして何を見て幸せと感じるかなんて、結局はそういうもんだと思う。

だから何が幸せなのかは誰にも分からないんじゃないかな。

お前にとっての幸せが僕にとっての幸せとは違うように、菜穂子にも違う幸せがあったんじゃないか？

お前と一緒にいることが、菜穂子の幸せだと、どうしてそう思わなかった？

きつとお前は幸せがどういう物なのか分かってなかったんじゃないかって思った。

お前の両親や身内がないからって、たった二人の家族を幸せにする事がお前の幸せなんじゃないのか？

きつと、そうだとおもう。僕はお前が守れなかったものを守ってみせる。

でもいつかはちゃんと話しあってくれよ。それが僕の願いだから

廣澤 悠一”

手紙から目を離して虚空を見上げた。

（悠一：大丈夫だ。いま少しだけ幸せ感じてるよ）

「ふう。マスター、景気付けに“あの曲”かけてくんない？」

「オツケー。一輝君お気に入りのカフェラテ、置いといたよ」  
テーブルに置かれた、昔と変わらぬ味のカフェラテ 思い出の曲と  
共に当時を思い出していた一輝。

曲はチューリップの“心の旅”。

何も変わらないこの場所、だけれど、一輝の心は随分変わってしまった。  
った。

時がたつても変わらない物は、いつだって一輝を迎えてくれた。だから、一輝はその思いに答えたいと想った。今更悔やんでも何も出来る事はない。

上坂がまた紙を差し出した。

“ 手紙、読んでくれたみたいだな。まあ、そう言う事だ。

まさか二人とも死ぬとは思わなかったけどさ、あの二人は幸せにや  
つてくれるぞ。

僕らの分まで 時間は僕の計算だと後一時間半って所かな？”

振り返って電光掲示板を確認すると、

1 : 3 4 . 2 8 . 0 7

「すげえな、悠一… エスパーか、あいつは…」

“川原があつたよな、その喫茶店のすぐ傍に。そこで上坂主審が最後の紙を渡してくれる事になってる”

一輝は金を払って、曲がサビに行く前に喫茶店をそっと抜け出す。

まだ四時にもならなかった。

「こんな風にのんびり眺めたことなかったかも、この景色」

川の面にキラキラ輝く太陽。



緑の葉っぱがさわやかな風を受けてさわさわ響き、小さな音楽を奏でている。

さわやかな風は一輝の髪の毛をフワリと凪いでいった。

ただ、喫茶店を出てから何か妙な視線を感じていた。

チラリと後ろを見ると、怪しげな男三人が何故かこちらに注目していた。

思わず小声で突っ込んでみる。

「な、何だ？めっちゃ怪しいのがあるぞ…？」

審判らも振り返って確認すると、審判以上に怪しい彼らとは、久遠・井上・西島であった。

「気にしないで大丈夫です。私達の調査をしようとしている奴らですから」

「審判さん達を？何で？」

「ロスタイムの存在が知られ始めているんです。あるドラマのお陰でね」

一輝はそのドラマを一節だけ見たことがある。部長の清々しさがとても印象に残る回だった。

「俺、審判さんみたく、寡黙に作業する姿、好きなんですよ。だからかもしれないね、今こうして大工の仕事をしているのは」

「そう言って頂けると、嬉しいですね。この仕事をしていて誇りと思えるのは、対象者の笑顔を見ることなんですよ」

「そうなんですか」

「これが、最後の紙になります」

上坂は一輝に紙を渡した。

“ 最後までいい幸せになってほしくて、こんな回りくどい方法になっちゃったけど、どうだった？ ”

ま、僕の手紙は余計だったかもしれないけどさ。

でもお前にはいい餓になると思ってな。

死ぬ人間に餓も何もないけどさ、向こう 鏡界で会えたらいいな。

じゃ、僕は先に行ってるよ。

悠一”

「 幸せって意外なところで、見つかるんだよな……いつもは見えているのに、気付かない幸せってさ。俺、今すごい幸せだよ」

車に乗って、審判達を乗せる。

「 ゆっくり元の場所に戻ろうか。それで時間は潰れると思うし」

審判達も静かに頷いた。表情も穏やかだ

車が道の向こうに走り去ると、三人も陰に待機させていた車に乗って後を追った。

「彼の行動も、普通の人とは違いますね」

運転している井上が二人に言う。

「ロスタイム中であることは確かなんだろうな？」

後部座席に座る久遠が鋭い目で井上に問う。

「と、思います。彼も満ち足りた表情をしていますから」

「線引きは難しいですね。どうしてロスタイムが発生するのでしょうか？」

井上が西島に聞く。

「分からない。ただ、心残りのあるものがロスタイムを経験しているのは間違いないだろう。ただ、そうなると時間はどのように決められているのだろうか？」

西島は言いながらメモを取る。

「おそらく、その心残りが十分に消化できる時間か、あるいは……」

久遠はそこで言葉を濁した。

「無駄に過ごした時間を有意義に使うか、って所ですかね？」

井上が後を引き継いだ。

夕焼けに照らされたようにまだ赤く燃え続ける火事場。消防車は着いてはいたが、スローの配下に置かれていた。

（これは一輝が焼死である為、その前に鎮火されたのでは辻褃が合わないためである）

時間は五分前を切っていた。

「友達って、凄いやな。赤の他人同士なのに、心を寄せられる  
そして俺が辛い時にはいつも傍にいてくれた。」

今日だってそう。…ちゃんと俺の事考えてくれてたんだって、嬉しかった。

こうして、今日幸せな時間を送れたのは、悠一のお陰だな。

…今までで一番あったかい時間だった。火事場で言うのはなんだから不思議だけど」

審判達は優しく微笑んでくれた。

時間が迫ってくる　審判達は仕事の顔に戻っていた。

60秒前

「菜穂子も夕佳も、幸せに生きていつてほしいな。そんな心配は不要か」

焼死の原因である柱が、ゆっくりと一輝の体に近づいてくる。

チツ、チツ、チツ

炎の音が強くなるのを感じた。

ゴオオオオオオオオ

「うわあああああ！！」

ピッ、ピッ、プーッ！

笛の音と、悲鳴がシンクロした

沈みゆく太陽はそれを静かに見守っていた……

f i n .

端書。

締切日にあげたった……！！！！

よう頑張った、俺！！唯でさえ難しい友達編よ？何でこんな引き受けちゃったんだか……

でもなんだろうな、この達成感は逆に感動……

久しぶりにパソコン作業なんだけど、こっちの方が捗ったなあ。やっぱり、邪魔がないからかな？

あ、涼華先輩は別ですよっ！？だって涼華先輩の言葉がなければ完成しえなかった作品ですから！！

そんな射竦める様な目で睨まないで下さいっ……！！怖いですから  
！！！！

2008・4・27

-

(NOS 2009・8・21)



FILE・14 EXPOSURE(前書き)

序章。ここから物語は急展開します…！満井さんが巻き込まれる事件の前の出来事。

「分かった！分かりましたよ、久遠シャチヨウツ！！」

井上が前置き無しノック無し、息せき切って社長室に飛び込んだ。

「いったい何事かと目を白黒させていると、井上がガバツと顔を上げた。

「ロスタイムがどうやって決まっているのかが分かりました！！」

前回の場合はっ…心残りを達成できる時間でしたが、原則では自分が無駄に過ごしてきた時間が償却されるみたいですよ、ロスタイムで！！」

久遠は井上が持ってきた資料に目を通した。

「なるほど、なるほど……」

「関係者によると、接触した二時間後に死亡が確認されたニュースが流れたそうです」

井上の息が幾分か落ち着いてきた。

「ニュースソースは奥さんだな」

「記事にはしない約束で話を聞いてきました」

「当然だ。世間はそんなこと信じられないと言っただろっつからな」

須川がゆっくりと起き上がる。

「あー…こないだはまずったよなあ…アデッ、殴られた所、まだ痛いし。上坂の野郎おもいつきし殴りやがって…」

左頬を擦りながら起きる須川。

「あ、今日燃えるごみの日じゃんけ。早くしとかないとまた増えっ

「ちまっ！」

玄関脇に溜まりに溜まりまくった焼却ごみ 悪臭がするものまで入っている為、上坂は若干躊躇ったが、軍手とマスクを台所から引っ張り出して、両手にごみを持ち上げ、抱えてドアを開けた。

「よっ…ととっ」と…

前が見えないほど抱えあげた為、バランスがうまく取れない 辛うじてエレベーターが見えたが、今丁度閉まる所だった。

「ちょ…！待てええい！そのエレベーター…！」

「うわぁ！？」

エレベーター内にいる人が仰天して、すぐに開けてくれた。

「お久しぶりです…えっと、確か予備審の方ですよね？」

須川は聞き覚えのある声に横を向く。前回の対象者である水島一輝

だった。

「あ、君は！」

「このマンションなんですね！俺昨日からここに住み始めてるんでムガッ！？何ですか、この臭いっ！？？」

「…何も聴かんでくれ。審判なんて仕事をするとな、家の事が疎かになるって事さ…」

臭いは目にも沁みため、上坂は目を瞬かせた。

「ひびいっふね…（酷いですね）」

鼻をつまんだ水嶋は鼻声でそう言った。

あなたに、兄弟はいますか？

いない人は休みを一体どのように過ごしていますか？

兄弟を欲しいと思ったことは、ありませんか？

「それじゃ、須川さんも一人っ子なんですか？」

焼却炉の鍵を開けて、次々にゴミを詰め込んでいる須川に、水嶋が聴く。

「そつ、俺の場合は即死だったけどね、こうして鏡界で仕事してる訳。最近多いのはロスタイムから鏡界へくるパターンだけど、昔は俺の場合が一般的だった訳」

「へえー。時代と共にいろいろ変化しているんですね、どの世界でも…なんか凄いなあ」

「凄いかどうかは…水嶋君はどんな仕事考えてるの？」

「俺は一応線審に希望を出しているんですけど、審判って憧れだったし……」

「確か、君の一人前に処理したって言う廣澤……だったっけ？彼は俺と同じ予備審になったよ。水嶋君の友達だよな」

水嶋はビツクリした。

「ええ！？悠一のやるお、いつの間に……」

「予備審は人が少ないから、助かるんだよね、そういう希望があると……逆に線審は希望が多くてね、最近じゃぜんぜん通らないんだ」

「そ、そんなあ……」

須川は慌てて繕う。

「でもね、非常勤務で働けると思うから！今回の僕みたいにさ、交代する場合とか、最後までやるとかさ。だから諦めないで！」

「非常勤務？」

「あ、そっか…初めてだもんな。

まず審判は非常勤勤務から始まるんだ。

うまいこと功績挙げれば、詰所待機が出来るようになって、行き来も楽に出来るんだ。

ただ、こないだの俺みたいな遅刻とか、風邪引いた場合に穴が出るだろ？

その時は非常勤勤務の出番って訳さ。

穴が出ると分かった時点で一斉に連絡網が来るから一番先に来た人がその権利を獲得できるって訳」

「へえ、うまいこと機能してるんですね」（須川さんの語尾の“…って訳”がウザい……）

若干苦笑いを浮かべながら、話を聞く水嶋。

では、今一度皆に問う。



一人っ子の人を、あなたはどいう眼で見えていますか？

春だと言つのに雑煮を作る彼女。

しかも目を離してしまったためお餅はドロッドロ。

「うあちゃー…ゲ、これじゃ間に合わないってー!!」

やってはいけないとは思っていた筈の……ドロッドロのお餅のいき食い。

当然の如くつまる…

「…んぐっ!!!?!?」

(あつかーんっ!!!!こないだのドラマ最終回の二の舞かいな、私

つてばなんてバツカな事しちゃったんだろ…

あ…ダメ、息できないしっ……このまま……マジで死ぬ……？)

空っぽのおわんが床に墮ちる 彼女は首元を押さえてもがく。

動きが止まるギリギリを狙ったように、笛の音が響いた。

ピーーーーッ！

時間はNHKのテレビ端に映された午前7時半。

息苦しさが止まった。

( あ、れ？何か…不思議…？)

息を整えながら起き上がると、目の前に旗。

黄色と赤のチェック旗。

さらに目を上へと移す。

(……も、もしや、線審の方々?)

若干フリーズした彼女の前に電光掲示板が映し出される。

3 / 2 3 : 5 9 ; 3 7 . 0 7

「分かりづらい!」

ロスタイムが始まった彼女の第一声がこれだった。

満井 富士子 (35)

職業：ルポライター

状況：窒息死 (餅詰まり)

誇り：文書力

目標：皆が感動する文章を作ること。

癖・どんなボケにもツッコんでしまっ

ロスタイム：4日。

「で、何故に四日なんたる私？」

満井はやっと冷静になって自分のロスタイムに関してはてなマークになった。

だが、主審である上坂の様子が何かおかしい。

汗を掻いていて、今日は半袖で丁度いいお天気なのにガタガタ震えている…

ガタタンッ！

四人は仰天した。

「ちよ、主審さんっ!???」

「上坂主審っ!??」

「やっぱり無理に来ちゃダメだったんすよー!!」

「だが、今主審は全員風邪で伏せつてて代えがいなかったんだ…くそっ、何でこんな時に」

「……そんなに、心配……しなくても…平気っ、ゴホ、ゴホッ!」

上坂の状態はどう見ても平気と言える状況ではなかった。

満井は上坂の額に手を当てる。　かなり熱い。

「これはダメでしょーっ!!何で無茶なことするんやっ!??」

満井は上坂をお姫様抱っこしてベッドに連れ込んだ。(ここだけ聞くとちよっと卑猥?)

( )(姐ゴー!!?)( )( )

審判達は一寸だけときめいた。(ヲイ)

冷蔵庫に入れておいたアイスノンと、来客用の布団を出して今度は副審を呼んだ。

「副審さんたち！主審さんにこのパジャマ着せたげてっ！」

「りよ、了解っ！！」

シュビツと旗を掲げて、旗を机に置き、寝室に急ぐ銚隙と加藤。

満井はその間にキッチンに行き、薬箱の中から葛根湯を取り出し、蒸留水をコップに入れる。

横目で電光掲示板を見るが、止まっていなかった。ま、人より長いから支障はないが、主審が病気のときは普通止まるだろ…と満井は考えてしまう。

青嶋『主審の間で風邪が流行しています！ちなみに解説の間でも風が流行しているようで、今私一人で実況解説しなければなりませんから若干大変です』

…道理で普段より言葉が長い訳だ。

この季節の変わり目が 特に冬から春にかけての温度変化は激しい。  
体がついていかないのは当然と言えるだろう。

どの世界でも普通の風邪が流行るのは無理らしかぬ事。

だが、須川は気付いていた。

先程まで3と表記されていたところが6となっていることに。

(これはありなんですか！？天照大神様ー！！？)

【あります。】

どこかから微かな声が聞こえた。それも、須川にしか聞こえなかったようだ。

思わず「マジですか!？」とつつこんでしまう須川だった。

「何がマジなの?予備審さん」

と満井がさらに突っ込む。

「あ、や、なんでもないです」

「そう。主審さん、葛根湯だけど飲んでね」

「…ありがとうございます……すみません、ゴホ、ゴホッ!」

「しゃべっちゃダメですよ、上坂主審っ!」

銚子副審の心配する声も聞こえてくる。

(て言うか、君達ナチュラルに会話してるけど本当はダメなの分かってるよね!?) 多分前回あたりから忘れてる)

…申し訳ない。書いている内に普通に審判達を話させているのは作者のせいです(でも止めない コラ)



「主審さんて人数少ないんですか？」

満井が素朴な疑問を投げかける。

「そうなんですよ。ただ、主審になる人は昨今少なくなっているから今は六人しかいないんです…それが全員風邪で…上坂主審は無理にでもって来ちゃうから熱が上がっちゃったんです」

加藤線審が焦りながら、しかし先程より冷静を取り戻して説明した。

「…そう…あーっ！」

いきなりの満井の大声に、ビックリする審判達。

「遅刻しちゃっー！予備審さんだけ来れば良いから、副審さん達は主審さんを看病しなさいよ、いいわね!？」

「は、はひっ…!」

「行くわよっ、予備審さん!」

「はいつ!？」

半ば強引に予備審を引っ張って秀英新聞社に向かう。そう。以前轟が殺された会社だったのだ。

マンションから駆け足五分でつく距離。

八時になる直前にタイムカードを突っ込んだ。間に合った!

だがそこから彼女の足は兎の様な跳躍であつたという間に三階に到着した。

青嶋『すごい兎飛びに予備審追いつけない!』

須川は小ずるい方法ではあるが、瞬間移動で満井に追いついた。

青嶋『ちよつと反則かも知れませんが今回の場合仕方ないですね。後誰か一人ゲスト解説呼んでください。私まで喉潰しそうです』

天照大神は仕方ないと言うように、フウと息を吐いた。

【皆様も、風邪には十分気をつけましょうね】

スチャッ

08:00

6/23:30:00.00

ピンポンパーン

「おおーっ!!」

拍手が辺りを包む。

「また時間ぴったり!」

「世界新記録じゃね?」

「や、どーも、どーも!」

拍手の波を超えた中間が満井の席。

報道記者の朝は早い。が、満井の場合少し遅い部類だ。

「なんか良いネタ（情報）なかったですか？」

「みつちゃん、朝のニュース見てないでしょ……」

あー。審判達来たから見る暇なかったんだよね、しかも一人風邪引いちちゃって…、とは流石の満井でも言えない。

やっとこさ言葉を飲み込み、別の言い方にした。

「見んの忘れただけ。え、どんなニュース…あ！？何で」

満井は電光掲示板の先程迄3だったのが6になっているのに今更ながら気付いた。

（なんでいつの間に増えてんのよ？）

小声で須川に問う。

(緊急事態の場合、通常なら止まるのですが…今回は延長と言う特例が敷かれたんです)

(…でも、あなた達本当は喋るのダメなんじゃないですか?)

(…あ……)

須川は今ごろ気付いたように口を覆う。

(まあ、大丈夫でしょ)

暫くは、言われた仕事をこなして行く。

西島は秀英新聞帝都本社前にいた。

久遠社長に呼び出されたのだ

「こんな朝っぱらに招集かけられるとは…ふぁーあ」

大欠伸をして、中に入る。暫くまともに眠れていないらしかった。

「眠いつ…」

眠気覚ましにと記者詰め所に向かう。

「何かでかいニュースとか無いかな…こうガバツと頭を揺るがすよ  
うな………」

それは幾らなんでも期待出来そうには無いが、インパクトがあれば  
良いなと願いながら三階に上がる。

しかし、肩透かしを食らってしまった。

「…ま、現実なんてこんなもんさ……はは……ん……？」

その中に明らかに場違いな黒いユニフォームを発見した。

「何だ、アレ……審判……??？」

まだ頭が冴えていないのかと想い、目を擦る。すると、その姿は消えてしまった。

「変なの……ま、いつか……」

西島は詰所を一通り周ったあと、（結局目の覚めるようなネタはなかった）社長室に向かった。

「失礼します」

「おはよ、西島さん」

井上が西島に挨拶する。

「っはよ……」

「……眠そうですね……」

「四日も寝てないっつーの」

「ええ!?!」

「作家さんの締切日ラッシュだったもんでな……」

「では、簡潔に言おう。ロスタイムの事だ」

その久遠社長の声で西島は目が覚めた。

「えっ……」

井上が詳しく説明をしてくれる。

「例えば、私たちみたいな会社員であれば通勤時のポーツとした時間が積み積もり積もって、最後に累積された時間がロスタイムになる訳です」

「…なるほど、“命の貯金”みたいなもんだな」

井上が頷いて後を続ける。



「だから、専業主婦と比較してみると、私たちがロスタイムが長いんです」

「そうだな。暇さえあれば家事、洗濯、掃除をするからな」

「日本人には休憩や暇には無縁な人が大多数だ。だから日本に存在するロスタイム者が少ないのかもしれない」

久遠の尤もな意見に二人は頷いた。

「外国の方でもあらゆる学者に聞いてみた所、特にロスタイム者が多い国はオーストラリアと出た。気候は一定、のんびりした風土がもたらしたものでしょう」

久遠が調べたレポートを二人に見せた。

最後にLTLと書かれている。

「ロス：タイム：ラボラトリーだ。スイスのジュネーブに本部がある。どうやら世界規模でこの謎を解明しようとして動いてるみたいだ」

「…解っているのは、審判が残り時間を示すぐらいなのか……どんな審判なんだろうね？」

井上がそう言うと、西島が固まった

審判… 時間……………

もしかして、さつき寝ぼけ眼で見た黒いユニフォームの人は……  
レポートをじっと読んでいく。

“ 審判たちは通常四人で移動する 赤い笛を持つ主審、旗を持つ線審二人、電光掲示板を持つ第四審判。その風貌はサッカーの審判に酷似している ”

「 さつき三階に行った時、第四審判らしき人を見ましたよ！……！ 」

西島が急に大声を出したので、二人は仰天した。

「…それは確實か？」

久遠はすぐ冷静になり、三階の見取り図を引っ張り出した。

「多分、ですけど……」

「…確か、この机にいた人の後ろにいました。ただ、主審と副審二人は見当たりませんでした」

三階記者詰所のほぼ中央に当たる席を示す西島。

「え……」

今度は久遠が驚いた。

「富士子が、……ロスタイム者……？」

井上が更に驚く。

「知り合いなんですか？」

「……昔の彼女だ……」

二人は絶句した。

「二人で話を聴いて来てくれないか？さりげなくな」

井上と西島は三階に向かっていった。

須川がうたた寝していると、満井はそつと笑い、コートを掛けてあげた。

「……トイレ……」

小さい声で呟くと、部屋を出てトイレに向かった。

「すみません、満井さんは…?」

隣りの席に当たる菱元に聞いてみた。

「あー。今化粧室よ…すぐ戻って来ると思いますが…」

井上と西島はここで待とうと決めた。

(ん…いけなっ！寝ちまった…)

須川は立ち上がるつもりだったが、すぐにそれを辞めた。頭上に井上と西島がいるのだ。

須川の姿は通常の人には見えない。しかし、次の瞬間彼らの会話を聞いて凍り付いてしまった…

(確かに見たのか?)

(でも確固たる証拠はないからなあ…気のせいだったかもしれない)

(それでも話は聞けるからね。さり気なく聴けば良いんだろ、ロス

タイムの事)

(その話はおれに任せてくれよ)

(頼むよ。さり気なくって僕苦手です)

須川は二人の丁度間にいたのではっきりと会話が聞き取れた。

(ど、や!でっ、は)

通訳: どうしよう、これヤバいじゃん! って、満井さんいないっ  
!?! 早く伝えなきゃ!

解りやすく動揺したため、何を言っているのか解らなかった。

ただこれではいずれにしても動きが取れない。……そうだ!

床に落ちた鉛筆と紙でこっさりメモを書く。

「ふー…あら？」

デスク前に二人（厳密に言えば三人）人がいた。

予備審の須川は冷や汗をかいて紙をグツと握った

すると満井の手元には紙が握られていた。

（えっ…？）

満井は紙を見ると、酷く焦って書いた字が見えた

“この二人は僕達の仕事を調べてる。ロスタイムについてはドラマとの相違点が見つかるから決して口外しないでほしい。気をつけてくれ！”

紙をさっとポケットにいれて、満井は二人の方へ向かう。

「えあ?! フジ子ちゃん?？」

西島は仰天した。それに井上が更に驚愕する。

(え、知り合い!?)

「ルパン!! えっ、何で!？」

西島半象は昔、ルパンと言う愛称だった

しかし、西島はその愛称を不服としていた。

「久し振りだなあ! 今ルポライターやってんだ…知らなかったなあ」

「ルパンは光壇舎の編集長やってるんでしょ? 凄いわね!」

(何和んでるんですかっ!)

二人(須川と井上)の小声が見事に八モる。

「と…どうしたの?」



「あ、ちょっと小耳に挟んだ話だけどさ」

ROUND 1！満井（峰不二子）VS西島（ルパン三世）

「あら、何か記事になるような情報かしら？」

「いや、記事には出来ないんだけどさ……」

「だったら興味ない」

「審判って知ってる？」

「何の審判よ？焦れたい言い方するのね」

「うっ……黒いユニフォームを着た審判なんだけど……」

青嶋『オット、主導権を取られそっだ！』

前田『ここは何としてもボールを取り返したい所ですね』

場の空気が緊張する。

「詳しく説明出来てないけど。何が言いたいのよ？」

「あう〜〜……………」

「満井さん！この事件について詳しく調査してくれる？」

横溝主任がうまい具合に合図をよこしてくれた。ボールは横溝にまんまとパス成功させていた。

「はい！言っとくけどルパン、そんな奥歯に物挟んだみたいな言い方しちゃダメ。これ以上変な事言ってきたら殴るわよ」

何処からかは分からないが、大歓声が響き渡った。

青嶋『一瞬の隙を突いて、稲妻シュート炸裂！』

前田『これは流石のルパンも反応出来ないっ！見事に決まりました』

『!』

青嶋『それではリプレイをご覧ください!』

…リプレイ?ふと、ケータイの液晶がいきなり変わった。目を白黒させていると、先程の口論が有り得ない角度から写し出されていた。

前田『この切り返しはサッカー選手以上の反応速度!素晴らしい!』  
『!』

言われた事故は、この雨の中で火災にあったと言うJR栄央線國分寺駅構内の変電所。

漏電に依る火災だと言っていたが、どうも様子がおかしいらしい。

この影響で栄央快速線がもう二時間もストップし、少なくとも15

万人に影響を及ぼしている　もしかしたら、今後増えるかもしれないそうだ。

現場の駐車場に着くと、火災と言うよりは小火に近い事が分かる　ただ、復旧に時間が掛かっている様で、多くの人が右往左往していた。監視カメラをじっと見つめた後、車から降りてよく見ようとしたら…

「ちよつと君！勝手に現場に入っちゃダメだよ！！」

警察官が止めに入ってきた。

満井は黒い手帳を警察官に掲示すると、

「ご苦労様。通してくれるかしら？」

警察官は掌を返すように態度を変えて満井を通した。

「これはとんだ御無礼を！」

「いいから。案内しながら状況を教えてくれる？」

「はい！こちらです」

須川は仰天して、恐縮しながら後を付いていく。(黒レインコート  
羽織り電光掲示板に防水シート)

対象者データをよく見ると、職業欄の隣りに新しい文字が浮かんで  
いた

職業：ルポライター・警視庁刑事部(警部)

(人ってホント、見掛けじゃ分かんないよなあ……)

なるほど、記者と言う身分からの視点で裏に消えていく事件を探る  
という事が。それなら合点がいく

要するに菱元が言っていた言葉は隠語だ。‘この事件について詳し  
く調査してくれる?’

事故として処理される前に、調べる必要がある。それで満井が白羽  
の矢に当てられた訳だ。

非公式の課である為、特別に捜査命令がおりない限り、二束の草鞋を履く事が出来るのだ。

「報告が遅れた上に、ブレーカーが故障したにも気付かないで一時間送電!?!」

満井は声を落として呆れ返っていた。

「はー…何してんのよ、もう…取り敢えず故障したって言うブレーカーに」

「はい…でも、何で本庁の方が…?」

「遅いですよ、満井警部!」

すでに現着していたのは松田龍平巡査部長。

「待たせたわね。現場の状況は?」

「復旧にはかなりの時間が掛かる見込みですね それより気になる事が。」

松田は声を落として、

「事件の臭いがします」

と、満井に耳打ちした。

「現状には僅かですが、劇薬が検出されました。今回の小火騒ぎと同様の物が使われた可能性が高いです」

「問題は、誰がどうやって事を起こしたか、よね」

満井は、残されていた証拠品の入ったビニルをじっと見つめた。

「これ、科捜研に回して詳しく分析してもらえる？」

「そう言われると思って一部を既に調べて貰ってます」

「さすが、松田君は仕事が早いわね！」

満井は豪快に松田の肩を叩く。

「満井警部腹心の部下ですから (^ - ^ ) y  
そう言いながら、嬉しそうにはにかむ松田。

「じゃ、次は小火があった場所に行きましょう」  
「はいっ！」

須川も後からそつとついていく。

雨が降りしきる10時半。

6 / 2 1 : 0 0 : 0 0 . 0 0



漏電に、雨　そして、小火。これらが予め予定されていたのだとしたら……

満井は静かに考え出した

もし、ブレーカーが意図的に時限爆弾の様に壊されたのだとしたら

……

そして、これが切っ掛けになり、もしかしたら、何らかの事件に発展するかもしれない。

満井はそんな不安を抱えていた。

ただの事故とは思えない、そんな時、松田の携帯がなる。

「はいつ、あ。夜来さん！……えっ、はい……はい！ありがとうございます！満井さん、分かりました！分析の結果、硫酸が検出されたようです」

「硫酸ね……確か医薬の他、爆薬にも使われる物……誰にでも入手出来る代物じゃないわ」

「数名が怪我を負った原因も、この薬品を吸入した為の様です」

「うーん、でもそうなるかどうかのタイミングで仕掛けたのかしら……？」

「ん〜そこなんですよねー」

二人は考え込んで腕を組む。

雨はさっきより強く降り出している。

その雨は二人の腕に当たる

雨……？

満井は空を見あげて、雨と硫酸、小火の関連を探っていると、とんでもない推論にぶち当たった。

「そうよ、ある物質を使えば、この雨を利用してブレーカーを壊せるし小火騒ぎも起こせるわ……！」

松田は吃驚して歩みを止める。

「あ、ある物質？」

満井はニヤリと笑い、コソリと言った。

「ドライアイスよ。朝のうちはこんな強い雨じゃなかったから、来てすぐに仕掛けたんだと思うわ。硫酸を固めたドライアイスをね」

「ドライアイス内に硫酸を？何でそんな手の込んだことを？」

小火の現場に着くと、漏電の元となった線が無残に焼け焦げているのが確認できた。満井はそれを見て確信した。

「私の推測はこうよ。」

ブレーカーが壊れる時間を見計らって、中で発煙硫酸を加熱させ、三酸化硫黄を発生させて“火事だ！”と陽動させる

みんなは煙に目が行き、それを消火しようとする。でも、それは水を差せば差すほど強く反応する発煙硫酸。

だから消えない小火を火事と思い込んでしまったのよ。そしてその間にブレーカーが故障する。

「ただど皆は小火に気をとられていてそれに気づかなかったんだわ」

「でも、漏電はどう説明するんですか？」

「仮説にすぎないけれど、偶然で間違いないわよ。」

いくら犯人でも漏電させたら自分の身も危険にさらされるから

でも消火に当たり激しく反応した発煙硫酸が線を切り 本当の火災を呼び起こしてしまった…って所かしらね。

犯人はそれで相当焦ったのかもね…皆とは違う消火方法をした人が一人だけいると思うの。

確認とって見てくれる？ その人がもしかしたら実行犯かも…」

「そういや、新入りの嘉納が変だったなあ。火が出てからいきなり自分の服を火に放り投げたんだ」

満井と松田はけが人が搬送された国立天王杯総合病院にいた。けが人から、事情聴取を取っていたのだ。

「そうそう！水さしても消えなかったのに、それで消えたんだよな

あ！まるでマジックみたいに！」

ガヤガヤと賛同するけが人たち。

「…あなたたち知らなくていいと誤っているでしょうけど、その程度の怪我で済んだ事を喜びなさい。

あなたたちが吸った三酸化硫黄は有毒で、肺水腫 肺の気管支や肺胞に水分が染みだして溜まった状態 になってたかも知れないの。

……下手したら意識不明の重体になってたわよ」

それを聞いて、彼らは顔色を蒼くした お陰で、聴取もスムーズに進んだのだった。

嘉納直哉。彼は化学工場の開発部で以前働いていたのだという。

話を聞いていると、どうやらリストラ対象になり、ここにはバイトとして入ったばかりなのだという事だった。

(開発部なら容易に硫酸を持ち出すのは可能ね)

(そうになると動機は……?)

（動機は恐らく、自分をクビにした会社への復讐 実はそれが大成  
功しているの。）

あの人、前日のうちに工場に発煙硫酸を仕込んでおいたみたい

紫がその現場に行ってるわ。味を占めた彼は衝動的に交通麻痺を起  
こして今度も成功している…）

事情聴取を終え、車に戻る二人（三人）。

満井が車のキイを開けると、いやな予感が頭をよぎった。

な  
ん  
だ  
ろ  
？

「僕が運転しますね！満井さ」

松田が、運転席のドアを開ける

「離れて、松田君っ！！（予備審さんも！！）」

満井は松田を蹴り飛ばして、自分も予備審とともに車から遠ざかった。

ドオオオオン！！

車から火柱が上がり、爆音があたりを揺るがせた。

「きゃあっ！？」

「車が爆発したぞーっ！？」

病院前は一時騒然となる。

松田は啞然とし、須川は驚愕して車を見、満井は犯人である嘉納の仕業と確信した。

幸いにも、誰も怪我をしなかった。それは満井の並外れた第六感に助けられた為だ。

ただ、松田が満井に蹴り飛ばされた際、腰を強打したことを除いては。

二人はとりあえず警視庁に歩いて向かうことにしたが、腰を庇うように歩く松田を見て満井は溜息を吐いた。

「はあ…」

「満井警部のお陰で助かりましたあ…あででっ!!」

「…ごめん、腰を痛めさせたのは少なくとも私の所為ね…」

(どうしてわかったんですか？車に爆薬が仕掛けられてるって…)

須川が静かに尋ねた。満井は口を動かさずに、口の中で呟いた。



(勘よ。それ以外の何ものでもないわね)

「大体、私が停まつたらあなたも注意くらい払ってよ、松田君！」

「し、しましえん…いでで…」

中腰で情けない松田を見て、満井はまた溜息をついた。

「はあ…もういいよ。乗って」

満井は松田に背を向けて、しゃがんだ。おんぶする態勢である。

「ええっ!?!…い、いいんですか?て言うか、普通逆ですよ?」

「四の五の言わないで早く!こう見えて力はあるのよ」

半ば脅されて、松田は満井の背に乗った。

「あら?意外と軽いわね、松田君」

「一般男性の平均ですけど…」

「ううん、これは軽い部類に入るわよ。こないだ自分の体重の倍の男性を一本背負いたぐらいし」

「…す、凄いつすね……」

そんな人に蹴られれば、怪我しないほうが逆におかしいと松田（と須川）は思った。

雨の中、松田が傘を持ち、さらにそんな松田を背負っている満井に  
は否応無しに視線が突き刺さってくるが、満井は別に気にする風で  
もなかった。それどころか平然としていた。

「あの、満井警部？俺やっぱり恥ずかしいで…」

「何か？」

若干鬼の形相をして振り返る満井に、松田は何も言えなかった。

「イエ、ナンデモアリマセン……」

須川は思わず笑ってしまった。

が、満井にどうも聞こえたようで、見えるはずのない黒いオーラが、満井の体から一瞬だけ出た。

(何か怒ってらっしゃるよ!?)

松田はびくびくし、

(気づかれましたかあ!?怖いですって!!)

須川は冷や汗を掻いていた。

その頃、上坂主審と、加藤・鋳鋤線審は。

上坂はまだ熱が下がっていないらしく、苦しそつに呼吸している。

「アイスノン取り替えてきます」

加藤は冷凍庫に行つて、もう一つのアイスノンを取り出し、タオルを丁寧に巻いた。

「熱計つたら、三十九度六分もあつた」

銚鋤が台所にやつてきて、加藤に報告した。

「たくあの人は無茶するんだから……」

「僕、おじや作りますんで。家ではいつも調理担当でしたから」

「お！？ありがたい、それ食べて薬飲めば少しは落ち着くよな」

「ええ、あ。それ持つて行く時にどんな味が好きか聴いてきてくれますか？」

「わかつた。何か悪いな」

「困ったときはお互い様ですよ」

一通りの道具はそろっていたが、銚隙は妙な事に気づいた。

（使われた、形跡がない？）

取り出した土鍋には埃がたっぷりかかっていた。

きれいに洗い流し、今度は米を入れるスペースの扉を開ける　がそこには米が入っていないかった。

（もしかして…）

冷凍庫に注目すると、凍らせてあるご飯を見つけた。

（はいはい、米は買ったらすぐに炊いてこっやって保存しとくのね…  
…どんだけ!!）

銚隙は一膳分を失敬して、米をそのままなべに入れ、水を入れてコンロに向かう　が。

「……………」

小さい使い勝手のいい鍋がいい感じに邪魔をしていた。しかも、IHクッキングヒーターは簡単にお掃除のできるタイプ だが、ここまで汚れているのは見たことがなかった。

「上坂主審、塩味が好きだって…どした、銚鋤？」

加藤が寝室から戻ると、銚鋤はかなりイラついているようだった。

「…満井さんのこと少しわかりましたよ。料理にすごい無頓着だって事がね！」

銚鋤がここまで怒るのも珍しかった。加藤は仰天していた。

加藤はとりあえず銚鋤から一時退避して、部屋を見て回ることにした。

玄関から程近い部屋を開けると、異臭がした。

「んが!?!」

よくよく見ると、溜まりに溜まった可燃物のようだ。

しかしこの異臭は只者ではない。銛鋤までもがすぐに気づいた。

「何ですか、このにおい……いいいいい!?!?!?!」

足下から寒気がゾワーツ、と来た。

それは当然で……

「「ギヤーーーーーッ!?!?!」」

足元を大量のチャバネゴキブリが大行進してきたのだ!

流石の線審でも大声を上げてしまう。

幸いにも、玄関にまっすぐ向かっていたので、少なからずホッと

した。さらに安心した事に、上坂は少し落ち着いてきたようで、熟睡モードに入っていた。

「……メグミ・ノダ以上だな……」

「とりあえず、掃除などは俺がやるわ。実界でも家でも掃除担当だったし」

「お願いします。…ついでにお風呂場もお願いできますか？何かいやな感じするんですけど…」

加藤は若干ゾゾと背筋が凍るのを感じた。

確かに、水周り系にはいやな臭いとともに、閉じているからわからないが異臭が微かにするのだ。

兄弟もちであった二人が、家事・掃除をしだすと

「うおおおおお……！」

「ギャー……ス……！」

暫くは悲鳴が響きっぱなしだったのは言うまでもない事であった……



ただ、周囲の人には壁と防音で聞こえないのでその点は安心だが。

青嶋『 それではここで、彼らの華麗なる家事・掃除プレイをダイジェストでどうぞ』

加藤が、可燃物をあつという間に焼却炉へ運んで、部屋から持ち出した合鍵を使い、焼却炉へ次々放り込んでいく。

(加藤曰く、「暇がそんな無くてもこれくらい普通やるだろ…」)

銚鋤はというと、台所周りをきれいにして、おじや作りを再開していた。

(銚鋤曰く、「ここまでものぐさな人はいまだかつて見たことが無い」)

すべてのゴミを燃やした後、加藤はその暗い部屋に戻り、(掃除機が無かったため)

使い古されたタオルと、バケツ、放ったからしの埃取りでその部屋の大掃除にかかった。

(もの凄い埃の量に、加藤は溜まらず「どんだけ!!!」と叫んだ)

銛鋤がおじやを完成させると、上坂はちよつと目を開けていた。

何事かと思ひ体を起こすが、やはり自由に動けないようで銛鋤が優しくベッドに押し戻した。

そしておじやを枕元に置き、加藤の加勢に入る。

魔の巣窟(？)、水周りエリア。

二人はゴム手袋にマスク・ゴーグル(!)を装着し、恐る恐るドアを開けると…ハリブトシリアゲアリ(要するに羽蟻)が所狭しという感じで大量発生していた。

準備していたアースジェットで一網打尽にし、テキパキと奴等を処分した。

だが、これだけでは終わらない。一番怖いエリアが残っている…  
…風呂場だ。

青嶋『そしてこれから中継でお風呂場に入るところです!』

前田『さながら、サッカー業界であまり使われなくなったスイーパーのようですねえ』

青嶋『…久々に聞きましたよ、その言葉』

とにもかくにも、二人は完全装備で風呂場に入る

ちゅ!?

と声が響いた……

一旦、扉を閉め今の事態を飲み込もうとした。

「……えーっと」

「まず、換気扇を完全に塞ごう」

加藤はすぐに移動して、換気扇にガラスを貼り付けた。

ちゅー!!?」

また声が聞こえた。今度は焦っている。

「ほかに隙間は…なし」

風呂場前に移動すると、今度は銚鋤が風呂場の扉をこっそり開けて電線を通していた。

「AED使います 一気に行きますか?」

加藤が静かに頷く。銚鋤はそれを確認し、量を最大値にあわせた。

「十秒流し続ける。それで大丈夫だ」

「床は濡れていましたか?」

「ネズミたちが水を飲むのに使った後があった。一気に天上までい

「く」

「了解。…入れます！」

「チューーーーーー！！！」

八秒後には声は聞こえなくなっていた。

十秒して、電源を切ると、ボタバタバツツと天井や壁に張り付いていたらしきネズミたちが落ちる音が聞こえた。

「回収します！」

「気をつけるよ。気絶しているだけだからな」

「これはどつするんです？」

持ち上げたネズミを見て、銛鋤は加藤に尋ねる。

「動物病院に寄贈する。モルモットとして重宝されるからな」

「…加藤さん、冷静っすね…」

「ゴキブリ大行進を見た後だから大して怖くも無い」

「…右に同じ」

手際よく袋に詰め終え、動物病院へメッセージ付で送る。

「俺は風呂場の掃除をするから、トイレの方よろしくな、銛鋤」

「はい」

加藤・銛鋤両名が掃除に悪戦苦闘している頃、その部屋の主である満井はというと。

警視庁のパソコンに向き合っていた。嘉納には前科があったことがわかったのだ。

そこに現れたのは六係の二人組。

「特殊捜査班の満井警部殿」

一人が嫌みつたらしく突っ込んでくるのを払いのける満井。

「邪魔。あ、待ってたのよ亀山さん」

「力加減しないと駄目だよ、富士子さんそれでなくても力強いんだから」

「今回は緊急避難なの。じゃ、松田君の整体よろしく！」

ソファで寝転んでいる松田を指して、またパソコンに戻る。

「災難だったねえ……」

という亀山の声を背に、じっとパソコンを見つめる。

嘉納直哉。 …こいつには見覚えがある。そんな名前だったのか。

まさか…信じたくは無いが、その可能性が無いとは言い切れないのだ。すぐに、刑事部長に電話する。

「秀英新聞本社が、危ないかもしれません……！至急爆弾処理班を向かわせて下さいっ！！」

“その確信は一体何なんだ？”

「犯人と思われる嘉納直哉は…私に恨みを抱いている恐れがあります。」

ですから、片方の職務については嘉納は知っています。爆破のときに私を殺すのに失敗したから、可能性は高いかと」

“君に恨みを？何故かね？”

「嘉納は、私が書いた記事が原因で会社を辞めさせられたからだと思います」

周りの人たちは仰天した。



それは、亀山や伊丹、松田、須川も同様だった。

“…わかったすぐに手配する。満井君は部屋で待機を”

「嘉納を捕まえに行きます」

電話を切って、須川に他の人にわからぬよう目配せをしてその場から立ち去った。

須川も後を追う。

「満井警部っ！！ いでっ！！」

「そんな体で行かせる訳にはいかねえな。サッサと治してすぐにおうぞー！」

「は、はいっ！」

「じっとしてな…」

全員が、耳栓をしてあらぬ方向を見ているのに気付いた松田は、亀

山に何をされるのかと一気に不安になった。

「あの一…何を？」

「整体。忙しいし一瞬で済むようにする」

亀山は指をポキキと鳴らして、つぼの位置を探す。

「ギヤーーーーーッ!」

だが、そのお陰で腰の激痛は嘘の様に無くなった。亀山の面パトで、秀英新聞社に向かう二人だった。

「…僕、知りませんでした。満井警部が外で何をやってるか」

「俺も初耳だ。　　たく、何でアイツそんな大事なこと言わなかった

んだ」

満井は、すでに秀英新聞本社の屋上にいた。

嘉納直哉と対峙していた。

「来ても来なくても同じだ。僕はここで自殺する」

「自殺なんてさせないわよ」

「…なんだよ、サツみたいな口聞くなよ、記者の癖して生意気なんだよっ!!」

「警視庁刑事部捜査一課特殊捜査班の満井富士子です」

桜田門の手帳を見せると、嘉納は驚愕した。

「サ、サツかよ!?!」

声が裏返っている。自爆スイッチを持つ手が震えだした。

「私の記事がすべての原因の始まりだった…でしょ？でもあなたが  
そういうことをする人だと知らなかったから…」

「俺が少年院に行ったことを知らなかっただど！？あんな記事書き  
やがって！俺はお前に人権侵害されたんだよ！」

心が痛んだ。

本当なら餅を引っ掛けて死ぬ所だった。

こんなことを知らないで済んだかもしれなかった。

でも、審判達が彼女の目の前に現れて今までの状況がすべて変わっ  
てきてしまった。

「……………ごめんっ……………」

小さい声は強風にかき消されてしまった。そして、これも初めて  
だった。人前で涙を流す事……………

「……………ごめんなさい……………許して……………」

満井はしゃがみ込んでしまった。

嘉納は、満井に手をあげた…

満井は抵抗することを忘れていた。

バキッ！ ドカッ！ バシッ！

満井は彼の思いを一身に受け止めていた。

今抵抗したら、彼はきつと自殺してしまう…そう思っていたからだ。

須川はただ、見ることにしかなかった。

何も出来ることの無い自分を心から悔やんでいた。

満井がここまでして守りたいのは自分ではなく、犯人だと、須川はわかったからだ。

「ハア…ハア…なんで抵抗しねんだよっ!？」

「……あなたを助けたいの…だから、私はあなたが気の済むまであなたのサンドバックにいる」

嘉納が満井の頭を足で蹴り上げた。その蹴りは強力で、満井の頭からは血が出ていた。

（満井さん！もう止めて下さいっ！死んじゃいますよ！）

須川が叫ぶ。だが、満井は首を振った。

（私はもともと、今朝餅を詰まらせて死ぬ所だったの。）

…それに、あなたたちと会ったことに悔いは無いわ。むしろ喜ばなきゃいけないの。

この事件を解決に導けたのは審判さん達のお陰なんだから）

一頻り殴られていると嘉納の目からは涙が溢れはじめていた。

「…気は済んだ？」

「済まないね……あんたと自爆するまでは」

「私は死んで構わない。でも、あなたを死にに逝かせる事は……出

来ないわ。

あなたは誰も殺していない…少年院に入った経緯も、私見たの。

でも、あなたは懸命に冤罪を主張した…なのに少年院に入れられてしまった。

誰も、信じられなくなってしまったのね。…私も昔はそうだったの

「えっ…？」

「両親をいっぺんに亡くした時、どこにも感情をぶつけられなかった。

そのイライラを人にぶつける事で、解消してきた…今もそう。

言葉が足らずで不恰好な態度しか取れないの。

でも、苦しいときには誰も傍にいてくれない…

誰かが傍にいたくちや、何にも出来ないのよ、誰だって…

ひどい孤独を感じ始めたのはつい最近よ。

このまま誰にも知られず死んじゃうのかな…って思った。だから、他の人には私のような想いをしないようになって思ってた！

でも結果的にあなたを苦しめていたのは私が書き殴ってしまった記事の所為…

碌に人の気持ちをしろうともしないで書きなぐったくだらない記事…

やってはいけない事だって、あの時は思わなかった…いえ、思えなかったの。感情をいつの間にか忘れていたから」

「……」

嘉納は静かに、満井の話聴いていた。

「だから、誰にも辛い時や悲しい時、誰も傍にいなかった孤独やつらさを感じて欲しくなかった。

…でもそれが、感情の無い辛辣な文章に繋がり、多くの人に打撃を与えていたのかもしれない…あなたのように。

あなたの行動は私の記事を読んでいる人たちの怒りを代弁してくれたのかな…？」



満井の声が震え始めていた。

「人の心を忘れちゃ、いい記事なんて書けないよね……？」

満井は嘉納をそっと抱きしめた。

「もう……やめて……死なないでよ、私の目の前で……お願いだから……お父さんやお母さんみたいに、逝って欲しくないの……」

「満井……」

嘉納の目は霞んでいたが、満井の温もりを感じていた。

ずっと無かった心の触れ合い。それがいつしか自分の心を悪魔へと変貌させてしまったのは他でもない自分自身だ。

…なのに、満井はそんな俺に真摯に向き合っている。俺の心がぐちゃぐちゃになってるのを懸命に救おうとしてくれている……

そして、自分のした事を心から悔やんでいる姿を見て、俺は自分のした事を悔やみ始めていた。

「……あなたは、まだやり直せる」

「じゅめんなぞ……」

嘉納の声は、涙の奥に消えていった。

須川は号泣していた。 満井を死なせてはいけない そう思い始めていた。

「やり直せる」という満井の言葉には、「自分にはもうやり直しが効かない」と言い聞かせているように聞こえたのだ。

遅れて、松田と亀山、爆弾処理班が駆けつけた。

満井は、松田の声を聞きながら気を失っていくのを感じた。

ス、と目を開けると満井は病院にいた。傍で、松田と須川が疲れ果てて寝ている。

16:25

6/16:05:00・00

一日でいろいろな事があつたな、と満井はベッドの上で考えていた。

…そついや、主審さんの容態は安定してきたかな？

寝ている二人を起こさないようにベッドから出て、家に電話を掛ける。

「あ、線審さん？主審さんの容態はどう？」

『ずいぶん安定してきましたよ…満井さん、一体どついつ風に暮らしたら、こんなになるの…？』

ずいぶん疲れた加藤の声が返ってきた。

「え？」

『掃除ですよ…リビング、寝室はまともでしたが、それ以外の部屋  
凄い事になってましたよ！？』

「あー…独り身だと疎かになるから…」

『洗濯とかお風呂ってどうしてたんですか?』

声が変わった。もう一人の線審、銛鋤だ。

「コインランドリーと、ウェルネスセンターのスパだけど…?」

『…もつとまともに生活しましょうよ』

「こつちも大変だったのよ、犯人と対峙してたんだから…今病院からかけてんの。ま、何とか無事だけどさ。ちよつと怪我しちゃってね」

『えーっ!?大丈夫ですか?』

『どうしたんだ?』

『犯人と対峙して怪我したんだって…』

『はぁーっ!?!?』

「…心配してくれてありがとう。でも、もう大丈夫だからこれから帰るね」

そうして、満井は電話を切った。

須川をそっと起こして、病院をそっと後にする二人。

「ただいま……って! 凄い綺麗になってるんだけど!!」

廊下はいつにも増して輝き、眩しいくらいだ。ゴミ溜めの部屋も綺麗になっていた。

「す、すごっ……掃除ありがとう」

満井は察して、声を落とした。

「万遍なく掃除したからね、風呂も綺麗にしたよ」

「ホントにありがとう! 今日わりと走ったから汗かいててね、ス

「パ行くのもこんな傷じゃ入れないでしょ？」

満井はそのまま脱ごうとしていたので、加藤、鉦鋤、須川は思わず突っ込んだ。

「……人前で何やってんですか!?!?!」

「あ、ごめんなさい。スパは広い脱衣所あるでしょ？癖で……」

そう言って、風呂に向かう満井。

「……でっ、須川ー！何があったか聞かせるよー!」

「……いや、聞いたらきつと……そうだな、話すよ。胸にしまっておける程、俺の心は出来ちゃいないからな」

そうして須川は話し始めた。上坂が起きているのを察して、少しだけ声のボリュームをあげて。

話を聞いた二人は表情が強張っていた。

「それじゃ、満井さんは……」

「死を覚悟していた。それは確かだ」

「でも、何でロスタイムが？」

「……きつと、満井さんの力が必要な事件が起こるのかもしれない。

この実界と鏡界を揺るがす、とんでもない事件が……起こるような……そんな嫌な予感がするんだ」

「なっ……怖い事言うなよ、須川……冗談……だよな……？」

「動くぞ、この実界の巨悪が……」

須川にはそんな予感を感じたのだ。

そう。彼らの長い一週間の、これらはまだ序章にすぎなかったのだ……

上坂も、実はそれを感じていた。何か、鏡界で良くない事が起きている……

風邪で休んだと言われている主審の大半はボイコットだと、上坂は知っている。だから無理を推して実界に来たのだ。

まだちょっと熱はあるが、動くのは楽になってきていた。

久遠は、満井の部屋の前にいた。

しかし、二の足を踏んでいる。

ノックもしないで、久遠は頭を振り、そこを去って行った……



天照大神は新たな審判員制度を制定しようとしていた。今のような審判選定ではろくな審判を生み出さぬ、と…

《今こそ、鏡界審議会の法を改めなければなりません。これは最重要通達です。もしこれを通さないと言うのであれば、ロスタイムライフ制度を抹消致します》

議会はざわめいた。

T o b e c o n t i n u e d ……

端書き。

続いたー!!!

いろんな伏線を仕込みました。

さあ、これらがどう化けていくのか楽しみです(^-^)(v

2008/4/6 - 12 .

更に端書き。

満井さんの言葉変えました。

後、発煙硫酸と硫酸を使用していた事を付け加えました。

多少カットした部位もございます。

2009 . 8 . 25 -

FILE・15 STOMING(前書き)

はい、お待たせしました(^・^)

さあ、大変な事態になって来てます。

いづらか修正致しました！

混沌としていく世界をどうぞ……

-

思い出したくもない過去を掘り起こす輩がいる。

人の心を悪戯に騒ぎ立てて中傷する輩がいる。

その時、あなたならどうする？

立ち向かうか、闇に逃げ込むか…

それとも

死を選ぶかはその人次第。

最近また増えた執拗な取材電話に、矢来紫苑は辟易していた。

彼女は今、警視庁内の科学捜査研究所の鑑定官である。

主に薬品解析などを担当するが、ここに来た本当の目的がある。だが、その事については誰も話していない。

…それがたとえ、京都府警にいる同僚の榊万里子であっても、だ。

過去の情報が全て詰まっている倉庫の中、紫苑は顔を上げる。

「はあ…手がかり、無しかあ」

そんな時に 軽快な着信メロディが鳴る。

「あれ？誰だろ…はい、矢来ですが」

『夜分遅くにすいません、私、警視庁の満井と言います。…えと、松田の上司です』

「あ、松田君の上司さんって事は、警部さんですか？」

『ええ、実は今ちよつとある事件を調べているのですが…犯人が、一軒だけ犯行を否認しているんです。ご存知ですか？病院で車が爆発した件』

そついや、三時頃何か騒いでるなあと思っていた。……え？

「車が爆発したんですか！？えっ、それで松田君は…？」

「大丈夫、無事ですよ。ですが…その一軒だけ、彼は否認を続けています。まっすぐ秀英新聞本社に向かったという目撃証言もありましたので」

「こちらにデータは届いているんですね？」

紫苑は立ち上がって、一人今日の件案に向かった。

『すみません、何か他に調べていたのでは？でしたらそちらの件をこちらが調べても構いませんが』

向こうの意外な言葉に、紫苑はたまげたが、直ぐに

「お互いに、調べるって事でその代わり…と言う訳ではありませんね」

電話口で優しい声がかすつと笑った。

『ええ、それで良いわ…それで、私は何を調べれば…?』

「祖父の…心中事件を調べているんです。日時は1986.5.18 私以外は皆それで死んでしまったのですが…ただの事件じゃないような気がして、ずっと調べています…全然手がかりというか証拠がこちらに残っていないくて…」

『分かりました。こちらで極秘裏に調査してみます。信じて下さい。言ったことは私、必ず守りますし誰にも口外いたしません』

「あなたのことをよく松田君から聞いています。彼が信じている人なら確実だわ。よろしくお願いします」

『ではお互いに』

「はい！」

電話を終え、乗用車爆発の概要に目を通していると

「その事件の何を調べようとしている?」

後ろから声がして、振り返る間も無く、首に紐が掛けられる。

「あつっ!?!」

「この爆発事故は調べなくて良い事案なんだよ。…死にな」

このままじゃ、昔の事件を解明出来ないままなの…?やだ…そんなの…

紐がギリギリと頸動脈に食い込んで、正に息が止まるその瞬間

ピーーーーッ!

笛の音が響いた。

遺された家族は、今死のロスタイムに突入した。

夜来 紫苑(38)

職業:科捜研科学班・鑑定官

状況:頸部圧迫による窒息死(絞殺)



誇り：祖父

目標：昔の心中事件の真相を知る事。

時間は正午に遡る。

夜来遼は夜勤勤務だった。

…時々夢に見る、断片的な過去の記憶。

それが何かは今の自分には分からない。誰かの叫ぶ声、辺りに広がる血飛沫…子供の声が響く。

「おじいちゃん！」

誰、だ？

目を覚ませば、そこは自室。

最近、その夢をよく見ていた。

「…ふう…ちょうど風邪が治ってよかったわい。こんな時は仕事を  
して無心にならなくては」

ストレッチをして、審判服に着替える。

ビーツ。

ファックスだ。…内容は今回の依頼者についてである。

「夜来、紫苑……？」

どこかで聞き覚えがある。だがどこで聞いたかは分からない。

ロスタイムは7日間を示していた。

「紫苑……どこかで聞いた名だなあ……」

遠の心の何処かに、その名前が残っている。名前を呼ぶ声、駆け寄る子供。

「おいで、紫苑」

「待ってよおじいちゃん！」

思案に耽っているとノックが聞こえ、反射的に声を掛ける。

「どござ」

「失礼します。夜来主審」

入ってきたのは齋木公明線審。彼らは共同生活をしている。永い事同じ人と組むと、信頼関係が生まれる。

そういう人達はそのままルームメイトになる事があるのだ。

「そろそろ勤務時間です。控え室で時間を待ちましょう。今日は第一四審判に新米が入ります」

「分かった。…若造か、久し振りだな。最後に指導したのは 須藤 だつたな」

「懐かしいですね。……彼にあらかた説明するためにも早く行きま

しょう、夜来主審」

「そうさな。その彼の名を聞いておくか。…名前は？」

「廣澤悠一です。運動神経は二重丸ですね」

「ふむう。久々に熱が入るのお」

「そうですね！」

手に、対象者のデータを持ち、二人はドア横のボタンを押す。

4080\*12

それに、主審の証である笛を当てると、自動的に扉が開く。

「お早う御座います、夜来主審」

「もう昼じゃ。それを言うならこんにちはじゃろ？廣澤君」

廣澤が緊張して黒コスチュームをピシッと着ていた。しかも直立不動だ。緊張度合いがひしひしと伝わる。

「す、すいませんっ!!」

「廣澤さん、ちょっと深呼吸してみよっか？」

先に来ていた千堂囁線審がリラックスを促すが、廣澤は聞いていないようだった。

「肩に力が入りすぎじゃな」

夜来がさらっと廣澤の肩を撫でると、廣澤はようやく落ち着いた。

しかし、千堂は顔をしかめていた…

「ただ、夜来主審。今回の対象者もしかしたらあなたの孫かもしれない。私は他の人に代わったほうが良いと思います…」

千堂が遼を心配して言った言葉だが、遼は手でそれを制した。

「情に絆されるほど、わしは弱くありませんよ。それに、昔の事はもう余り思い出せんのだ。どんな風に死んだのか、どんな状況じゃったか…もう22年前にもなるんじゃないから、当然じゃな」

千堂と齋木は目を見あわせる。齋木が肩をすくめると、千堂はフ  
ーッと溜め息をついた。

何か嫌な予感がするのだ。

それも、途轍もないほど大きい不安が、線審達の間で囁かれていた  
知らぬは半数の主審と第四審判達だけである。それには、遼も廣澤  
も含まれていた。

もしかしたら、この職が無くなってしまつかも そんな、底知れぬ  
不安があったのだ。

誰かが言った。

昨日の後悔は今日の計画であり、今日の後悔は明日への道しるべで  
ある。

「お、じいちゃん…?」

俄かには信じられなかった。目の前には、22年前に死んだ祖父の姿がある。それも、黄色いユニフォームを着て、赤い笛をくわえている。

ピピッ!

黒子がどこからか現れて、紐を丁寧に抜き取った。

「何…何なの、おじいちゃん? 何でそんな変な格好?」

紫苑は思わず笑ってしまった。

遼はおじいちゃんが誰を言っているか分からなかったが、電光掲示板を指して、走れ、と促す。

絞殺された時間は、18時45分

そして電光掲示板には

6 / 2 3 : 5 9 ; 2 5 . 1 5

と示されていた。

「え、私…の？有効時間？ん？」

6 / 2 3 この意味が分からず暫し呆然としたが、突然分かった。

「え、一週間も?! なっが！」

青嶋『さあ、夜来紫苑のロスタイムは一週間!』

前田『今回もまた長い部類に入りますね』

青嶋『もう一人の方と、時間は違えど同じ期間となったロスタイム! さあ、…彼女を殺そうとした人間は一体誰なのでしょう?』

前田『病院前での車爆発事件は、他の人が仕掛けたと先程おっしゃっていましたが…一体誰が、満井警部を狙ったのでしょうか?』



青嶋『…何か背後に大きな巨悪がありそうです。ここは慎重に調べたほうが賢明でしょう。おっと、ここで紫苑さん動いた!』

紫苑は車の爆破で使われた爆薬を詳しく分析した。

かなり手の込んだ爆弾で、一回ドアを開けるとスイッチが入り、二回目を開けると装置が作動し、三回目を開けると起爆するようになっていた。

…即ち、仕掛けられたのは、病院ではなく、その前にいた場所で爆弾が付けられたことになる。

ここまで手が込んでいるのは、余り類がなかった。

「何なの、これ…確実に肉片が飛び散る仕様になってる…この爆破で誰も怪我しなかったのは奇跡だわ……」

残された車からは、満井と松田以外の指紋はついていない…そして仕掛けられていたのは、車の下だ。誰の目も届かないところなだけに、盲点にもなっていた。

「…一体誰が、満井警部を狙ったのだろう…」

謎、といえbaumou一つ。

こちらは風呂の後で松田の連絡を受けて警視庁に向かった満井。

嘉納直哉から詳しく事情を聞いていた。

「…じゃあ、あなたは病院には行かずそのまま秀英新聞社に向かったのね？」

「はい。そもそも、自爆する為に作った爆弾はちやちい物で、僕が作れる技術もそんなに上手い方ではありませんでしたから、せいぜい火を出すぐらいですし…それに、こんな威力の強いのはまったく分かりませんよ…」

映像は、病院前にあった監視カメラだった。

松田がドアを開けた瞬間に、満井が松田を蹴り上げ、自身も（見えてはいないが、何かを引っ張るような手をして ばっちり写ってしまっていた…）車から離れる。その直後、下から花火が打ち上げら

れたように車が粉々になったのだ。

火柱が上がったように見えたのは、そのためだと思われる。

と、いう事は爆弾は車体の下に取り付けられていたのだ。

満井が、殺されなければならぬ理由は…本人にもそれはまったく分からなかったし、誰が、満井の死を願っているのかもさっぱり見当がつかないでいた。

満井の第六感が鋭敏に働かなければ、松田と満井は確実に死んでいた。(いや、満井は既にロスタイム中だからどうなるかは分からないが…)

スローモーションにして、車が爆発する瞬間を全員(満井・松田・嘉納・他刑事二名(伊丹・亀山) 審判四名) 彼らは見えませんが)で見ている。

(本当に危なかったんだ…)

(無事で本当によかったなあ…)

線審の二人(加藤と銛鋤)は相当ビビッていた。

さらに悪いことには、この監視カメラ映像が、マスコミにリーク

されていた事だ。

一体誰がこんなマネを…

この場にいた誰もが、その言葉を何度も飲み込んでいた。そう、それは答えのない質問だった為だ。

『これが、病院前で爆発したと言う車の映像です。…しかもそれが警察車両であったという事も、記者の調べで明らかになっています』

記者。その言葉で、全員が満井を見たが、警部はそれ所ではなかった…と言うか、いつの間にかそこに満井の姿はなかった。

「あ、あれ？満井警部は??」

審判達も焦って、警視庁内に散っていった。

青嶋『満井を見失った審判らは探すために分かれましたね』

松田『彼らは満井さんと紫苑さんの間で取り交わされた約束には気付いていませんからね』

1986年…あつた、ここだ。

資料室で身体全身が埃まみれになりながらも、22年前の5月18日に起こった霞ヶ浦心中事件の捜査資料を発見した満井。

酷い物だった。幼い子供を除いた家族全員が、頸動脈を一発で切られ、辺りは血の海。

実行犯（と思われる）の手に握られた真つ赤に染まった包丁も、その捜査資料の中に残っていた。

それを持っていたのは当時の時の人であつた夜来政宗…紫苑の父親だった。

だが、自分で切つたにしては角度が妙に感じられる。誰かが心中を装つたように殺したのではないだろうか…？

しかし、その当時は単なる一家無理心中事件とみなされ、再捜査は行われることもなく、そのまま事件は終結されてしまった。

「多額の借金を返済するために、全員を殺して保険で賄おうとし

たとみられる。事実、それで借金が支払われ、捜査本部は無理心中として被疑者死亡のまま起訴 書類送検に至る”…絶対おかしいわよ。だったら家族全員殺す筈でしょ？何で娘まで殺さなかったのかしら…？保険が掛けられていないことは絶対ないと思うんだけど… そうだ、電話してみよ」

リダイヤルから、夜来紫苑に電話を掛ける。

「もしもし、満井です」

『満井警部、何か分かったんですか？』

「その前に一つ聞かせて。当時あなた自身に保険はかかってたのかしら？」

『保険…ですか？さあ……あの時は小さかったですし、親が加入させていたら資料はあるんでしょうけど…』

「それよ！！ご両親や祖母祖父が加入していた保険会社のデータを調べてみるわ。きっとあなたの名前があるはずよ」

満井が、保険会社の名前を捜査資料の中で見つけて、そこにあるパ

ソコンからその保険会社にハッキングをかける（注：やってはいけない行為です！決してやらないようにしましょうね！！！！）。

サーチしていると、イヤホンから声が聞こえた。（イヤホンマイクで話しています）

『こちらもう少しだけ分かったのですが：爆薬の成分から明らかに取引されていない成分を発見しました。恐らく、警察関係内部が、満井警部を狙ったのかもしれない』

満井は目を白黒させた。

「 どうしてかしら？私そんな深い事件とかヤバイ所には足突っ込むことは出来ないわよ？だって普段は記者なんだから」

『 とにかく一週間以内に解決しなくちゃいけなくなったわ』

その言葉に満井は直ぐに察知した この数十分で、紫苑に何があったのか。

「もしかして、今あなたロスタイム中なの！？」

『 ……！！満井警部もですか、いつからですか！？』

「今朝よ 情けないことにお雑煮を急いで掻っ込んだ為に無様な窒息死…って変な事言わせないですよ！そっちは！？一体何があったんですか！？」

『 私は爆破事件を調べるなって言われて…それで、絞殺されるの…事件を解決させないといけないの、一週間で！』

「私も一週間よ！でも、紫苑さんのほうが遅いんですね、ついさっきでしょ！？ ちょっと待って…爆破事件を調べるなって、どういうこと？」

満井は紫苑が言った言葉に引っかかって直ぐに質問した。

直ぐ横で静止している犯人の胸元から、手帳を取り出して、満井に告げた。

「警察庁公安部公安第一課三係 手越喜一」…公安の人がどうして満井警部を狙っていたのかしら…？」

『 …！…そこに、あなたを殺した人がいるの?!しかも公安部って……ごめん、人が来たから切る。また何か分かったら電話します』



矢継早にそう言われ、切られてしまった。

公安部が動くほどの事件なの…まさか、私の家族もそれに巻き込まれたとか？

紫苑の父親 政宗は今の自分と同じ科捜研のしがない（は余計か？）  
副所長だった。

…何らかの事件を調べたときに、父さんは何か重大な事を知ってしまったのだとしたら…？

幼い子供なら何も分からないと思って、私を殺さなかった…のかしら？だとしたら、満井は余計危ない場所に自ら送り込んでしまったのではないか！

紫苑は満井に電話をかける 出ない…いや、違う…

“ おかけになつた電話番号は現在電波の届かないところにあるか、電源を切っております。また改めておかけ直してください”

機会の音声が、空しく耳の中で響いた。

「満井警部!!!!」

紫苑は叫んでいた。

電話を切って、満井は足音をよく聞こうと耳をすますと…

後ろから、いきなり口元にタオルを押し付けられた満井は仰天した。

「っ!!!!」

後ろを振り返ろうとしたが、タオル内にしみこませてあった薬品で意識が朦朧としだしていた。

(っ……み、見えな……)

視界が次第にぼやけ、満井は完全に意識を彼方へと飛ばしてしまっただった……

満井はその人に抱えられ、隠し扉の向こうに消えていった。

その頃、上坂ら満井側の審判達は。

その現場を目撃してしまった。

「!!!!」  
「!!!!」  
「!!!!」  
「!!!!」

須川が勇んで向かおうとしたが、上坂の具合がまた芳しくないよう  
で、銚鋤と加藤が横で支えていた

（俺は満井警部の行方を追うから、上坂主審を家で休ませてくれ。  
状況は追って連絡する）

二人はうなずいて、その場から一瞬にしていなくなった。

須川は電光掲示板を背負い、満井警部を連れ去っていったその人を  
追っていく。

青嶋『これはとんでもない事態となつてまいりました！満井さんが警視庁内で拉致！！』

前田『この22年前の心中事件と、今回の爆破事件が…何らかの形でかかわっていると見て間違いないでしょう』

その頃……ある人物は過去の記憶に思いを馳せていた。

「娘には、本当に手を出さないか？」

「ああ。どの道子供には分かん話だ」

包丁を持つ、自分の手が震えている

……周りには女性の遺体二体と、初老の男性の遺体がある。自分自身もその血に塗れて、服を真っ赤に染め上げていた。

手袋も、最早元の色が分らなくなる程どす黒く染まっている。

「約束する。子供には手を出さない」

「…わかった。君を信じるよ」

首を抱えて、馴れない左手で右の頸動脈を狙う。

「…あーっ！」

ズバッ！ブシャツ…

血が、激しく宙を舞って

辺りを新たな鮮血に染め上げた……

「…ぐうっ！ハア、ハア、ハア………」

また、だ。

この吐き気を何度堪えたのか…

僕は、人を殺した。四人も。

そして、無二の親友を自分の手で…

二年前に時効を迎えた、22年前の

霞ヶ浦一家心中事件。

…殺らなければ、自分が殺されていた…

だが、こんなにつなされるのならば、殺された方が幾分かましだと思える。

記憶から決して消える事のない血の海を何度も思い出す度、後悔の念が押し寄せる。

そして、僕は…悪に染まってしまった。

赦してくれ。

僕には、逆らえない事だ

「K幹部」

僕は顔を上げる。

「何だ？」

精一杯のドス暗い声を出す。

「22年前の事件を調べていた女がいたんで、捕まえてきました」

「そうか。暫くは監獄所で様子見て、ヤバそうなら俺が殺す」

「わかりました」

彼は女性を担ぎ上げ、奥へと消えた。

この世界で、僕は幹部になった。

上はいずれ僕を出世してくれると言った。

抗えない巨大な力に、僕はいつまで耐えられるのだろう。

携帯がなる。僕はビツクリした。

表示を見ると息子だ。少し明るくなって電話に出る。

「どうした？珍しいな、卓志から電話来るとは思わなかったぞ！」

『 ちょっと最近会ってないから元気かなと思って。親父も最近仕事忙しそうだな』

「忙しいのは在りがたい事だぞ？それより大変だったみたいだな、社員が実の息子に殺されたんだって？…やりきれんな……」

『 お陰でバッシング凄かったよ。でも、何とか落ち着いたし…逆に新聞売れたしね』



「凄いじゃないか！逆境を力にしたわけだな？」

『八八。まあね…なあ、親父』

「うん？どうした？」

『俺の前彼女知ってるよな？』

「ああ、確か満井富士子さんだっけ」

『…ヨリ、戻そうと思うんだ』

「そうか。僕は何も言わないよ。二人の問題なんだから、ちゃんと彼女に話さないとな」

『……………親父……………』

「結婚も考えてるんだろ？善は急げ！って言うだろ」

『うん、ありがとう！電話して良かったよ！じゃ、俺会って来るわ』

電話は切れた。

でも久々の親子の会話で、僕の心は晴れやかだ。

「K幹部、彼女のデータです」

だが、そこまでだった。

一気に顔が青ざめる。

そこに書かれていた名前は今話していた

満井富士子

だったからだ……………。

(嘘…だろ…………)

久遠は満井のマンションに来ていた。

ピンポーン

…

…

しかし、誰もいないようだ。

携帯電話で呼び出してみる

『もしもし…』

「あ、富士子？久し振り…ねえ、今何処にいるの？俺、満井さんに話したい事が…」

違う。電話口で聞こえた声は、つい先程まで話していた父親だった……

「……親父？何でこの電話……富士子は、親父の所にいるのか？」

『ごめんな、卓志……彼女の事は忘れなさい……』

「？！ちょっと、どういふ事だよ！」

『……』

電話口からは、何も聞こえなくなった……

そして、不通音が響いてきたのだった……

「親父っ！！」

久遠は叫んでいた。

そんな時…満井は、目を開けていた。

……ここ、どこ………？

電光掲示板が、奇妙に光ってみえた。

（大丈夫ですか？）

（…頭クラクラする……）

辺りは暗く、周りはよく見えなかった。

（ここ……何なの？）

（警視庁内にこんな所があったのか…）

（庁内 ……そうだ。私調べものしてたら急に気が遠くなって……）

体が重い。起き上がるうにも、体の怠惰感が半端なく、また頭が  
ポーツとしてきた…

(う……ダメ……また……)

(満井さん! ……満井さん……)

須川の声聞きながら、満井は意識を闇に落とした

その頃、科警研の夜来は…

落ち込んでいる余裕はない。今は一刻も早く、爆発の真の理由に辿  
り着かねばならない

そうすれば、きっと分かる。

という事で事件を調べ直す事にした。

誰が心中に見せかけて殺したのか…そして、何故殺されなければな  
らなかつたのか…

「……満井警部がどうして殺されなければならなかったのかしら」

調べていた事件は確か、変電所のブレーカー事件。手元に資料を持つて考える。

これがもし、仕組みれた罠だとしたら……警察自身が、刑事を殺して内部改革を実行しようとしているなら……

それは、

N e e d   n o t   t o   k n o w

知る必要のない事

と、彼らは言うだろう。

どの道、満井と紫苑は既に死を契約された者だ。それは知られてはいないが……

ロスタイム中に殺される異例は殆どない。

だが、この状況ではいつそれが起こるか分からない…。

そんな時だった。

チャンチャンチャンチャンチャンチャンチャン  
チャラチャラーチャン

羞恥心の着メロが鳴り、  
『渡りに船』と言った顔で携帯に出る。

「どうしたの？」

『警部が何処行ったか知らないか？』

夜来は言葉に詰まった。…どうしよう。庁内で拉致された、とはとてもじゃないが言えない。

そんな言葉を飲み込んで、やっと言う。

「知る訳ないでしょ。私だって忙しいし…満井さん家って何処かしら？私が家を見てきてあげるわ」



『…じゃ、頼みます。住所は…』

紫苑は住所を聞いて、科捜研を急いで後にした。

青嶋『紫苑さんが走り出しました。これは早い！』

前田『一刻を争う状態ですし、命を狙われていますからね』

管理人に事情を話し、鍵を受け取る。

「失礼します……って、あら?!」

家には驚いた事に線審二人がいた。しかし、何か慌ただしい。

「だから無茶するなって言ったのにもう」

「上坂主審には柳に風でしたね…」

「すみません、失礼します」

線審二人は漸く紫苑と後ろの審判達に気がついた。

「げっ!？」

「しかも夜来主審?!」

加藤と銛鋤は固まった。

「二人とも、持ち場を離れて何をしとるか」

「上坂主審が風邪で…その看病に戻ったんですよ」

加藤が冷や汗をかきながら、遠に告げた。

「それに、対象者が庁内で拉致されたんですよ!今、須川が足取りを追っています」

銛鋤は焦っていた。

「…やっぱり、拉致されたのね…私のせいだわ。私が昔の心中事件を調べてなんて無茶なお願いしたから…」

途端に夜来主審の記憶のパズルが全て繋がった。

… 22年前の夜、息子の友達が訪ねてきた。

確か… 名を久遠侑史と言ったか…

わしは孫であった紫苑を寝かしつけた所で、  
対応したのは祖母さん  
(細君) だった。

「こちらへどうぞ」

「なんだ、客か？… ああ、君か」

「御無沙汰してます」

「政宗に会いに来たんかい？」

「ええ、まあ」

考えて見れば訪ねた時間が遅いと感じられた。それに様子もおか  
しかった…

わしと祖母さん、正宗と嫁が居間に揃うと

侑史は徐に鞆から包丁を出した。

考える間もなく、嫁の首が吹っ飛んだ

「きゃあああつ！！！！」

祖母さんは腰を抜き、わしは居間に飾ってあった刀に手を掛けた。

だが、また

ザシュツと

何かが切れる音が後ろで聞こえた…

振り返ると、祖母さんが床の上で

事切れていた。

「君は……何をしとるのか、判つとるのかね!？」

「…僕には、これしか方法がないんです」

頸動脈を確実に狙う奴の包丁を弾き、

わしは

奴の懐に飛び込んだ。

……それが、いけなかった。

気付いた時には……左肩に、包丁が食い込んでいた。

「ぐああっ!」

パタタツ、と血が滴る……

政宗が騒ぎを聞き付けて走って来た。

「やめる、侑史！」

「政宗、これが俺の出した結論だ。もう、止められないんだ」

…何のことを話している？

肩を負傷しただけで、わしは未だ生きていた。

「侑史、本当にこれが正しいと思っているのか？」

「…少なくとも、奴等はそう思っている。それにこれは俺が買って出た仕事なんだ」

侑史はわしのきり付けた肩を踏みつける。

「ぐぐっ！」

「こいつらの保険金と、政宗の保険金を必要としているんだ」

「でも、なんで侑史がそんな事を…？」

侑史はその質問には答えなかった。

「……お前にはまだ、小さい娘がいるだろ？……そいつらなら、どんな事情であるにしても家族全員を殺させる……それだけは避けたかった。紫苑ちゃんは殺さない」

政宗は驚愕した。

「一体、そいつらって誰だよ?! 侑史、教えてくれ」

侑史はしばらく黙っていたが、絞りだすような小さな声で言った。

「警察庁の上層部……末端の俺にはそれしかわからない」

思い出した。

侑史を巧みに脅し、矢来家族を殺させたのは……警察庁。

しかし、それを紫苑に告げた所でどうにもなることではない。相

手が巨大すぎる。勝ち目がない。

「…矢来主審？どうしましたか？ 顔が真っ青ですよ」  
加藤が傍による。

「…ああ、昔の……」

遼は口が滑りそうになったが、どうにか持ちこたえた。

だが、それは確実に紫苑に聞こえていて…

「おじいちゃん、何か思い出したの？！ねえ、おじいちゃん、教えてよっ！おじいちゃんたちを殺した犯人を捕まえたいの！」

「…お前には無理じゃ、相手が巨大すぎる」

職務を逸脱して話すのは初めてだ。だが、言わない事には、紫苑は死んでも死に切れないと悟ったのだ…

「えっ、…おじいちゃん…？」



「相手は、警察庁の幹部だ。名前は久遠侑史…政宗の親友だった奴だ」

紫苑は仰天した。そして、最悪の推測に行き当たった。

「それじゃ…満井警部を拉致したのって…その人の、部下？」

「可能性は大いにある」

あれ？いつのまに帰ったんだろう。

久遠はマンションの下で、満井の部屋の電気がついていていることに気がついた。

急いで駆け上がり、ドアを叩く。

「満井さん！僕です、久遠卓志です！」

紫苑はその突然の来客に仰天した。

「うお!？」

というか、六人の審判も驚いた（遼主審・銛鋤／加藤／千堂／齋木線審・廣澤線審）。

「…久遠?もしかしたら…」

遼と紫苑は互いに顔を見合わせて玄関に向かった。

「はい?」

「…あれ?満井さんじゃない…?君は誰だい?」

久遠は戸惑いの表情を隠せなかった。

紫苑は後ろに祖父のぬくもりを感じていた。

「矢来紫苑です。満井さんとは仕事仲間です」

「仕事って、記者の?」

「いえ…警視庁です。私は科捜研で、富士子とは友達なんです」

卓志はびっくりした。きつと知らなかったんだろつ。

「！…満井さんが、…？」

「とりあえず上がって下さい。話がかなり込み入ってきているのリビングに卓志を通して、紫苑はまずこの質問をした。

「まずお聞きしてよろしいですか？…久遠さんと満井さんの関係を

…」

「…昔、付き合っていた。だけど 会社のこともあって、一旦別れたんだ」

「えっ？」

「仕事もようやく安定してきたから、満井さんとよりを戻そうって…」

「なにそれ!!」

紫苑の怒りはごもつともだ。当然だが、審判（遼主審・加藤／千堂／齋木線審）も怒り心頭である。

「そんなの酷いじゃない！ふつた満井さんに失礼だよ！」

「違うんだ！振られたのは僕なんだ！ふがいない僕を見てられないからって…だから約束したんだ。立派になったら、絶対迎えに行くって」

この言葉で、紫苑はもう一つとんでもない疑惑が浮かんできた。

「久遠さん…お父様がどんな仕事をしているのか、知らない……そうじゃない?!」

久遠は言葉に詰まってしまった。

その通りだったのだから……

「…親父は、何の仕事をしているのかって質問をすると、凄く怖い顔になるんだ。だから、聞いたことない。何をしているのかは」

紫苑は次の言葉に迷っていた。

遼も目に見えてわかるほど動揺していた。

（落ち着きなさい、紫苑。彼もまた知らない被害者なんだから）

紫苑は後ろをチラリと見て深呼吸をする。

「実は、ある事件を調べていた満井さんの報告によると、…あなたのお父様とつながったの」

これが一番良い発言だと紫苑は確信した。

「え？何の事件を？」

「…聞いたことないかしら、22年前に起きた霞ヶ浦一家心中事件の事……」

「…その事件と親父に、何の関係があるんだよ？」

「私のお父さんとあなたのお父様が友人だったの」

「…?」

紫苑は腹を括った。言う場所はここにしかない!

「その心中事件の家族は私の両親とおじいちゃん達。…そして、満井警部は気づいたのよ。」

分かる?…あなたのお父様が、何者かに脅されて私の家族を殺したの!」

卓志は声を失った。自分の父親が殺人犯だと知るのとはとてもつらい事だ。それも、それに気がついたのが元彼女。これ以上の衝撃はほかにない。

「今も、あなたのお父様は……もう、どうしようもなく闇に囚われてるの……」

「!」

「満井さんが、警視庁内で拉致されたのはきつと……」

遼と紫苑はその言葉にびっくりして、卓志を見た。彼の表情は真っ青だ……

「……拉致、されたって……」

余計な事を言ってしまった！

……でも、言ったからには後には引けない。今度は銛鋤と加藤をちらりと横目で見て、紫苑はスウツ、と息を吸い込んだ。

T o b e c o n t i n u e d ……

FILE・15 STOMING (後書き)

うおおっおお!!

どうなるんだべさ!!? (どこの人だ、あんた)

さあ、まさに風雲急を告ぐ展開となつてまいりました!ここから更にもう一人ロスタイム者が増えてとんでもない事態に巻き込まれていきます…

ここから先息も継がせぬほどの“承” 即ち展開を描いていきます。

どうなる、これから(っ)って、あんたが言うな!

2008/4/13 - 16 .

NOS [2010/1/21]



「…何処行っちゃったんだろう、満井警部…」

居ないかな、なんて思いながら資料室を覗く。

…いる気配はない。松田は少し疲れて壁に寄り掛かろうとしたが。

「フウ、どこに行ったんだろ…」

手元に積んであった資料を崩し、慌てふためく。

「あわわわ…直しとかな…あれ？」

資料には 女子高生連続暴行事件 と書かれていた。

「この事件って、たしか二週間前の…」

資料を見ながら立ち上がる。

「…あれ、この子達満井刑事に感じが似てるかも……」

どうしてだろう……？

奇妙な事に資料は途中までしかなかった。

「そっぴや、この事件の犯人ってたしか……」

まだ、見つかっていない筈だ。なのに何故資料が？それにこんな中途半端に捜査が  
終わっているのも気になった。

寄り掛かるつと壁に手を当てると、

カチ

音が聞こえ、後ろの壁が頭にヒットした。

ゴイン

「いつでえー……て、うん！？」

後ろを振り返ると、壁だった筈のそれは扉で、手に触れた所はそのスITCHのようだった。

一見ただけではまず気がつかない。

「何だろ、これ…」

中を覗いてみると階段が下の方にのびていた。先は真っ暗で、明かりがないとよく見えない。

「そこで何してる？」

低いドスの聞いた声に振り返ると、目の前に銃口

考えはなかったが、その階段を滑り降りたと言っか、ずっとかけてそのまま闇の中へ墜ちていった。

「ひゃあー?!」

「あっ、こらー！」

途中、階段が無い所もあり、かなりヒヤッとしたが

バンッ

壁にまたぶち当たる…。

「いでえ……ん……?!」

足で階段を探ると

ヒュウウー

風が吹いてきた。 風？

建物内で風……この先に、何かある。

そう確信した松田はより深く、階段をゆっくり下りていく。

用心のために、ホルスターから拳銃を取り出して。

中平は今日は休みだった。だから、優雅に夜のクラシックを觀賞していたのだが…

ピロリロリン、ピロリロリン

携帯に着信が入る。

「はい。中平」

『夜分遅く恐れ入ります、審判補佐の君塚真樹と言います』

…嫌な予感がするが、返事をする。

「はあ」

『申し訳ありませんが、すぐ仕事をできる体制にさせていただいて、控え室に来てもらえませんか』

あ、やっぱり？と中平の顔は苦笑いで強張った。

中平は観念したように溜め息を付いた。

「分かりました。五分でそちらに伺います」

『申し訳ありません。助かります』

携帯の電源を切り、パジャマから審判服に着替える。

4080\*20

ドア脇のボタンにそう入力すると、鍵が解除される。ドアを開けると、ピポーンとい

う音が鳴る。夜勤勤務の緊急出勤の場合、通常料金の1.5〜2倍の給料が貰える。それの合図が音だ。

加えて、今主審の半数はボイコットをしている。溜め息を付いている場合ではない、

と気持ちを切り替えた中平は扉を開けた。

そこには懐かしい仲間がいた。

「中さん、久し振りですね！」

「やあ、幹原ミキモト！それに栗栖も」

幹原・栗栖両線審は中平のもとで五年この仕事をやって来た。最近組む事は減っていたが、今回はワンボランチでない事に加え、馴染みの人の方が仕事がいやしいと判断したためだった。

「ちょっと遅れました…！皆、久し振りじゃーん！」

「根元も！このチームでやるのは五年ぶりだな」

根元陽輝も、以前彼らのチームだった。

「確かにな、このチーム！」

「僕も一年のやって来たからなあ…」

「聞いたぞ？中平、その対象者の事…」

幹原は舐める様な目でじつと見た。

「見事に振られたよ…それに、擦れ違いの恋だったんだ。見ていられなかったよ…  
彼も、対象者をずっと好きだったんだ…なのに、素直になれなかった。そして、目の前で…死んだんだ。彼の慟哭が、まだ耳に残ってるよ。“いつもみために、笑ってくれよっ!”…やりきれなかった…彼女は直ぐに転生した様で、鏡界には来なかったしな」

暫く、黙りこくる線審と予備審。

「って、だめだ。こんな事やってたら次の仕事に障る」

暗いこの場でやっと喋ったのは根元。三人は少しホツとした。



職業：警視庁刑事部参事官  
状況：銃殺

誇り：部下

目標：警視庁の内部告発

ロスタイム：10日間。

\* \* \*

「克己……って、かつちゃん!？」

中平は仰天した。

「……何ーっ?!」「」

幹原・栗栖・根元も知っていた。

元々、彼らは幼少期からの知り合いで高校辺りから疎遠になったが、何の因果か鏡  
界で再会したのだ。その同級の一人が今回の対象者である館平だったのだ。

「かつちゃん、頑張ってたんだ。でも内部告発って……」

「リスクを伴う事してたんだ…それを明かされたくなくて、警察が殺すのかよ…」

四人の表情にやり切れないものが浮かんでいた。

「仕事の際に、一つ留意事項があります」

控え室の窓が煌めいた。

「今事態は急を要しています。他の審判と遭った場合は情報を交換してください…会話を認める様、今案を通してはいますがなかなか上の方は分かって下さらなくて」

「あ、貴方様は??」

驚愕の四人のうち、中平がゆっくりと口を開いた。

「…私は天照大神。審判達よ、対象者と協力し実界の巨悪を暴いて下さい。お願いします」

窓の煌めきが消えた

四人は暫く互いの顔を見て、静かに頷いた。

\* \* \*

満井が庁内から消えた事を館平参事官も聞いていた。

電話が鳴る。松田だ。

「満井君は見つかったのかね？」

『あわわ…しつ、静かに！とんでもないのを発見しました……処刑リストって書いてあります……』

処刑……リスト？

「松田君。君は今……！」

どこにいる、と言いかけたが…振り返れば、銃口が目の前にあった

……

館平は瞬時によける。

パシユン！

左頬をかすったそれは、壁にぶつかる。

「サライ杷…？何の真似です？」

杷航大公安部長は鋭い目で館平を睨み付けた。

「君だったのか。調べさせていたのは」

「…何の事だか分かりませんが」

「誤魔化す事はありませんよ。…あの事件は調べる必要がないのですから」

「…一体、何の事です?!」

「Need not to know。知る必要のない事だと、言いましたよね」

館平も、左手に銃を構えていた。

「そつち、利き腕じゃないでしょ」

「生憎と、僕は両利きでして」

二人は同時にトリガーを引いた。

バアン！

ピーーーーッ！

『館平参事官！？』

銃声が聞こえたので、彼は仰天した。しかしすぐに参事官の声が聞こえてきた。

「ハハ、大丈夫さ。それより君は今どこなんだい？」

『警視庁の遙か下…と思います。資料室のすぐ横の壁が扉になっていて』

「…そうか、で松田君」

『ここは恐らく、執務室かと』

「そこで待っていてくれ。私も行く」

『えっ?! ちょっと参事か』

館平は強引に電話を切り、急いで資料室に向かう。

もちろん同郷の審判達と共に。

「ここか、……」

資料室の壁を触れていくと、妙な所があった。

そこを押してみると…

カチッ

と音がして、壁の扉が開いた。

「なるほど、ここなら分かりづらいな」

左ポケットにいれていたペンライトを点ける。審判達が入ったのを確認し、扉を閉める。

「!!!!!!」

五人の足場が急速に動き出した。

「このままじゃ…よし、一か八かだ！飛ぶぞ!!!!」

審判達は仰天した。

「えーっつ?!」

言うが早いか、五人は同時にジャンプした

つまい事、足場に乗ることが出来た。

「…なつ、大丈夫だったろ？」

「かつちゃん、相変わらずだな」

中平は顔を青くしていた。　　と言っか、審判達は一様に青くなっていた。

「ショートカット出来たみたいだしな」

ホレ、と館平がペンライトを当てる　扉だ。

扉には　執務室　と書かれている。

そつと扉を開ける。

（参事官！こっち、こっち）

と松田が手招きしている

その隣りに、何故か予備審がいた。



しかし、松田には見えている様子がない

(須川、確かお前満井対象審判だったよな。何で此所に?)

中平が予備心に言った言葉の中に、館平は仰天した。

(満井君も……か……!?)

(?……参事官、どうされましたか?)

(いや、何でもない……これが処刑リストか?)

だ…  
どの名前も、見覚えがある。ここ最近で死んだ刑事の名前だから

(死因も一致しています……これ以上の証拠はありませんよ。それに、  
見てください。

一番最後のここ……)

2008・4・13 満井富士子 銃殺

(三日後……殺されるって事ですかね……?)

(かも知れんな。ん?)

中平が須川から聞いた情報に依ると、満井はこの部屋を出たすぐの  
独房に軟禁されて  
いる様だ。

(松田君は先に戻ってくれ。私も満井君を連れて戻るよ)

(!.....わかりました)

通りすがりの看守を気絶させ、鍵を失敬する。

独房のキーは案の定その鍵で開いた。

まだ昏睡状態の満井を抱えて、そつと執務室に戻る。

外に出ると、松田がいた。

見れば、階段がないのだ。だが、壁に何か違和感があり、そこに鍵  
を翳すと...

「認証しました」

の音が聞こえ、足下からエスカレーターのように階段が出て来た。

スルスルと伸び、ついに資料室に戻った。

何故か周りから歓声が聞こえた。が、やはり松田には聞こえていない様だ。

青嶋『冷静かつ迅速なプレイはまるでロナウジーニョの様でした!』

前田『素晴らしいとしか言い様がありませんね。情報に依ると、館平の直属部下が彼等の課に当たるわけですね』

青嶋『部下想いの良い上司です!』

前田『ただ、この場合はイエローの様な気が致しますが…』

青嶋『救出に必要な事のため、適用されません』

前田『なるほどね』

満井を医務室で見てもらっている間に、須川は満井に起こった全てを話してくれた。

6 / 0 8 : : 3 0 : : 0 0 . 0 0

9 / 2 3 : : 0 0 : : 0 0 . 0 0

今は 4 / 1 0 . 2 3 : : 0 0。

(…: そうか、きっと私が指示して来た事件にあるんだと思う。満井君自身は知らない

…: 警察の裏を調べて貰っていたんだ)

五人は仰天した。

(…: 後少しなんだ。手に届くまで後少しなんだ)

(…: かつちゃん……)

遅れて、加藤・銛鋤が慌てて駆け付けて来た。

「満井さんは大丈夫か!？」

「怪我とかはなかった?!」

「同じくロスタイム中の館平さんに助けてもらった。薬で眠らされてただけで、怪我はなかったよ」

「「そつかあ……」」

後ろから後六人やって来た。

「君は確か…科捜研の夜来君」

「館平参事官！」

二人は互いの審判を見て、ロスタイム中だと言つ事を知る。

「…そちらの青年君は？」

「彼は満井さんの彼氏で秀英新聞社社長の久遠卓志さん。彼の父親が、上にいると見て間違いありません」

「富士子…は、無事に？」

無事、ではなく既にロスタイムであるが、館平は口外しなかった。

「薬で眠らされただけだ。だが、危険である事に変わりはない」

その言葉に、卓志は顔色を青くした。

こちらで会話をしている間に、審判らは情報交換をしていた。

松田と久遠が話し始めると、紫苑は館平に近付いた。

「夜来君」

「はい？」

「満井君がロスタイム中に殺されるかもしれない…勿論、君も狙われるやも知れない」

「そうですね…」

「だから、しばらくは秀英新聞社に本部を置いた方が良いと思う。庁内じゃあまりにも危険過ぎるからね」

「…妥当ですね」

久遠とも相談して、会議室を一室貸してくれる事になった。

暫くしてから意識が戻った満井と軽く話し合い、五人（+審判十一名）は新聞社に急いだ。

「…参事官も…ロスタイム、ですか？」

満井はこっそり耳打ちした。

「相打ち覚悟だね。撃ってきたのは、杷官房長長官……恐らく、影の警視庁を仕切っている今のトップでしょう。」

満井と紫苑は驚愕した。

「それに満井君に指示し続けていた調査は、彼等に関する内部問題だった。だから、

君は狙われたんだよ…危険に晒したのは、僕の責任です」

「二週間前の、女子高生連続暴行事件ですが、あれは」

満井が心当たりを呟くと、館平はうなずいた。

「君を探していた警察内部の犯行だ…」

\* \* \*

その会議室は割と狭かった（と感じたのはロスタイム中の紫苑・満井・館平）。

満井は加藤と銚鋤を見て、上坂主審の看病しろと促した。

二人は頷いて、会議室を後にした。

女性二人と別れて、仮眠を取る

気付けば

4 / 1 1 | 0 : 0 0 だった。

6 / 0 7 : 3 0 : 0 0 . 0 0

6 / 1 8 : 1 5 : 0 0 . 0 0

9 / 2 2 : 0 0 : 0 0 . 0 0

満井はパソコンで情報を纏めていた。

朝。



6:30。紫苑が起きると、満井はまだパソコンに向かっていた。

「おはようございます…満井さん、徹夜ですか？」

「おお？…あら、ホント」

白んできた空を見上げ、背伸びする。

「んー…今まで分かった事を纏めてた」

「凄いですね。さすが記者…」

「と言うが、眠らされていたから妙に目が冴えちゃってね」

後ろを見ると、審判達はうたた寝していた。

すっと立ち上がり、毛布をかける。

「そっぴや、満井さんの主審はどうなさったんです？」

「風邪だね。線審二人に看病頼んだの。その為に昨日家に帰らせた

の

「あ、そうなんですか…」

「そうでなくても気温変化が激しいからね。あ、私の場合鼻炎だから」

ゴミ箱を見るとティッシュのゴミが山のようになっていた。

紫苑が呆気にとられていると、またティッシュが積み上がる。

「大丈夫ですか？」

「春先はダメだわ…」

「花粉症ですか」

「うん、…クシヨイ！」

手で抑えるが、くしゃみの勢いが凄い

審判達が目を覚ました。

「満井警部…ちょっと気になったんですが」

「今回の事件の事で？」

「いえ、…そのう……それです」

紫苑が指したのは満井のバストだった。

確かに紫苑と比較すると驚異のふくよかさだ。

「これでも抑えてる方だよ？外すと…ホラ」

ブラを外すと、更にポリウムが増えた。見た感じGは超えている。

「でかつ！」

「5kgあるんだって、計ったら」

「…凄いですね……」

「紫苑さんもそれ、結構抑えてるんじゃない？」

「あ、分かつちやいます?」

「あんまり抑えつけ過ぎるのもダメでしょ」

満井は紫苑の前ホツクを開けた。

ポヨンッ!

満井とそう違わぬ胸がせり出して来た。

「きゃあつ!?!ちよつと満井警部っ、もう!?!」

紫苑が胸を慌てて抑えてホツクを留めようとするが、満井がそれを止めた。

「それは抑え過ぎよ!もつと大事にしてあげなくちゃ!?!」

満井が紫苑の胸を優しく揉みほぐすと、

「あつ...?!」

思わず声が漏れる紫苑。

「これ、私のブラで丁度いいくらいよ」

「んっ…ん…」

満井の指が敏感な所にぶつかる。

「んあ…っん…」

紫苑が顔を赤くする。敏感に身体のおちこちが反応する。

が、満井は気付かない

紫苑の審判が真っ赤になる

ただ、主審の遼はまだ寝ていた。

「あ…私、トイレいきたいです………」

「トイレの場所分らないわよね？」

審判もついて行くことするが……

「審判さん達…それ、セクハラ。すぐ戻るから」

と、満井が止めた。

\* \* \*

十五分後。

満井と紫苑が何故か疲れた顔で部屋に戻ってきた。

「はあ、警部…」

「……ゴメン。抑えきかなかったね……」

「初めてなのに…」

「でも、可愛かったよ？」

「まあ……変な男にやられるよりまし……かな」

「ま。わかるかも。ははっ」

審判達は顔を見合わせて何だろっつという顔をする。

「でも、私のブラがぴったりで良かったわ」

「ありがとうございます。服まで御借りしちゃって」

「うっん、良いのよ。でも、その服似合ってるわよ」

満井が紫苑の肩を叩く。

紫苑がはにかむその動作が非常に乙女で、審判達はドッキンとした

満井は逆に男らしく感じられる。

少し長めの髪を後ろで縛っているからかもしれない…

「さて。松田起こしてくっか」

紫苑がパソコン画面を見ると、メールが届いていた。

「あら？」

その件名が気になり、開封する紫苑。

【霞ヶ関心中事件に関する証拠資料】

“自殺する際、通常刃の角度が顎の角度と等しいのに対して、僅かに平行ではないことが分かりました。抵抗等の痕がない為、被害者の知り合いと思われます”

写真が添付されていた。

確かに、ほんの僅かであるが角度がずれている……やっぱり、久遠社長の御父様が

……？

でも、動機が分からない。

「…動機は、証拠湮滅だ」

遼が、紫苑の後ろにいた

「えっ？証拠って？」



紫苑が振り返って問い掛ける

\* \* \*

思い出した。

思えば、正宗が入庁してからの行動 初任給の異様な高さ

仕事の事を頑なに話さない 全てがおかしかった。

そして、ある非番の日……疲れ果て、机に伏せって寝ている正宗を見つけた時。

パソコン画面が起動していた。

見てはいけないと思いつつ視線を動かすと それは奇妙な物だった。

科学捜査研究所で働いていると正宗は言っていた。

だが、映し出されていたのは幾つもの表計算ソフトにただ数字が羅

列されていた物  
だったのだ。

その数字はよく見るとある法則があった。

一番左が070で始まる物、次が日付、五桁以下が0で統一、そして記号の+・-が。

「070…当時の携帯の頭ナンバーね」

紫苑は思い当たるものを呟いた。

ふと、分かったんだ。

この番号の人にこの日付の時、何百万或いは何千万、受け取った或いは引き渡したの  
では……と。

「!?!」

紫苑は言葉をなくした。

あの時はそれがなんなのか分からなかったが、……恐らく今と言う多重帳簿だろう。

当時のデータは残っていない。だが、正宗は自分の危機を感じとりその帳簿を別の処

へコピーした……それは、紫苑がずっと大事にしていたくまの縫いぐるみにいれていた（その縫いぐるみは今も健在で紫苑の安心毛布を担っていた）。

「じゃ……あの縫いぐるみの中に多重帳簿の証拠があるの？」

紫苑は鞆に入れていた縫いぐるみを出して、丁寧に背中中の縫い合わせを切っていく。

旧式のMOが二枚出てきた。

カラン

遼と紫苑は顔を見合わせた。

「紫苑さん、大変よ!!!」

満井が血相変えて飛び込んできた。

「わひ！？な、何がわかったんですか？」

「分かったの、車爆弾の実行犯が！」

「えええ！？」

夜来の二人は仰天する。

「変電所の監視カメラの反対側に鏡があったでしょ？その部分を拡大して再生してた

ら意外な人物が！……そのMOは何？」

「父さんの……遺した証拠です」

今度は満井がびっくりする番だった。

デバイスを追加して、MOを読み込むと 数字が羅列されていた。それもより詳しく、より難しく書かれていた。

「こ、これが……夜来正宗が遺した証拠……」

「でも、どうして父さんがこれを？」

満井の手には、写真があり…鏡に映り込んだ人物がはっきりと分かる物だった。

それは、満井が最初に会って、案内をしてくれたあの警察官だったのだ……

\* \* \*

落とし物かな、と思った

勅使川原晴臣は

テシガワラハルオミ

指輪を拾いあげ、周りを見る

何かを探している久遠氏を確認し、

「ボス、落とし物ってこれですか？」

と歩み寄る。

「！ ああ、これだ！確か、勅使川原と言ったな？ありがとう」

「ところで、ボス」

「ん？」

「見つけなくて宜しいのですか？」

「……元々気乗りしない相手だし、勅使川原君が気にしなくても良いよ」

久遠はゆっくり立ち上がる

「上層部ウエが何と言っか……」

「……これ以上、苦しみが続くのなら、私は殺されても良いと思っているよ」

「！しかし……」

「最後の仕事が控えてる。死んでしまった細に誓ったんだ……ここで、終わらせる。」

もう、誰も傷つけたりはしない」

手にした指輪をぐっと握り締め、左の小指に嵌めた

二つの指輪が寄り添うように

久遠を励ましている

「ボス……俺にもっ、手伝わせて下さいっ！！」

久遠は仰天した

「とてもリスクのある仕事だ。下手をすれば死んでしまっやも知れ

ない！」

「でも、俺……」

「勅使川原君。いいか？全てを終わらせるのに、犠牲は少ない方が」

「わかってます！でも……それでも俺はそばにいます」

久遠は頭を掻いた

暫くして、観念したというように

「覚悟はできてるかい？」

と尋ねた

「はいっ」

晴臣は元気よく、しかし小声で宣誓した

天照大神の考えに、議会は漸く折れた

実際に、コミュニケーションに迫られたケースを分析し、それによって  
ロスタイムを心残りさ

せることなくしている事を理解してくれた

だが、その判断がちょっとばかり遅れてしまった

事態が深刻化している実界の状況に、審判達が巻き込まれてしまう

予想していた以上に、悪の力が強い

そんな折り、

新たな対象者がアップされた

「こ、この御方は……」

T o b e C o n t i n u e d ……!

-



FILE・16 CONVERT（後書き）

大変お待たせいたしました！

これから先が一番大変なんです。

この話は後二話で終わります。

次の話は大きく改変、最終話は完全オリジナルで展開します。

FILE・17 HADES（前書き）

一年以上のご無沙汰です。実はこの話を出そうと思っていた時に3/11の東日本大震災が起こり、ずっとタイミングを見ておりました。

半年も経過してもなおこの話を出すことに抵抗はありましたが、一年以上も更新あけていましたのでどのように投稿するか悩んでいた時期もありました。

H A D E Sはそのタイトルの通り、死者の国の支配者 日本語で言うなれば閻魔大王の事であります。彼はもともと心優しき神でしたが、ですがある咎をしたことでこの仕事を受ける事になった。彼は自らの咎を悔いながら人の裁きを続けている。それが彼の唯一の贖罪だから。

では、本文をどうぞ。この話はロス〓タイム〓ライフです。念のため。

「一枚がこの数字データなら、二枚目は恐らく、顧客名簿ね」

満井はエクセルに羅列された不規則な数字を見て呟く。

「問題は…何故父さんがこのデータを持っていたのかって事なんだけど」

「詳しく調べないと判らないわね。このデータをこっちのデータに付き合わせれば、

お金がどついう動きをしたのかより詳しく判る筈よ」

「警部！あの警察官ですけど…」

松田が資料を持って駆け込んできた。

「都村健二34歳、國分寺交番勤務で勤務態度はまじめで特に怪しい動きは」

「充分怪しいわね。もしかしたら、その都村つての警察の闇組織に取り込まれてる恐れが」

「！！闇、組織ですか……」

松田はその存在がある事を聞いて固まる。

「松田君も見たでしょう？庁内にあんな大掛かりな仕掛けを作ったのは他でもなく、警察の人よ、それもかなりの位の高い人たちが捌く場として」

「……可能性は、大いにありますね。何ですか、このパソコンの数字……目がちかちかしますね」

松田はパソコンに規則的に並んでいる多くの数列を見て目をパチパチさせた。

「いい若いもんが何を抜かすか」

遼と満井の声がかぶる。

紫苑は思わず吹き出した。

「ふふっ」

「これはそんな闇組織が動かしたお金よ」

満井は冷静に分析する。

「しかし…これだけの資金を、どうして彼らが…」

「そこが私にも分からないのよね。そして紫苑のお父さんがなぜこんな帳簿を紫苑に託したのだろうか……」

三人（+五人）が考えていると今度は館平参事官が（審判らを伴って）入って来た。

「満井君、紫苑君」

いやに神妙な顔をしている。

「参事官。まさか……」

満井はその顔の表情で何があったのか察した。顔を真っ白にする。

「…一瞬だった。その隙をついて、自殺したよ」

松田も驚きを隠せなかった…

館平が口惜しそうに、車の下に爆弾を仕掛けた証拠の写真を机にたたき付ける。

「くっそ……」

写真に写し出されている津村の表情こそ見えなかったが、手に持っている物ははっきりと確認できる。小型爆弾、だ…

\* \* \*

「主審見習の雪平夏海さんですね。天照大神と申します」

「はい」

寝ぼけ眼で受話器を取る。

聞き慣れない声だ…天照大神って…誰？

焦点の合わない目で目覚ましをぼんやり見つめると、まだ七時にもならない。

「何でしょうか？…ふああ」

「本日より、雪平には任務に就いてほしいのです」

目をシバシバさせた後、雪平は頭にその言葉が到達するまでにかかりの時間が掛かった。

「…はい？…えっ、私が主審やって良いんですか」

言葉の意味が漸く脳に到達して、驚いて飛び起きる。

「あなたのキャリアを見て、私が意見を通しました。あなたに頼みたいのです」

雪平は目をキラキラ輝かせた。

「分かりました。すぐ支度します」

電話を切ると雪平はすぐに長い髪を後ろで縛り、黄色の審判服と白いボーダーの短パンに靴下を履き、首に青い笛を掛ける。

一瞬笛がキラリと光り、黒くなる。

姿見の置いてある玄関に立ち、テンキーを押す。

4080

鍵の解錠音が聞こえた後で、扉を押し開けると…

いつもの研修場ではなく、審判控え室に出た。

\* \* \*



目に飛び込んで来たのは、碧い羽衣に藍色のきらびやかな衣装に身を包んだ御方だった。

「見事です。連絡を受けて30秒で待機できる機動力…とても女性とは思えません」

その御方の後ろには、平居・金井線審と水沢予備審がいる。

「は…はあ…」

「今回の対象者の行動如何で全てが決まっています。審判達には公正な判断の他に、対象者のサポートも必要です」

対象者のデータが渡される。その人物は雪平には聞き馴染みのある名前だった。

久遠 侑司（51）

職業：“夜叉”幹部

状況：毒殺（ヒ素に依る）

誇り：？

目標：“夜叉”殲滅

ロスタイム：六日間

\* \* \*

「この“夜叉”って何ですか？」

雪平は仮にも実界で刑事だった。知らない筈がない。でも、聞いた事がなかった。

「実界の巨悪を組織する者達です」

雪平はぴんと来なかった。

「巨悪……ですか」

雪平はじつとデータを見つめる。

「この元“夜叉”メンバーの三人なら、詳しい事情などを知っています。そして審判らが対象者に話しかけるのは罰則でしたが、今回よりそれは解除されました。必要があれば対象者や他の審判らに重要事項を伝えてください」

雪平は静かに頷いた。

“夜叉”

この聞き慣れない言葉に雪平は眉を寄せる。

「…夜叉は元々、警察の一組織でした」

天照大神がその場から離れた後で、平井が呟くように言う。

「…警察の？」

雪平はちよつとビックリした。

「上層部と刑事が直結して事件を解決させる為に作った部署で、事実設立された当初は検挙率が高かったのですが…」

平居も話しだす。

「取り調べの最中に被疑者が刑事を殺してしまってから、状況は一転しました。“夜叉”は一時警察の奥に隠れ込み、密かに活動を続けていました…」

「私達が暇を持て余している時、会議室から上層部の話し声が聞こえてきました。それは、“夜叉”を隠れ蓑にして暗殺部隊を設立する話でした……それを聞いてしまった私達は銃で殺されました」

\* \* \*

侑司と勅使河原は過激派から押収した小型プラスチック爆弾を至る場所にこっそりと設置する。

赤いカナリアが作った500円玉爆弾は、本当によく出来ていた。

それを勅使河原が改造して、スイッチに反応して爆発するようになっていた。

一段落ついたところで、二人は自販機で飲み物を買う。

「これで、ここは壊滅するな」

「そうですね。…でも、よろしいんですか？」

「未練はない…ちょっと、失礼するよ」

侑司はコーヒーの入った紙コップを椅子に置き席を離れた。

喫煙室で煙草をすう姿を、勅使河原は目撃した。

「勅使河原晴臣？」

呼ばれた勅使河原は横を見ると、槍溝監察官が渋い顔で立っていた。

「槍溝さん?!」

「久遠とあちこち周っていた様だが」

ちらりと椅子の上にある紙コップを見る。

「まだ入って日が浅いので、久遠監事に案内してもらってたんです」

「……そうか」

「あ、よければどうぞ」

と勅使河原はまだ口のつけていないコーヒーの紙コップを渡す。

「……すまないね」

槍溝監察官はコーヒーの焙煎のいい香りを漂わせながらその場を去った。

内心、勅使河原はホッとしていた。

……潜入捜査も楽じゃない。ましてや、これから忙しくなるから油断も出来ない。

それにしても、槍溝監察官もここを出入りしている事に勅使河原は仰天した。

一息ついて、新しくかったコーヒーを飲む。

「ふーっ…危なかったなあ」

「何がだい？」

「あ、久遠さん。いえ、なんでもないですよ」

いつの間に戻ったのか、久遠侑司は紙コップを持ち、椅子に座っていた。

「そうか？…ちょっと冷めちゃったか」

侑司はコーヒーを一気に飲むと、

ドクン

耳元で自分の鼓動が聞こえたような気がした

気付けば目の前に四人の審判が立っている。

雪平主審は自分達の事を言わない様に、左手人差し指を口の前に翳していた。

「……………???.?」

何が起こったかなんて分からない……

ただ一つ言えるのは、コーヒーの味がおかしかっただけである。

「そのコーヒー、ヒ素が入ってたんです」

雪平主審が紙コップをさして静かに言った。

(ヒ素って………毒?!)

侑司はさつと顔色を変えて、紙コップを見た。

勅使河原はそんな侑司を？マークで見つめている。



「ん？どうしたんですか、久遠さん」

「あ？いや、何でも……何でもない、よ」

横にあるタイムボードと、時計を確認する。

7 : 10

5 / 23 : 59 : 28 . 15

\* \* \*

卓志はまだ寝ていた。

これから起こる全てがまさか自分に関わっているとは思っても  
しな  
いで……

\* \* \*

満井は欠伸をして掲示板を見た…後、六日。

紫苑は別のコンピュータで多重帳簿の真相を明らかにしようとしていた。

それは意外と早く整理できた。

しかし、そこにあぶり出た名前はあまりにもありえない人物で……紫苑は開いた口がふさがらなかった。

「……………満井警部」

「ん？何が分かったの……………！！！！」

その名前を見て、満井も言葉を失った。

この当時主任監察官、現在は警察庁長官の……濱野巨。

n e e d   n o t   t o   k n o w

今なら、その意味がよく理解できた。

「それじゃ……私達には手の打ちようがない……！」

満井は歯噛みする。

「でも……ここまで来て……そんな……！」

その時、遼主審のポケベルが鳴った。それは思わぬ朗報だった。

「……！まだ、望みはある」

紫苑と満井は振り返った。

「「え？」」

「「どっしりし事っ」」

と、満井が遥主審に尋ねる。

「対象者の一人がその組織をつぶす計画をたてているようだ」

\* \* \*

「 父さん」

卓志は、父の背中に呼び掛けた。

振り替える父の姿に凍り付く。

服は血に染まり、呆然とした蒼白の顔…

その姿は闇の奥に消えた。

次に現れたのは悲しい顔をしている満井の姿。

「富士子…?」

「」

満井は何かを言った。

でも聞き取れない……

「さん、久遠さん」

卓志がはっと頭を上げると、夜来紫苑が妙にすっきりした顔で卓志のそばにいた。

「あ、…状況は?」

「大丈夫よ。私達の方に風は向いてるから」

しかし、卓志は嫌な予感が胸を過ぎっていた…

そのモヤモヤを突き止める為に、卓志は胸から携帯を取り出した。

\* \* \*

侑司は勅使河原をじっと見る。毒を盛る機会があったのはこいつしかいない。

しかし、審判は違つと首を振つた。

「ん？どうしたんですか、久遠さん」

「いや、何でもない……一番上の人の処に行つて、話つけないかな」

雪平が電光掲示板を受け取り、予備審はうなずいてその場から消えた。

「満井さんについている審判に詳しい事情を聞きに行つてもらつたの」

\* \* \*

「よっ、……っつて、審判多いな!!」

水沢は、彼らが詰めている場所に瞬間移動していた。

「えーと、満井対象の審判、手え挙げて」

自分と同じ格好の審判一人だけが手を上げる。

「俺っすけど…えっと何のようですか？」

「れ？須川一人だけ…主審と線審は??」

須川は苦笑いしてこっそりと呟く。

「それが、上坂さん風邪引いちゃって…」

「あらー……と、こんな雑談してきた訳じゃなくてだな」

「あなたが欲しいのは情報よね、遼主審から聞いてるわ。あなたが来る事をポケベルで聞いたって」

満井本人が情報をプリントした紙を持ってそばに立っていた。

「あ、どうも……」

水沢は満井から情報の書かれたプリントを受け取る。

「処で、そっちの対象って誰？」

須川が水沢に聞くと

「中間管理職のおっさん」

「いや、名前を聞いてるんですが」

「名前？確か、…久遠侑司とかつて」



満井は表情を固くした。

「しかも、毒殺だし……」

水沢には一番立ち会いたくない事案だった。

「そこまできーてない……？ 久遠？ ってーと……」

須川もハツと気付いた。自分の後ろにいる人物こそ、渦中の人物の息子である事に気づいたのだ。

「ん？ どーした、二人して」

水沢は資料に目を通してすぐに、その理由が分かった。そして後ろを見やると、卓志は携帯を見つめていた。

「……元カノと、片親を同時に失うことになるんだな……卓志ってやつは」

こんな残酷な事はない。

「……ちゃんと伝えて。お願いよ」

「わかりました。間違いなくお伝えいたします」

しかし、その必要はなかった。

(…満井……………そうだったのか)

雪平主審の言葉で、侑司は悟ったのだ。彼女は自分より早くロスタイムに入っていた…と。

553

「久遠さん…？」

感慨深げに頭を上げている久遠に、勅使河原が声を掛ける。

「何でもないよ、さて。外に出るか」

毒を呑む原因となった紙コップをゴミ箱に捨て、二人は外に出た。

\* \* \*

ピリリリリ ピリリリリ

侑司はびっくりした。

画面を見ると卓志からだと分かる。

精一杯普通のテンションで電話に出る。

「どうした、卓志？」

『親父は……どうして……』

きたか……もう、逃げない。もう……話す事もなくなるかもしれない。

「どうして、悪の道に入ったか…だろ」

『……うん』

「脅されて…殺したんだよ……ある家族を」

『……ああ……』

「そして、親友を殺した……」

\* \* \*

卓志は心がざわついた。親父じゃないみたいだ…

その先の言葉は、聴きたくない！言わないでくれ！

しかし、その願いは叶わなかった。

『夜来政宗を殺してしまった』

「……………」

『娘の紫苑ちゃんを、一人残して』

卓志は仰天して、隣りにいる紫苑を見る。

紫苑は卓志の視線を感じて横を向いた…もちろん解っているからこそ、ここにいるのは辛い。

「…！」

『それでの成果を見初められ、私は闇組織“夜叉”に入った。その後も何人が殺した。何かあっても上層部が揉み消してくれる……しかし、心はどんどん人としての感情を無くしていった…』

「……………」

『だが、そんな茶番はすぐに終わる。もうこれ以上悲しませる人を』

増やしたりはしない』

「……………俺の傍に…その娘の紫苑つてのがいる。何でだよ、何でそんな事したんだよ！…なあ親父！…」

『……………！…！』

侑司は手が痺れていた。…耳奥で、自分を叱咤する卓志の音が響く。

\* \* \*

『何でだよ！何でそんな事しなきゃいけないかったんだよ！？んな事したって誰も喜ばねえのに…！』

「怖い奴らなんだよ、夜叉つて組織は…俺が殺さなくても…夜来を皆殺しにしていた。娘の紫苑を助けるためには仕方のない事だったんだ…それに、やらなければお前の家族を殺すつて脅されてて…」

侑司の目から涙が溢れ出す。

『馬鹿だよ！何で…！？…俺らを……護る為に、紫苑さんの家族を殺し……え？』

卓志の動揺は向口に漣のように広がる。

涙が止まらない。こんな事が最後の会話になるなんて…余りにも辛すぎる。

「……卓志」

『もう、これ以上誰も悲しませないでくれよ…怖いんだ。自分の回りにから皆がいなくなりそうで……』

「……！！！！」

言葉が出なかった。向こう口も、空気が変わったようだ。

もう、元には戻れない。

坂道から転がり落ちた石は止まることを知らない…

もう…過去には戻れない。

覚悟を決めた表情に

鋭さが加わる

仕事モードに入ったのだ

しかし、いつもと比べると穏やかに分類されるだろう



卓志はケータイを見詰めて

しっかりと握った

これから先に待ち構える悲しい別れなど露知らず

ただ無事を祈った

皆が笑い合える日が来れますように と

祈り続けた……

侑司の元に水沢が戻って来た

「警察庁長官の濱野巨が現在夜叉を取り仕切るトップですね。実行を命じているのは杷官房長であることも確認できました」

終わりが、近い。

彼にはそれが良く分かっていた。

濱野亘の側には、閻魔が居座っていた。

「悪かったな。地獄から呼び出したりして…どうしても、君の力が  
必要になってね」

“本来、こうして天上大神と閻魔が一緒になる事はまずないからの”

「私の力で闇を消そうとしたが、結局は無益な殺生を生み出してしまった。しかも犯罪の片棒を担がれてしまった……迂闊だった。彼らの恐ろしさに逆に飲み込まれてしまった」

“彼らの処分は私が下します。大神様はロスタイム審判員らに詳しい説明をして下さい”

「ああ。難しくはない仕事だからな」

閻魔はドアをすり抜けて、夜叉の本部に乗り込んでいった

【現在ロスタイムを監視している審判たちに告ぐ。我は天照より上の位の天上大神である】

満井の家にいる審判三人、詰め所にいる審判九人、侑司のそばにいる審判四人は顔を上げた。

【濱野亘は私がこの地に転生した際の名前だ】

審判達は驚いて顔を見合わせた。

【よく、聞いてくれ。これからの事を全部話さねばならない】

対象者には天上大神の声は聞こえないので審判達の厳しい表情に皆ビクビクしていた。

「な、なに。これ？」満井

「さ、さあ……」紫苑

「何かあつたんかな……」館平

「……………??」侑司

【…です。それまで、暫く待っていて下さい。ロスタイム対象者を犯罪者にしたくないですから】

審判達は静かに頷いた。

天上大神は久遠侑司がしたことを聴き、驚愕していた。

【すぐに止めさせて下さい！いいですね？そして、満井さんに付いてるのはどうして予備審だけなんだい？】

【もう殆ど治っては来てるんですけど、立っていられないんです…主審の上坂さん】

【そうか…それで副審は主審の傍にいるわけか】

「もう…心配は要りませんよ。何とか…動けますから」

上坂はベッドから立ち上がろうとするが、足が思うように動かず、ベッドにまた倒れてしまう。

「「えっ?!」「」

線審の二人は何が起こったかわからず、上坂を立ち上がらせる。

【触ってはなりません！上坂さんあなたにはその理由がわかってい  
るはずですよ。一度、鏡界へ戻れば症状は治まりますが…強制交替  
を申請し】

「嫌だ！！！」

その声は無常にも、事件に関わっている審判達の心に響いていた。

【…現世で悔いるほどの悪業をしたことを覚えているあなたにとっ  
て、審判という仕事はどのように感じましたか？】

線審の加藤と銚鋤はその言葉に愕然とし、上坂は俯いた。

「人って、あつたかいんだな。…だから俺たち審判が、人生の悔い  
を清算する事は来世にその悔いや憎しみを残さないためにする最高  
の仕事だよ。…きつと、動けないってのは、現世が俺に与えた罰だ  
ろうよ。」

でも、それでも。満井富士子の傍に、私はいなければいけない……  
それが、私の唯一できる仕事。たとえ、それが悲しい結果をもたら  
そうとも…私は彼女の主審だから」

【……あなたの覚悟、伝わりました。では、枷を今から外します。少々痛みを伴いますが…】

「…お願いします」

上坂は覚悟を決めて、線審二人の顔を見つめる。

天上大神が手を翳すと、上坂の体が浮いた。

“ 汝、この罪を悔い、反省したことを認め枷を離す事を許可する ”

満井のベッドルームに陣が浮き出していた。

その陣は磁気を帯びていて、部屋内の磁気物が浮き上がってくる。

ブリッ、ブリッ！

「ぐ…っ！」



上坂の顔が激痛で歪む。上坂の脚には重々しい鎖が何重にも絡んでいる。それは霞のようにも見えるが、確かに上坂を何かに縛り付けているように見えた。

「お、おい、あの霞んで見えるのって…」

銛鋤は一度だけ、研修で見たものに酷似していた事に気づいた。

「…自縛霊の鎖だ。現世に断ち切れないものがあると、その鎖が霊をからめ捕る…って」

加藤も見たことはあるが、勿論彼も研修でしか見た事はなかった。

「ぐ、あああ…っ!」

霞んでいた鎖が、次第にはっきりし出すと、激痛がさらに強くなる。

だが、鎖はまるで生きているようにくねくねと動き出したのだ。

「う、わぁぁぁぁぁっ！！」

【！】

鎖はまるで蛇のように、上坂の体に絡みつく。

“ 神の御名において、呪縛を滅する事を許可する！”

鎖は時間が止まったように動きを止め、次の瞬間には跡形もなく消えうせた。 陣と共に。

上坂の体は、ベッドの上に軟着陸した。

「ぐ…うっ！…いってえ…」

「主審っ！」「」

上坂は立ち上がって、足の状況を確認する。足にさっきまで絡まっていた鎖の跡が残っている。

「…大丈夫だよ。行こうか」

その上坂の顔はとても清々しく見えた。

「久遠侑司さん、ちょっと待っててもらっていいですか」

「？（何かあったのかい？）」

侑司が足を止めたので、勅使河原は歩みを止めた。

「久遠さん？」

侑司は勅使河原に向かい、右手を払って先に行けと促した。

何が何だかわからない勅使河原は先に秘密の通路を通っていった。

「…そんな事が。」

「ええ、ですから今ポケットに入っているスイッチを壊してください」

「…壊しても作動するようになっていて。どうにも出来ないさ。今更」

雪平主審を初めとした四人の審判は愕然としていた。

「なんて事を…！」

「…どつちにしろ、ここはもう滅んでしまえばいいんだからな」

侑司の目は明らかに正気を失っていた。

闇の向こうへ、スイッチを放り投げ秘密の通路に向かって走り出す。

「……………」

四人の審判はそれを止められなかった。

「これで全てが終わる！クハハハハハッ！あーっははははは！」

ガシャーン…

遠くで、スイッチが壊れた音が虚しく響いてきた。

ドン…ドン…ドン…ドン…ドンッ…！！

それはまるで花火のように、爆発音が警視庁の奥深くで響き渡った

……

途端に、久遠侑司の傍に閻魔が現れた。

“そなたは多くの犠牲を出した。そなたには転生の力は消えうせた。  
…未来永劫、そなたの命は地獄の苦しみを味わうが良い”

審判達は凍りついた。 彼が…地獄の審判を下す閻魔大王…！

「……ああ、覚悟はしてたさ。卓志…ごめんな、こんなバカな親父  
で」

“…よろしい、神が定めたロスタイムは無効となり、そなたの魂は  
地獄へ向かうことになる”

『業の魂よ、一生地獄で悔いるが良い』

閻魔がそう唱えると、予備審の持っていた電光掲示板の光は消えう  
せ、

久遠侑司は閻魔と共に消えてしまった。

刹那、侑司に付いていた審判達は全員鏡界へ強制送還された。

コッー……ン

勅使河原は後ろで何かが落ちるのを聞き、嫌な予感がして来た道を戻った。

「久遠さん？…久遠さん、どこですか？」

辺りを探すが、見つかったのは先程息子と話すのに使った携帯だけが数メートル戻った先で落ちていた。

拾い上げて、携帯を開いてみる。

勅使河原は絶句した。

待受けには、ただ、一行こう書かれていた。

「地獄流し 完了」



天上大神 濱野亘は、溜息を付いて眉間に皺を寄せ

「遅かったか……」

と呟いた。

彼は悪に染まりすぎて、善悪の区別が無くなる所まで堕ちていた事に、気づいていなかった。

最後のチャンス ロスタイムでもなお、それを改善することは出来ず、また彼は多くの死傷者を出した。

ただ、最後の最後で彼は正気だった。それだけが、彼の救いです。

亘はもう一度溜息をついて虚空を見上げた。神様が辛いと思う瞬間がこれだった。

悔い改めない者が無常に地獄に連れ去られる この瞬間が……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...

FILE・17 HADES(後書き)

2011/2/26)校了(2011/9/22)NOS投稿)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5647h/>

---

Back to the Lifetime

2011年9月29日12時04分発行